

は、毫も發達を見ずして廢せられ、やがて之に代つて健兒・選士の制が起つたが、之もまもなく廢れてしまつた。また同じく京都の六衛府も直ちに振はず、やがて之に代つた檢非違使廳も、まもなく單なる虚廳となつてしまつた。即ち地方は殆ど無政府・無警察の狀態だ。どうして群盜の蜂起及びその横行が無くして濟まうか。成程朝廷では、或は追捕使を派遣し、或は盜賊の入京を遮らんとて、關塞を設けられた。されど何れも、畢竟するに、將に決潰せんとする堤防への彌縫策に過ぎなかつた。目睫の間に迫る大汜濫の日を、切に思はしめるのみであつたのである。

【群盜の討伐】 源賴光が、源綱・坂田公時・平定道・平季武の四天王と共に、兇賊鬼同丸及びその徒黨を滅盡した武勇譚。藤原保昌が、兇賊袴垂を心悴せしめて、剛膽を謳はれた物語。紀貫之が、任滿ちて土佐から京都へ歸らんとして百餘日を費し、而もその途中殆んど毎日海賊の出沒に膽を寒くした叙述の土佐日記。それらは何れもこの時代のことであつた。

● 武門・武士の興起

● 武門・武士の起原

【皇族から起つたもの】

平安時代のはじめ、皇族賜

姓のことが相次いで行はれた。皇族に姓を賜ふて臣下に列せられることそれである。所で之等の人は、初めの間こそ、各々その器量に應じて、或は大官となり、或は納言となつて、朝廷に仕



へることを得たけれども、後、藤原氏が政權を壟斷するに及んでは、志を都に得ること中々に難く、従つて續々地方に降つて、國司となるに至つたのである。然るに國司の職は俸祿が豊かである。だから之等の人は、いつしか國司の重任を望み、やがては遂にその地に土着し雄視した。即ち住人である。而して實に武門・武士の起原である。

【藤原氏から起つたもの】 また藤原氏の一族と雖も、志を京都に得ずして不平の者は、續々地方に降つて行つた。而して同じ経路で、武門・武士の起原をなすに至つたのである。

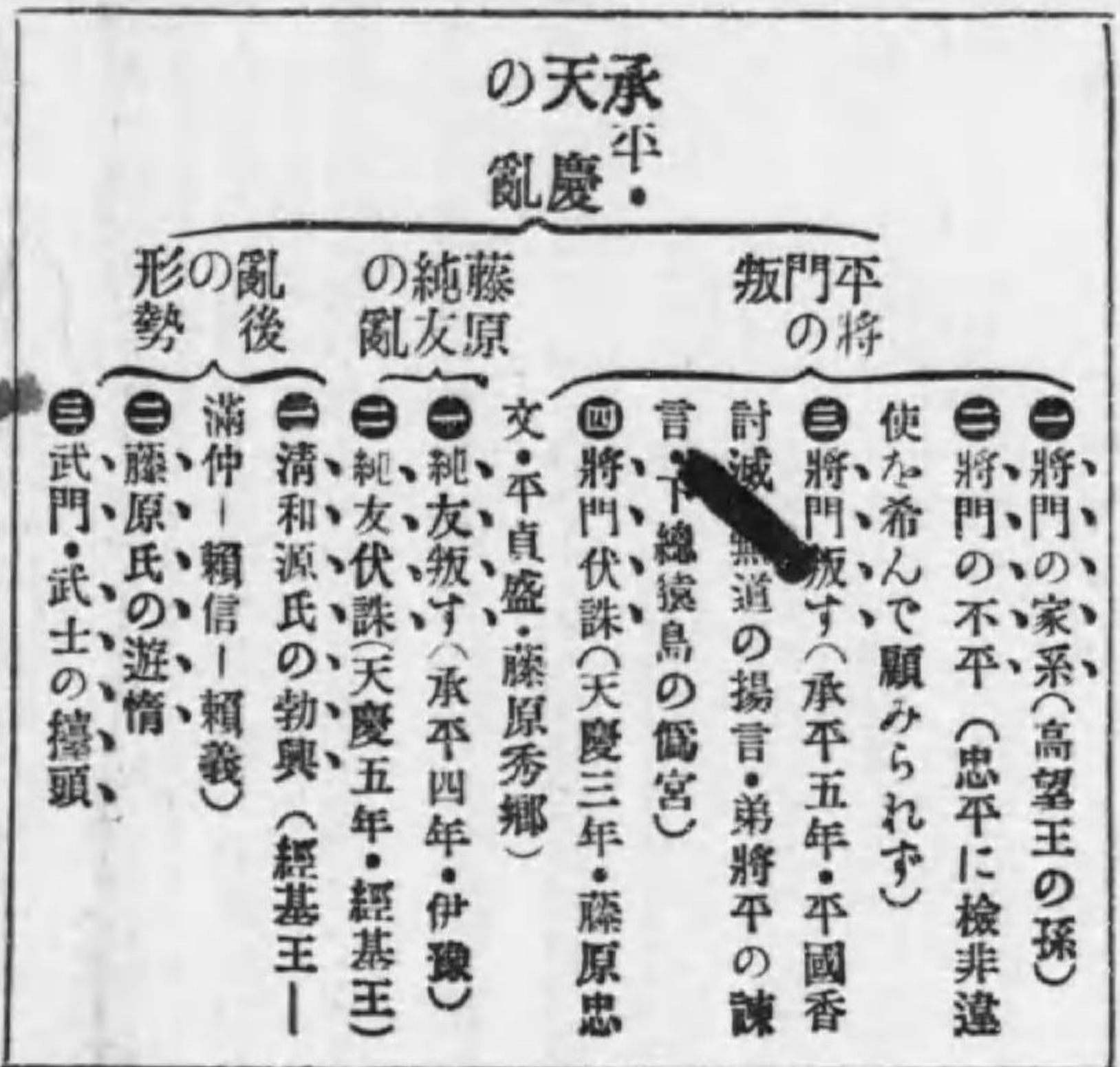
【國司の重任】 任期満了するも京師に歸らず、再度その職に止まることを重任と云ふ。勿論この重任は、最初の間は願つても許されなかつた。けれども次第に政綱紊亂するに及んでは、流石に如何ともする能はず。許・不許を問はず、國司等は勝手に重任することとなつてしまつた。但し國司の任期は、大寶令以來六年・五年・四年・二年等と、種々に變動はしたが、承和二年以來四年を以て永式としたのである。

● 武門・武士の強大 第一、當時地方は全く紊亂してゐた。されば彼等は、自衛の必要上、子弟・隸僕を養つて私兵となし、之を家子・郎黨、或は家人と稱し、多きは數百にも及んでゐた。實にそれぞれ宛然たる一小國だ。而して之等の諸小國は、第二、その領主が名門の出であることより、地

方民から多大の尊信を博し得た。第三、中央政府の干渉の皆無なるに乗じて、日に日に勢力を強

大にした。ああされど、之等諸豪族の間に、やがて弱肉強食の争が次第に露骨となり、遂には武家の棟梁として、平氏を出さう、源氏を出さう、更に進んでは武家政治七百年の世を作らうとは、流石に彼等とても夢想だにしなかつたに相違ない。

【任人】 父祖以来一地方に永住せる者の稱にして、即ち新來の者に非ざる稱呼である。戦陣に臨んだ武士の名乗り、「吾こそは何々國の任人何々」と大音聲を掲げるのは、一地方に於ける舊族なる事を誇る意である。



【家の子】 主家の一族の者にして、而も所領ある者を云ふ。

【家へ】 主家の一族の者ではあるが、所領なき者を云ふ。

【即黨】 主家の一族の者でもなく、また所領もなき者を云ふ。

平將門の亂 ●將門の家系 桓武天皇の曾孫高望王は、平姓を賜はり、かつ上總國司に任ぜられたから、之よりその一族が大に東國に蔓延した。平將門は即ちその高望王の孫である。

●將門の不平 かくの如く將門は名門の出である。而も性甚だ勇悍にして頗る武藝に達者であつた。されば彼は都に出でて、攝政藤原忠平に仕へてゐたが、やがて檢非違使たらんことを希むに至つた。所が檢非違使は要職である。要職には藤原氏以外を任じたくない。之が藤原氏を代表しての忠平の考であつたに相違ない。だから彼は、將門の希を全く顧みなかつた。そこで怒つたのは將門だ。直ちに都を去つて郷國下總に歸り、遂に公然徒黨を糾合した。

●將門叛す 第六十一代朱雀天皇の承平五年(一五九五年)、將門は、まづ己が伯父常陸大掾平國香を攻め殺したのであるが、之より諸國を攻略すること愈々甚だしく、次第に關八州を併呑して、叫んで曰く、「吾も亦天皇の裔なり。八國より始めてやがて王城に及ばん」と。かくて天慶二年(一五九九年)、無道にも遂に叛旗を翻した。よりに弟將平は諫めて曰く。

「帝王の業たる、智を以て競ふ可からず、力を以て争ふ可からず。古より今に至るまで、天を經  
ごし地を緯とするの君、業をつぎ基を承くるの王、是れ最も蒼天の與する所なり。輕忽にして  
王號を稱せば、必ず譏を後代に貽さん。」

と。されど將門は之を斥けて聽かず、

「既に八國を領す。官軍攻め來らば、足柄・碓氷の二關を固めて坂東を防ぐべし。汝等の云ふ所は  
甚だ迂誕なり。」

とて、自ら恣に僞宮を下總の猿島に造り、自ら平新皇と稱し、かつ左右大臣・納言・參議以下の文  
武百官を設け、剩へ關東の國司を任免する等、勢甚だ猖獗を極めたのである。

●將門誅に伏す 朝廷この報を得るや大に驚き、天慶三年、藤原忠文を征東大將軍に任じて、將  
門追討に向はしめられた。けれどもその到着に先ちて、既に平貞盛及び藤原秀郷は、相共に兵を  
起して將門を討滅してゐた。蓋し貞盛はかの常陸大掾平國香の子、而して藤原秀郷は、驍勇を以  
て世に知らるるかの田原藤太にして、當時は下野押領使の職を拜してゐたものである。

藤原純友の亂 ●純友叛す たまたま承平四年、伊豫掾藤原純友、また國司の任滿ちて而も歸

らず、海賊等を集め、同國日振島(伊豫國北宇和郡の海上に在る。いま日振島村と云ふ)に據りて、山陽・南海の沿岸を大に掠  
めた。さればこの頃京都にては、「東西相應じて起れり。」等と噂せられ、騷擾實に一方ではなかつ  
た。

●純友誅に伏す 將門の亂平定の翌年、即ち天慶四年、追捕使經基王(清和天皇の御孫)等は、朝命を奉じ  
て西下し、やがて純友を討ち滅し、また大に南海の諸賊を平定せられた。ここに於て東西の亂は  
じめて鎮定す。世に之を承平・天慶の亂と稱するのである。

亂後の形勢 ●清和源氏の勃興 承平・天慶の亂鎮定の功により、源經基・平貞盛・藤原秀郷等  
は、相次いで征夷大將軍に任ぜられた。かくて源平兩氏、之より漸く世に著はるるに至つたが、  
殊に源氏は、經基の子滿仲・孫賴信・曾孫賴義等、何れも藤原氏の信任を得て、屢々京都の亂賊を  
鎮め、以て清和源氏隆運の大根底を確立したのである。

●藤原氏の遊惰 承平・天慶の亂に藤原氏は一時驚動した。驚動した結果は、必然綱紀の肅正とな  
つた。けれどもその亂の鎮定後は、彼等は再び舊時に復つた。否、舊時に倍して榮華を極め風流  
を事とした。殊に第六十三代冷泉天皇より第七十代後冷泉天皇に至る八朝凡そ百年の間は、攝關

その他の要職を壟断し、而も政務は殆んど之を顧みず、地方の事は悉く之を卑んで放擲し、花の朝・月の夕、只詩歌管絃の遊びにのみ耽つたのである。

【武門・武士の擡頭】ここに於て、さなきだに高まり來れる武門・武士の勢力は、或は京都に於て、

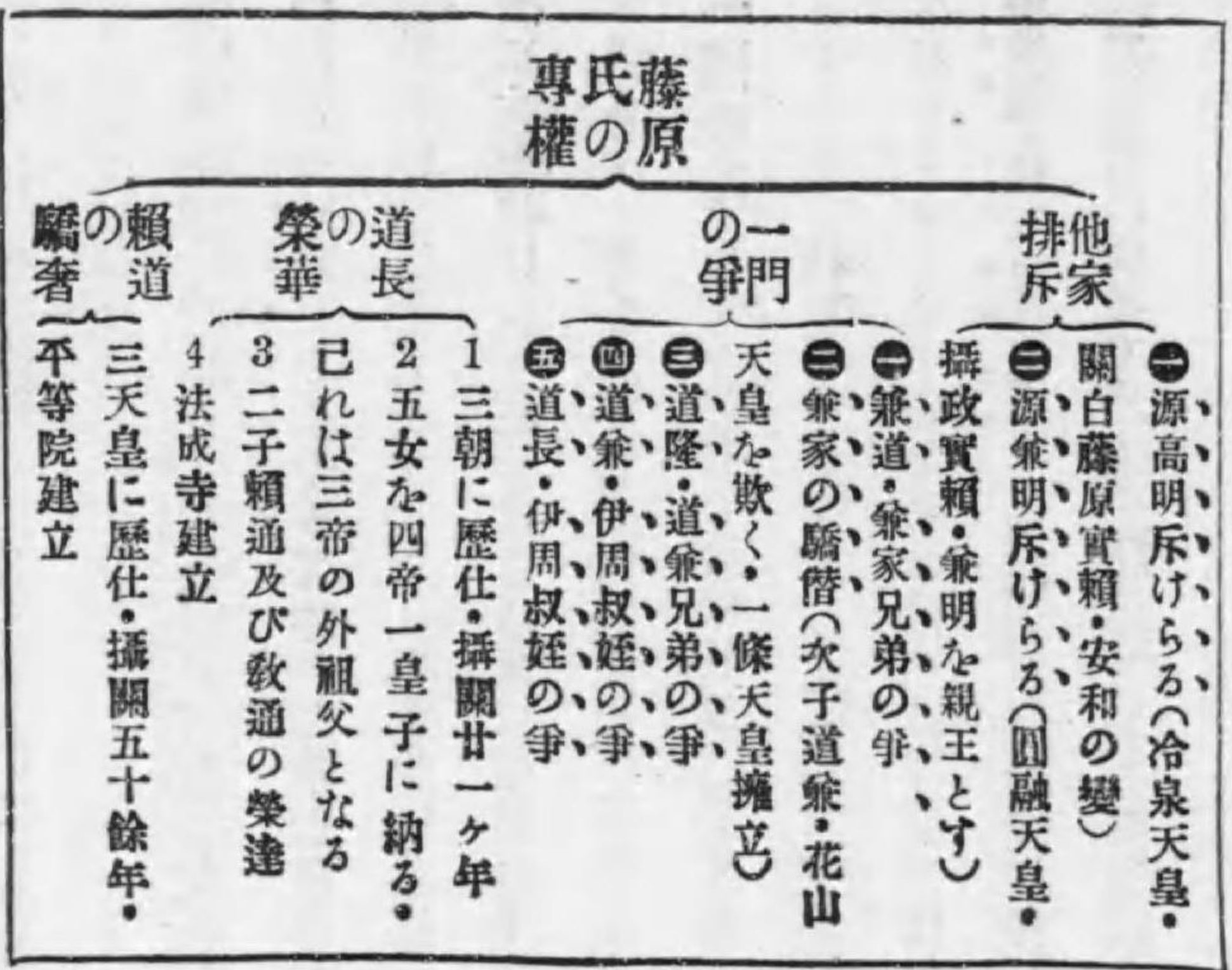
また地方に於て、益々強大に赴いたのである。彼等の擡頭は、云ふまでもなく、藤原氏の傾斜だ。革命はまさに近き日にあるに相違ない。

【練習問題】(一)延喜の治(女高師)。(二)武士の起原(高師)。(三)承平・天慶の亂(陸士)。(四)紀貫之(女高師)。(五)莊園(高校)。(六)藤原忠平(高師)。(七)猿島(女高師)。(八)藤原純友。(九)源經基(高師)。

### 第十七章 藤原氏の專權

#### 他家排斥

源高明斥けらる。當時その勢力よく藤原氏と相匹敵し、以て大臣・宰相たり得るものは、實に只源氏獨りにすぎなかつた。されば、さきに伴氏を斥け橘氏を斥けて、己が一門の繁榮策の遂行に漸く露骨となつた藤原氏が、ここにその鋭鋒を、この源氏に向けるに至つたのも



【安和の變】冷泉天皇の御代、御父帝村上天皇は、皇太子として爲平親王(冷泉天皇の御弟・生母は源高明の女)を立てんとお思召しにしました。然るにやがて上皇崩じ給ふや、藤原氏は俄に起つて、親王の御弟守平親王(生母は師輔の女)を立て奉つた。そこで爲平親王擁護の人達が憤つたのだ。憤りのあまり一部の人達は、親王を奉じて將に亂を作さうとさへするに至つたのだ。けれども之はまづかつた。藤原氏に乗ぜられる隙を、反つて與へた様なものだつ

た。即ち藤原氏は、源高明を以て、この亂の首魁だと讒奏し、首尾よく太宰権帥に貶謫することに成功したのである。

【考察問題】 (一)藤原氏は何故に守平親王を迎へ奉らうとするか。(二)源高明は果してこの首魁であつたか。

●源兼明斥ひらる。やがて守平親王即位し給ふ。之を第六十四代圓融天皇と申し奉り、御年十一歳の御幼主にまします。よりて藤原實賴攝政となり、源兼明(源高明と同じく醍醐天皇の皇子)左大臣となつて相共に政を輔けた。然るにこの時、師輔の子兼通は、俄に兼明の官職を罷め、之に親王號を奉つた。云ふまでもなく、陽に尊んで陰に抑へんことを藤原氏常套の他家排斥の策に外ならないのである。

一門の争。かくの如く藤原氏は、悉く他の貴族を排斥して、獨り己が一門の繁榮をのみ擡じてゐるが、後にはやがて、その一門内にも相争ふの醜狀を演じ出した。同氏必然の歸結といへ、それはあまりに不倫な動物性への墮落ではないか。

●兼通・兼家兄弟の争。圓融天皇の御代、師輔の子兼通は、弟兼家と權を争ひ、天皇に迫りて曰く「攝政・關白は必ず兄弟の順にせさせ給へ。」と。遂に關白となりて專恣を極めた。のみならず彼は、その死に臨むや、從兄賴忠を關白となし、以て兼家の希望は益々之を妨げたのである。

誰か、一門の繁榮をのみ擡じて...  
おかしな心でいんげんがあるまじい。

●兼家の驕僭。第六十五代花山天皇即位し給ふや、皇太子としては、先帝(圓融天皇)の皇子懷仁親王を立てられた。然るに親王は、兼家の女詮子の所生にましますのである。されば兼家の喜びは一方ではない。早くも外戚たるの權勢を振はんと欲し、次子道兼をして、畏くも天皇を欺いて出家せしめ、御年僅か七歳の皇太子を立て奉つた。第六十六代一條天皇と申すのである。さきには兄弟相争ひ、今また君臣の義を亂す。非倫者中の大非倫者ではないか。

●道隆・道兼兄弟の争。關白兼家薨するや、その二子道隆及び道兼の間に争が起つた。道隆が長子の故を以て楯とすれば、弟道兼は一條天皇擁立の功を飽くまでも誇る。形勢互に一進一退、兩者中々に相降らなかつたが、結局は兄の勝に歸した。そこで勿論弟が大不平である。

●道兼・伊周叔姪の争。やがて道隆薨するや、また道兼・伊周叔姪の間に、關白職の争奪戦がはじまつた。道兼が老獺の權略家ならば、伊周だつて御歴々の嫡子だ。だから中々互に隙を相見せない。けれどもつまりは老獺が勝つてしまつた。そこで御歴々は頗る不平だ。遂に頻に老獺を呪詛した。

●道長・伊周叔姪の争。まさか呪詛の結果でもあるまいけれど、道兼は、襲職後旬日ならずして薨

去した。かくて争がまた當然起されるのであつたが、今度は道長・伊周叔姪の間に行はれた。然るにこの争で、伊周はまたも破られてしまつた。よくよく運に乏しい凡物だ。

**道長の榮華** 道長は(一)一條・三條・後一條の三朝に仕へ、天下の樞機を握ること實に廿一年に及んだ。(二)而もその五女(彰子・妍子・威子・嬉子・寛子)は、悉く之を四帝一皇子(一條・三條・後一條・後朱雀の四帝、三條天皇の皇子小一條院)の後妃に納れ、やがて己れは三帝(後一條・後朱雀・後冷泉)の外祖父ミなつた。(三)加ふるにその二子頼通及び教通は、共に要職に在つて朝政に参劃した。

さればその莊園は天下に遍く、その富は皇室に越え、その出入の儀衛には常に文武の百官を従へたと云ふ。長くもかの三條天皇が、「心にもあらで憂世にたがらへば、戀しかるべき夜半の月かな」と御製あらせられた御心の程を拜察しまつる時、誰か彼の専恣榮華を惡まないでおられやうか。

**【皇后・中宮の並立】** はじめ道隆の女定子、入内して一條天皇の中宮となつてゐた。然るに道長は、今また己が女彰子を入内せしめて、同天皇の妃とし奉つた。ここに於て改めて、定子を皇后とし、彰子を中宮として、皇后・中宮並び立つの一新例を開いたのである。

**【考察問題】** (一)道長は何故に彰子を昇格せしめて中宮としたか。(二)皇后・中宮並立の一新例を開いてまでも、己が女を入内せしめ得る道長は、確かに當代第一の大權勢家ではないか。この間の事情を考察せよ。

彼は更にその晩年法成寺を建立した。絶對至上とも云ふべき藤原氏の權力を以てして、彼は國家の財用を殆んど傾け盡した。諸官衙・宮中・はては神泉苑の石すらも憚りなく採つて用ゐた。勿論公卿・國司・郡司等は、工を援くべく多額の金品を強要せられた。庶民は「たとひ公事を緩うすこも此の役を怠る勿れ。」と嚴命せられた。されば工愈々成るに及んでは、結構善美、到底筆舌の盡し得る處ではない。法成寺攝政或は御堂關白等とよばれて、政治を此處に執つた彼の得意さ、蓋し思ふべしである。

此の世をばわが世とぞ思ふ望月の、かけたることのなしと思へば 道長

かくて之より後は、同じ藤原氏の中でも道長の子孫獨り榮えて、攝關もこの子孫にのみ限られた。**頼通の驕奢** 道長の子頼通、また父について三天皇(後朱雀・後冷泉・後三條)に歷仕し、攝政または關白たること實に五十餘年の久しきに及んだ。勿論その間の専恣榮華は父にも劣らなかつた。例へばその晩年、山城宇治に平等院を建立し、宇治關白ミ稱ばれつつ、ここに閑居した。この如

きそれである。今なほ残る鳳凰堂は、この平等院の一部にして、名工定朝の作と傳ふる佛像、宅磨爲成の筆である壁畫等を堂内に藏して、實に驕奢の限をつくしておるものである。

【練習問題】 (一)安和の變。(二)源兼明。(三)藤原兼家。(四)藤原道長。(五)宇治關白(高校)。

### 第十八章 平安時代の文物

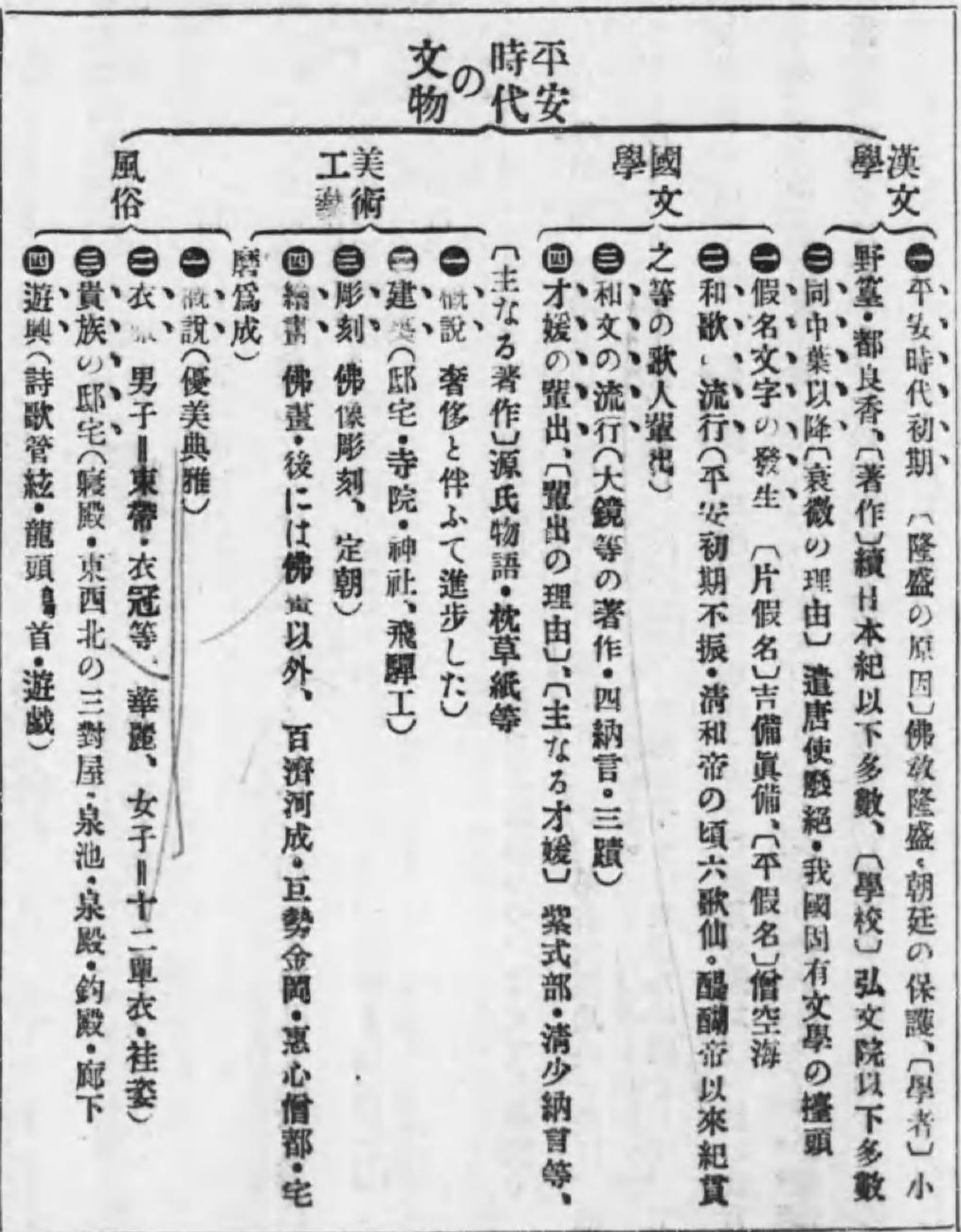
漢文學 ●平安時代初期 【隆盛の原因】 漢文學は、平安時代の初期には、甚だ隆盛を極めた。之れ(一)當時は佛教隆盛の時代であり、従つてその佛教の高遠なる教義を理解せんがために、上下一般に漢文學の研究に全力を捧げたこと。(二)朝廷の保護獎勵が厚かつたこと。即ち桓武天皇は、平安奠都の後、「古之王者、教學爲先」とて、首として大學寮に勸學田を置き、大いに學事を獎勵し給ひ、ついで平城・嵯峨・淳和の三帝は、何れも好文の君にましまし、中にも嵯峨天皇は、深く漢風を喜び、博く經史に通じ、詩文をよくし、また書道にも長じ給ふた。之等に原因するのである。

かくて奈良の都に萌え出でた漢文學は、今やここに美しい實を結び、學者に、學校に、

實に潑刺たる生氣を呈するに至つたのである。

【學者】 小野篁・都良香・菅原是善・大江音人等最も著はれ、また僧空海・橘逸勢は、書道の妙手にして嵯峨天皇と共に三筆と稱せられた。

【著作】 日本書紀に續くべき續日本



紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄（總稱して六）等の史籍、弘仁格式（前にも）令義解（大寶合）新撰姓氏錄（當時新羅人の歸化甚だ多く、爲に姓氏に少からぬ混）凌雲集・文華秀麗集・經國（の註釋）を來した。本書はこの混亂を防止するためのもの）

集等の詩集、相次いで世に著はれた。

【學校】官立の大學の盛んなるは云ふまでもない。和氣氏の弘文院、橘氏の學館院、在原氏の辨學院、藤原氏の勸學院、僧空海の綜藝種智院等の私立の學校も前後に起つて、盛んに漢文學を教授したのである。

弘文院、桓武天皇の末年、和氣廣世が、父清麻呂の遺志をついで立てた學校で、私立學校の最古のものである。學勸院、嵯峨天皇の皇后檀林皇后（橘嘉智子）が、弟右大臣氏公と共に、橘氏一族の教育所として立てたものである。辨學院、陽成天皇の御代、在原業平が、私第を學校として、王族及び己が一族の學習所となしたものである。勸學院、嵯峨天皇の御代、左大臣藤原冬嗣が、一族の教育所として設立したものである。されば藤原氏の盛時に於ては、官立の大學をも凌ぐの概があつた。綜藝種智院、淳和天皇の御代、僧空海の設立にかゝる。他の總ての學校が、一族子弟の教育のみを目的とするのに對して、この學校は、何人にも入學を許す頗る平民的なものである。之れ一つには民衆的な唐の學制に倣つたこと、二つには彼

が佛門の人であつたことによるのである。

●同中葉以降 平安時代の中葉以降は、流石の漢文學も次第に衰運に向ふた。之れ（一）宇多天皇が遣唐使派遣を止め給ふてから、我國と大陸との交通が全く杜絶されたこと（二）此の時代より、我國固有の文化が、あらゆる方面に次第に擡頭して來たこと、主として之等に原因するのである。

【遣唐使派遣の停止】遣唐使は、舒明天皇以來屢々派遣されてゐたが、宇多天皇の寛平六年（一五五四年）に至るや、菅原道眞の建議によりて、以後廢絶することとし給ふた。蓋し、唐はその頃、内憂外患甚だ多く、文化もために凋落の淵に沈みつつあつたからである。

●國文學 殊に平安時代の中葉以降は、漢文學の衰微に代つて、國文學が興隆した。その原因は今更課々を要すまい。各自考察せられたい。

●假名文字の發生 【片假名】片假名は吉備前備の作とすれども確證はない。但し漢字渡來後何時からともなく世に行はれてゐた雜多の平假名文字を、整理し、統一し、やがて之を五十音圖に編成したこと、それは彼の仕事であつたかも知れない。彼は入唐して音韻の學をも研究した人であるからである。





交際するにも耻を感じた。否、寧ろ不便を感じた。歌合せに勝利を得、勅撰和歌集に收載されることは、誰もが無上の光榮とする所であつた。だから次の様な極端な話もあるのだ。藤原長能は、自分の歌が名家に批難されたのを苦にして、病死した。藤原範永は、自分の歌を賞讃されたいばかりに、それを錦の巻に盛つた。能因法師についての數々の傳説も、人口に膾炙されておる。天の河苗代水に堰きくだけ、天下ります神ならば神の一首を、伊豫の三島神社に奉つて雨乞し、多くの百姓を救つたのはその一例だ。

【考察問題】 (一)在原業平以下の歌人について、以上の歌以外の歌を、出来るだけ多く列挙せよ。(二)能因法師の「都をば霞と共にたちしかど、秋風ぞ吹く白河の關」にまつはる傳説如何。

●和文の流行 第六十六代一條天皇を中心としての前後の時代は、和歌と共に、また和文の全盛時代であつた。土佐日記・竹取物語・伊勢物語・歌物語等の名著の外に、更に新に大鏡・榮華物語・今昔物語等の名著を加へたのもこの時代であつた。藤原行成・同公任・同齊信・源俊賢が、何れも權大納言に進み、その才學を四納言と稱へられたのもこの時代であつた。藤原行成・小野道風・藤原佐理が、共に三蹟と稱せられて、書道の妙を謳はれたのもこの時代であつたのである。

【大鏡】 第五十五代文徳天皇より第六十八代後一條天皇に至るまでの天皇・攝關・大臣等の事蹟を、都を分ち

て記したものである。中にも御堂關白道長の事は殊に委しく藤原氏の内幕をよく云ひ表はしてあるから、榮華物語等と共に、當時の事情を知るに最も貴い史料である。實に本邦最初の假名文歴史書である。但し著者の誰なるかは詳かでない。

【榮華物語】 第五十九代宇多天皇より第七十三代堀河天皇に至るまでの間に、大内に起つた君臣の事を記したものである。著者については、書籍には藤原爲業とし、世には赤染衛門と云へど、何れも確かではない。

●才媛の輩出 【輩出の理由】 當時藤原氏の各家互に權力を争ひ、各々その女を、或は后・妃として或は侍女として宮中に納れんがために、競ふてその才藝を磨かしたから、一條天皇の御時には、才媛花の如くに咲き亂れ、自らその間に、獨特の大文學が蔚然として起つたのである。

【主なる才媛】 數ある才媛の中でも、一條天皇の中宮上東門院に仕へた紫式部、同皇后に仕へた清少納言、和泉式部、小式部内侍、伊勢大輔、赤染衛門等は最も著しかつた。

【主なる著作】 紫式部の著源氏物語は、學問及び風姿に勝れた當時の理想的人物なる源氏の君を中心として、その頃の宮廷の生活を畫き出した小説で、文章は流麗、構想は妙、和文の著作さして古今不朽の大作である。男まさりで才氣縱横な清少納言の枕草紙は、鋭い觀察と、人の意表に

出る着想とを以て聞え、源氏物語と共に和文の双璧と稱へられるのである。

### 美術工藝

●概説 貴族の奢侈に伴ふて、建築・彫刻・繪畫等の美術工藝も亦大に進歩した。而

して此の時代の特徴は、かの奈良時代及びその前後の時代の如き單なる支那の模倣でなくて、我國固有の特色を大に發揮したことに在る。

●建築 貴族の邸宅の建築は頗る贅澤を盡した(私俗の部参照)。寺院の建築も頗る華麗を極めたこと、かの

の道長の法成寺や、頼通の平等院等で見たと通りであつた。加ふるに、此の時代は、神社の建築までが華美を競ふ様になつた。元來神社には、曲線を用ゐず、丹彩を施さず、單純質朴を旨とするのがわが國固有の風である。然るにかの春日神社を見よ、賀茂神社を見よ。時代風潮の反映の著しさに、一驚を喫せずには居れまい。遮莫、飛騨工は此の時代に出た名手である。

●彫刻 天台・眞言二宗の盛大と共に、佛像彫刻が大いに起つた。僧空海はその名手であつた。云ひ、最澄・圓珍も亦巧であつたと云ふ。けれども頼通の頃に出た定朝(ていじょう)の右に立つ名工は、平安時代の全期を通じて恐らく只一人もあるまい。彼の遺作は、今尚ほ鳳凰堂に多く藏されておる。

●繪畫 最澄及び空海の頃は、主として佛畫が行はれたが、後に繪畫が宮殿裝飾として用ゐられ

るに至つては、佛畫以外の繪畫も大に行はれた。而して名手としては、仁明天皇(第五十)の御代にまづ百濟河成(くだらのかはなり)が出た。飛騨工との術較べに今尚ほ妙技を稱へられる。ついで醍醐天皇(第六)の御代には巨勢金岡(こせのかなを)が現はれた。勅命によりて清涼殿の障子に弘仁以後の詩人を畫き、紫宸殿の賢聖障子に支那賢聖の畫像を畫いて盛名を馳せた。かの仁和寺の殿堂に畫いた馬が、夜な夜な抜け出て、附近の田畑を荒したと云ふ傳説も、亦彼の繪のもつエピソードである。更にその後、一條天皇(第六十)の御代には、佛畫の名人惠心僧都(えしんそうづ)が出でて、彌陀三尊(みださんぞん)の圖や來迎彌陀(らいごうみだ)の圖等を今に遺し、最後に頼通の頃に出た宅磨爲成(たくまためなり)は、新に宅磨派を起し、宇治鳳凰堂の壁及び扉(とびら)に、淨土九品の圖・釋迦八相の圖等を遺したのである。

●風俗 ●概説 前述の如く、優美典雅はこの時代の支配色である。だから衣・食・住・遊樂等の風俗方面に於ても、亦、同様の趣が窺はれること云ふまでもない。

●衣服 すべて華麗にして長く濶かである。文武官の男子の正装は束帶(そくたい)にして、そのやや略したものに衣冠(いくわん)がある。また常服としては直衣(なほし)あり、その他直垂(ひたれ)・水干(みづぬい)・狩衣(かりぎぬ)等がある。而して一般に髪を結び、香(かう)を衣(い)に焚(た)きしめ、甚だしきは黛(まゆずみ)を施し、白粉をつけ、齒を染めなどした。

女子の盛装は十二單衣にして、緋の袴をはき、唐衣及び裳をつけた。唐衣及び裳を省いたのは平常服で、之を桂姿と云ふ。而して模様や色彩等に意匠をこらしたことは云ふまでもない。

●貴族の邸宅 上流貴族の邸宅は所謂寢殿造といふ形式であつた。まづ正北に南面して正殿がある。之を寢殿とも云ひ、本殿の意である。次にその東と西と北とは、各々對屋がある。主婦の住む所は北對屋であるから、世に貴人の妻を北の方とも云ふ。また南方に泉池がある。中島を設けて、松・櫻・柳等四季とりどりの草木を植ゑ、池水には鳥を浮べ魚を放つのである。更に池に臨んで左右には、泉殿と釣殿とを相對せしめる。花の朝・月の夕、樂しき宴樂等を催すのは、主として此處である。勿論以上のすべての殿舎は、悉く廊下で結びつけられておるのである。

●遊興 詩歌管絃の遊びが盛んに行はれ、時には龍頭船首の船を浮べて、終日宴樂に耽るのであつた。されば遊戯の如きも、歌合・詩合・前裁合・圍碁・雙六・蹴鞠・打毬等、概して優美を尙ぶものばかりであつた。

【練習問題】(一)平安時代の漢文學(高師)。(二)同、國文學(同)。(三)紀貫之(女高師)。(四)紫式部(同)。(五)寢殿造(高校)。

### 第十九章 平安中葉の諸戰亂 (刀伊の入寇、前九年の役、後三年の役)

刀伊の入寇 第六十八代後一條天皇の寛仁三年(一六七九年)、刀伊の賊五十餘艘、對馬に來襲し、ついで壹岐を侵し、進んで筑前に迫り、能古島(今の能島、博多灣内に在る)を根據地として、屢々民家を掠めた。けれども時の太宰權帥藤原隆家、大藏種材等の諸勇士と共に、討ちて之を卻けた。

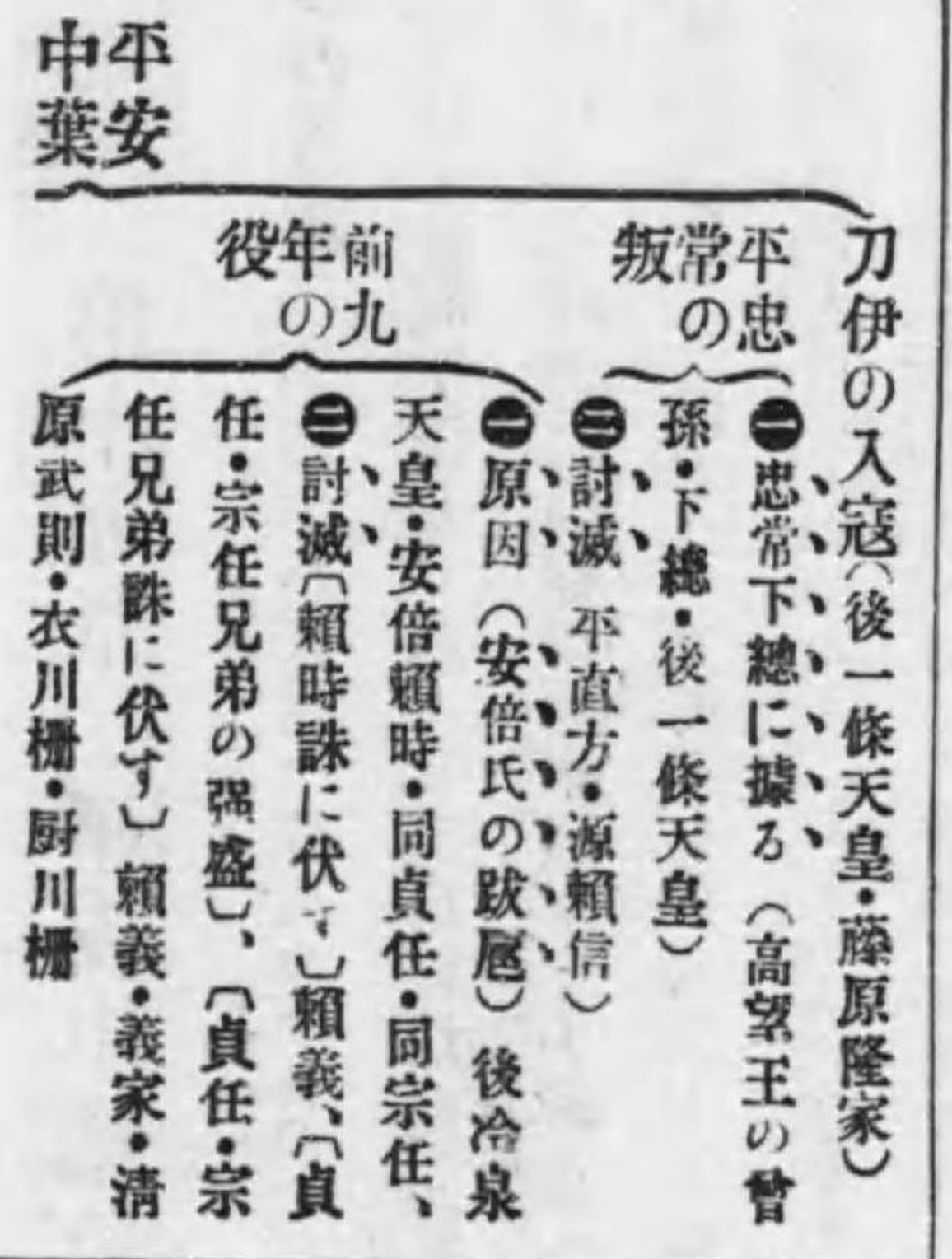
【刀伊の本據】 刀伊とは、刀夷とも書き、トイと訓じ、朝鮮語で北人の義である。而して當時は、高麗人が女眞を刀伊と稱んでゐたから、わが國人の刀伊の稱呼は、この高麗人に倣つたものに外ならぬ。まはれ女眞は、はじめ黒水靺鞨と稱して渤海に屬してゐたが、後に契丹興りて渤海を滅すに及んで、契丹の附庸となり、以て女眞と稱する様になつたものである。

平忠常の叛 ●忠常下總に據る 後一條天皇の御代には、また平忠常の叛があつた。忠常は高望王の孫忠頼の子で、下總に居り、從五位下に叙し、上總介に任じ、かつ武藏押領使として、族衆頗る強盛を極めてゐたが、長元元年、遂に勢を恃んで叛旗を翻すに至つたものである。

●討滅 朝廷報を得給ふや大に驚き、直ちに平直方をして赴き討たしめられた。けれども直方は

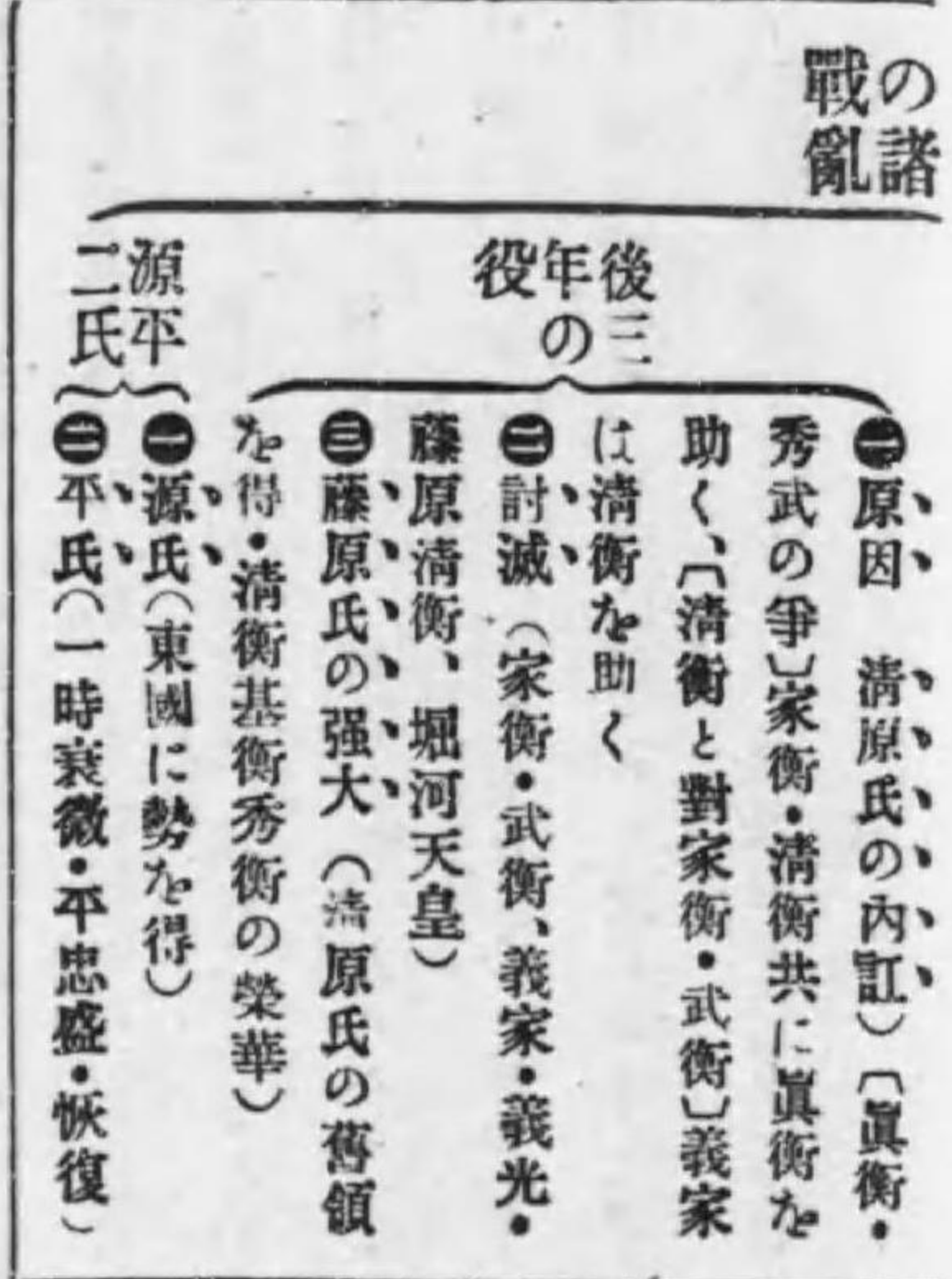
遂に軍功を奏し得なかつたから、朝廷はついで改めて、源頼信(頼光の子)をして赴き討たしめられた。頼信は驍勇の聞え天下に高い大將である。難なく忠常を虜にしてその首級を得、やがて之を京都に送つた。之より平氏の勢力圯下たりし東國も亦、今や漸く源氏に歸せんとするに至つた。

**前九年の役** ●原因(安倍氏の跋扈) 忠常の亂後廿年にして、第七十代後冷泉天皇の御代、また陸奥の豪族安倍頼時及びその子貞任・宗任の亂があつた。抑々安倍氏は、父祖以來今の陸中地方



を根據とし、その浮囚の長として勢力を持つてゐたが、頼時に至り、人民を劫掠し、國司を侮りて貢賦を輸さず、中央政府の威力の地方に及ばないのに乗じて、日に専恣横暴を逞うしたのである。  
●討滅 【頼時誅に伏す】 後冷泉天皇の天喜四年、朝廷は頼信の子頼義を陸奥守兼鎮守府將軍として、安倍氏を討たしめられた。よりにて頼義

の諸  
戦亂



は子義家と共に之を討ち、やがて頼時の首級を得て凱旋した。  
【貞任・宗任兄弟の強盛】 頼時已に誅に伏したとは云へ、その二子貞任及び宗任は、父に代つて衆を督し、勢頗る強かつた。殊に當時頼義の任期満ちて、朝廷その後任を得給はざるの慮に乗じて、益々横暴を逞うした。即ち大風雪を衝いて官軍を逆襲し、殆んど全滅に瀕せしめたこ

と等も屢々であつた。

【貞任・宗任兄弟誅に伏す】 ここに於て頼義は、また貞任・宗任兄弟の軍と相戦ふた。義家も年僅かに十七歳の弱年乍ら、よく父を助けて奮闘し、絶倫なる武勇と巧妙なる用兵を以て、縦横無盡に戦場を馳驅して、大に賊軍の膽を寒からしめた。加ふるに、この頃、出羽の浮囚長清原武則が、子弟及び部下一萬餘人を率ゐて來り援けた。されば之より官軍益々振ひ、大學してまづ小松柵

(陸中國磐手郡)を攻め落し、進んで衣川柵を陥れ、更に大麻生野(陸中國贈澤郡・前澤村の附近)・瀨原(上)等の諸柵を屠つて烏海柵を襲ひ、康平五年(一七二二年)、終に厨川柵(陸中國巖手郡・厨川村に在る)を圍んで、貞任を斬り、宗任を虜にして、めでたく凱旋した。世に之を前九年役と云ひ、源氏の聲望益々之より東國に高まつた。

【前九年の役の秘呼】 前九年の「前」は、後三年の「後」に對するものとして、問題はない。されどその「九年」は、何時から何時までの計算であるか、古より諸説區々として一定しない。が、おそらく天喜四年(賴義が征討の命を拜受した年)から康平七年(同京都へ凱旋した年)までとする説が、最も真に近いのだらう。

【衣のたて】 伊豫守源賴義朝臣、貞任・宗任等を攻むる間、陸奥に十二年の春秋を送りけり。鎮守府をたちて秋田の城 移りけるに、雪降りて、軍のものを共の糞、白砂になりけり。衣河の館、岸高く川ありければ、柵をいたゞき、兜に重ね、筏をくみて攻め戦ふに、貞任堪へずして、遂に城の後より逃れ落ちける。一男八幡太郎義家、衣河に追ひたて攻めふせて、きたなくも後を見するものかな。しばし引き返せ。物言はん。」と言はれたりければ、貞任見かへりたりけるに、衣のたてはほころびにけり、

といへりけり。貞任、轡を休らへ、しころを振り向けて、年を経し絲のみだれの苦しさに、と付たりけり。その時義家、はげたる矢をさしはづして歸りにけり。然ばかりの戦の中に、やさしかりける事かな。(古今著聞集)

後三年の役

●原因(清原氏の内訌)

【真衡・秀武の争】

前九年の役の戦功により、武財は、鎮

守府將軍に拜せられ、また安倍氏の故領を與へられて、遂に奥羽の重鎮となるに至つた。然るにそれより二十年の後、武則の孫真衡に至るや、部下吉彦秀武と隙を生じて相争ふた。而してこの



争に、真衡の弟家衡及び清衡は、共に真衡の横暴を悪みて秀武を助けたから、内訌は益々擴大した。

されどももなく、源義家(時の、奥守兼鎮守府將軍)の真衡

援助によりて、ついで真衡の病没によりて、この争は鎮まつた。

【清衡と家衡・武衡との争】 然るに清原氏にては、また再度の内訌が起つた。即ち家衡は叔父武衡

をひきて援となし、遽に弟清衡の居館を襲ひ焼きてその妻子眷屬を殺し、また義家に對しても公然叛旗をかかけたのである。

【考察問題】 (一) 清衡は、何故に眞衡を助けなくて吉彦秀武を助けたか。眞衡の横暴を惡むの外に何か根本的大原因が伏在するではあるまいか。考察せよ。(二) 義家は何故に眞衡を助けたか。

●討滅 家衡・武衡の聯合軍は金澤柵(羽 國仙北郡)にたてこもつた。義家は直ちに手兵數萬を率ゐて之を攻めた。されど如何せん、地險にして人亦強い。加ふるに寒威凛烈を極めたから、流石の官軍も少からず惱まされた。亂るる雁に伏兵を知つた勇ましい戦の演ぜられたのもこの時だ。日々兵士の勇怯を校し、剛・憶二座を設けて、彼等を鼓舞激勵したのもこの時だ。弟・義光が兄の苦戦を慮り、官を棄てて、はるばる京都から來り援けたのもこの時だ。實際、第七十三代堀河天皇の寛治元年(一七四七年)十一月、城中自ら火を發し、城兵力盡きて出で降るまでは、寸刻の油断も許さぬ緊張しきつた戦争であつた。世に之を後三年の役と云ふのである。

【義家の論功行賞】 亂平定の翌月、義家は國解(國司より太政官)に上る公文書を上つて曰く、「武衡・家衡謀叛す。罪貞任・宗任にすぎたり。今徵發を煩はますして幸に討平することを得たり。請ふ、速かに追討の官符を下し、その首、閣下に献ぜんことを。」と。されど朝議、之を私闘として官符を下さず、またその功を賞せなかつたから、義家は遂に私財を抛つて部下をねぎらつた。彼が將卒の心服を得たのも、かかる事情に基くのだ。東國武人が全く源氏に歸したのも、かかる事情に基くのだ。

●藤原氏の強大 藤原秀郷六世の孫清衡は、後三年の役の戦功によりて、清原氏の舊領の大部を與へられ、居館を平泉に構へて、新に陸羽の雄となつた。抑々陸羽の地たるや、京都に遠く、朝廷も之を蝦夷の地として重要視されなかつたけれども、地廣くして天産に富み、民豊かにして兵も亦強かつたから、藤原氏の繁榮は、日に日に目覺ましいものがあつた。確に、清衡・子基衡・孫秀衡三代九十餘年間は、宛然陸羽に於ける榮華の一王國であつたのである。

【中尊寺金色堂】 中尊寺は、藤原氏三代榮華の跡を物語る大寺にして、その盛時には堂塔四十餘宇・禪房三百餘宇を數へたと云ふ。されど今は殆んど廢れて、その境内の地に、唯僅かに金色堂を残すのみとなつた。抑々金色堂は、その内部は、三壇に構へ、彌陀三尊・十地藏・二天を安置し、また清衡以下三代の棺を納めておる。四本の柱は、所謂七寶壯嚴の卷柱で、十二光佛を圖現し、柱・梁には螺鈿珠玉を鑲め、屋根裏・天井・軒端等は、悉く之に黒漆を厚塗して金箔を貼り、全堂金色燦爛として輝いておる。即ち光堂と稱ばれる

所以だ。

【三代の榮耀】 三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里此方に在り。秀衡の跡は田野に成りて、金鷄山の  
み形を残す。——山略—— さても義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あ  
り。城春にして草青みたりと。笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡、

兼れて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す。七寶  
散らつて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢と成る可きを、四面新に圍みて覺を  
覆ひて風雨を凌ぐ。暫時千歳の紀念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

(芭蕉)

源平二氏 ●源氏 平忠常の叛(源頼信鎮定)、前九年の役(同頼義)、後三年の役(同義家等)  
武勳によりて、かねて源氏に心を寄せてゐた東國武士は、愈々之に靡いて來た。

●平氏 平氏は、天慶の亂・平忠常の叛等によりて、その勢が一時甚だ衰頽したけれども、貞盛五  
世の孫忠盛、勇武にして屢々戦功を西南に樹て、殊に白河上皇の寵遇を忝うするに及んで、再び

源氏と對立して相譲らぬまでになつて來た。かくて二氏争亂の世が、之より漸く開けんとする。

【考察問題】 源氏が東國に勢力を得た所以を縷説せよ。

- 〔練習問題〕 (一)刀伊の入寇(高師)。 (二)藤原隆家(高校)。 (三)安倍頼時(美術)。 (四)源頼朝(高師)。 (五)  
衣川權(女高師)。 (六)後三年の後(高師)。 (七)清原家衡。 (八)金色堂(陸士)。 (九)東國と源氏との關係  
(同)。

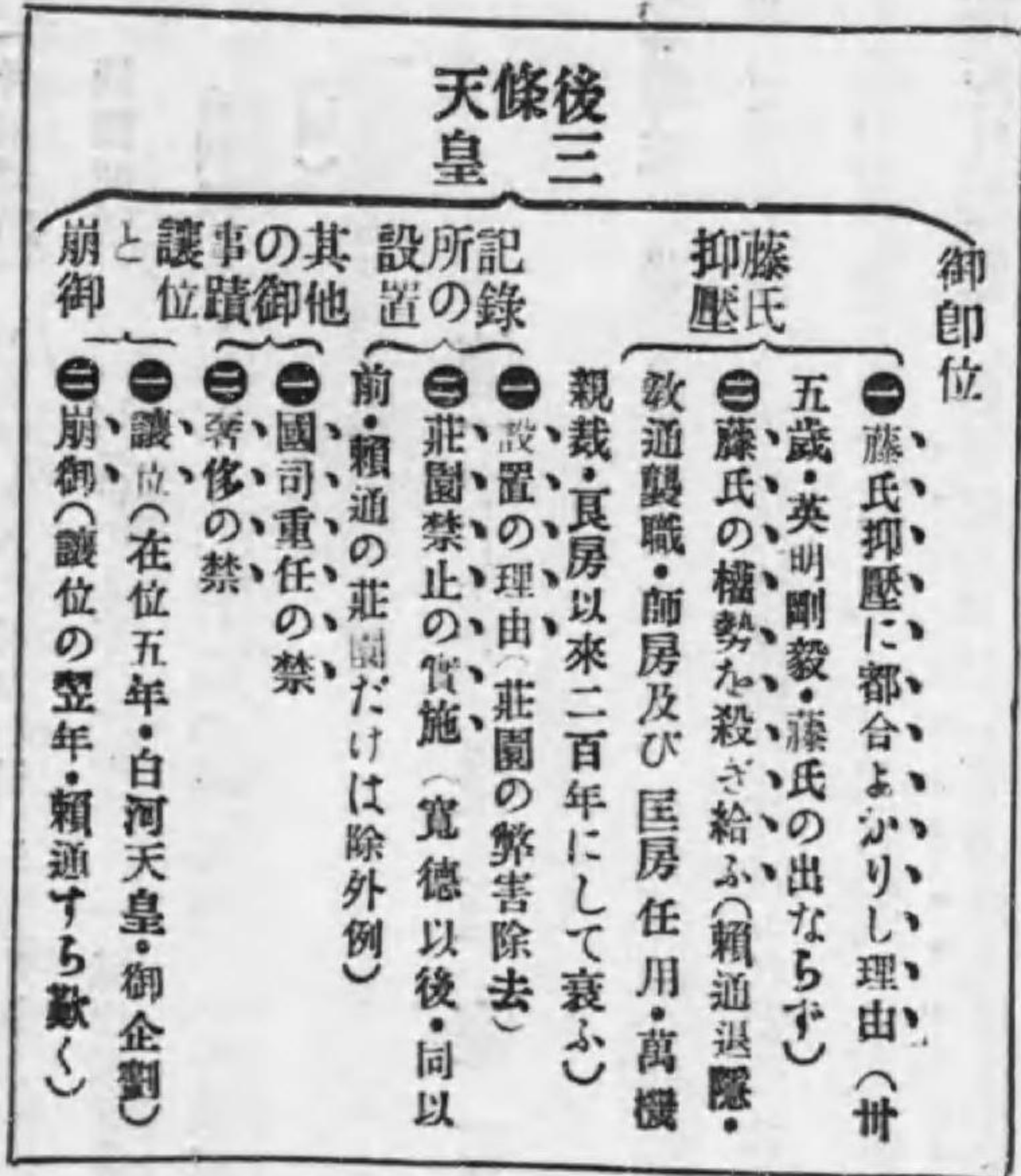
## 第二十章 後三條天皇

御即位 後冷泉天皇の次には、第七十一代後三條天皇が即位せられた。時あたかも藤原氏專恣榮  
華の後をうけて、朝綱の紊亂實に此上もなかつた。東宮としての在位廿ヶ年來の御大志を、どうし  
て此の機に乗じて、行はずして居られやうか。然り、天皇はあらゆる方面に改革を斷行された。

藤原氏抑制 ●藤原氏抑制に都合よかりし理由 (一)即位の時に、天皇は御歳已に卅五歳でお  
はした。従來の多くの天皇が、藤原氏の擁立にかかる御幼少な方にましましたこととは、大に趣  
を異にする。(二)また天資剛毅嚴明にましまし、才學殊に勝れてゐらせられた。(三)従來の多く



の天皇は、概ね藤原氏の出にましましたけれども、後三條天皇は然らず。御母は、三條天皇の皇女禎子内親王におはした。従つて何等藤原氏を憚り給ふ必要がなかつた。



●藤原氏の權勢を殺ぎ給ふ。ここに於て關白賴通は、天皇の御志を察し奉り、御即位の日を以て宇治に退隱し、弟敦通が之に代つた。されど勿論その權勢は到底父祖に及ばず、寧ろ有名無實のものたるに過ぎなかつた。かくて天皇は源師房・大江匡房等の有用の材を任用し、萬機を親裁せられた。政公道に従ひ、皇威俄に加はり、群下肅然として面目を一新するに至つたのも理だ。即ち藤原氏は、良房の攝政以來ここに二百年にして、權勢漸く傾

いたのである。

**記録所の設置** ●設置の理由 從來、權門勢家は多くの莊園を有し、大なるものは數國數郡にも跨る程であつたから、ために朝廷及び國家の直接收入は著しく減少してゐた。御即位と殆んど同時に、天皇がまづ記録所を設置されたのは、全くこの弊害を根本的に滅盡遊ばさんがために外ならなかつたのである。

【記録莊園券契所】 記録莊園券契所とは、莊園の券契を記録する所の義にして、太政官の朝所に置いた。諸國莊園の券契を徴して、之を検しかつ處斷するの事を掌る。即ち券契もしも不明ならば、その莊園は之を官に沒收し、もしまた券契を提出しないならば、その莊園の沒收の外、更に嚴しき誅責を加ふるのである。略して記録所とも云ふ。

●莊園禁止の實施 天皇即ち勅して、(一)後冷泉天皇の寛徳二年以後の新立の莊園、(二)寛徳二年以前のものと雖も券契の不確なる莊園、この二つは之を悉く御禁止遊ばした。(三)但し、前關白賴通の莊園だけは、特にこの規則の除外例として取り扱はれた。絶對至上の國家的命令を以てしても、加之剛毅威明の天皇の御命令を以てしても、尙ほかつかくの如くである所に、藤原氏の勢力が如何に根強く張つてゐたかと云ふことも窺ひ知られるではないか。

其の他の御事蹟 ●國司重任の禁 任期満つるも都に歸らず、重ねて國司の任に止まることを重任と云ふ。重任は大寶令以來、勿論、一切許されなかつた。重任の許可は、直ちに以て土地私有の世襲制度の昔への逆行退歩を意味するからである。けれども年月を経るに従つて、殊に藤原氏の專權以來地方制度の紊亂するに従つて、いつしか恣に各地にこの重任が行はれる様になつた。之では、さなきだに紊れた地方制度が、益々紊れる一方だ。だから後三條天皇は、斷然之が禁止を御計畫遊ばした譯である。

●奢侈の禁 天皇はまた率先して儉素の範を垂れ給ひ、奢侈の風を大に戒められた。

【天皇の御儉素】 御扇は檜の柄で藍紙を張つたものを用ゐられ、御膳には青魚の頭を突り胡椒を塗つたもの等が供へしめられた。また即位のはじめ、石清水八幡社に行幸あつた時は、都人士の出でて鹵簿を拜する者の中に、金色の車等を用う者が少くなかつたから、一々親しく鸞輿を駐め、命じて盡く剃ぎ去らしめられたと云ふ。御儉素の御話は、その他數限りなくあるのである。

讓位と崩御 ●讓位 かくの如く天皇は、銳意治をお圖り遊ばしたが、在位僅かに五年にして、病の故を以て、位を御子白河天皇に讓られた。蓋し、太上天皇として幼帝を助けて政を聽き、以

て藤原氏抑壓の業を愈々完うせんと思召しに出たことと拜察される。

●崩御 然るに御讓位の翌年、御大志遂に空しく、御年も僅かに四十歳にして、遂に崩御されました。流石に前關白頼通すらも、「此本朝不幸之甚也」として、崩御を悼み奉つた云ふのである。

【練習問題】 (一)後三條天皇の御事蹟(高師)。(二)記録所(高校)。(三)國司の重任(高師)。

## 第廿一章 院政時代

白河法皇 ●白河天皇の御讓位 白河天皇は即位の御時年已に二十、而も剛毅果斷器度濶大に

ましまして、頗る御父後三條天皇の風がおはした。さればその御在位十五年、教通・師實相次いで關白たりしが、勿論只全く員に備はるのみ、かくて政權は着々として相門の手から恢復されたのである。けれども御所志の徹底的御貫徹のためには、帝位を退きて自由無束縛の御身となられねばならぬ。父帝に倣ふて、早くも位を御子堀河天皇にお譲りになつた事情、蓋し此處に基くのである。

●院政の創始 やがて白河上皇は政を院中に聽き給ふた。而して院には別當・執事・北面の武士等

の文武の百官を備へられた。宛然一つの新朝廷だ。否、朝廷以上の朝廷だった。實際、當時院宣の權威は詔勅よりも重かつたと云ふのである。かくて上皇の御治政三朝（堀河・鳥羽・崇徳）四十

四年の間は、本邦政治史上に未だ曾て見ざる特別の形態、即ち院政の時代をなしたのである。

【院廳に於ける諸職員（院司）】

院廳に於ける職員を院司と云ひ、院司には次の種々がある。別當（長官）、執事（次官）、官代、主典代、藏人、以下の

諸官。

別に白河上皇に至つて始めておかれたものとして、北面の武士がある。院の御所の護衛に當り、行幸には



弓矢を負ふて車駕を護衛し奉るの外、また檢非違使の仕事をも兼ねるのである。

【考察問題】

院政の創始によりて、後三條天皇の御遺志の一たる藤氏抑壓の業は、殆んど達成せられた。ま

れど之と同時に、他方には、政令二途に出で、人民ためにその去就に迷ふの弊は生じなかつたか。考察せよ。

①白河法皇の弊政。①白河上皇は深く佛法に歸依し給ひ、自ら雉髮して法皇となり、或は法勝寺以下の諸寺塔の建立あり、或は佛像の造營あり、或は大法會の施行あり、また金字の大藏經の御寫經ある等、實に枚擧に遑がなかつた。②法皇はまた豪奢遊幸を好まれた。在世中高野に四度び熊野に八度びの大行幸をはじめとして、數へても尙ほ盡されぬ豪奢遊幸を事とせられた

されば之より財政の窮乏漸く著しく、賣官の弊再び起り、莊園も亦次第に増加して、國司の支配すべき土地は、全土の百が一にも過ぎなくなつた。ああ後三條天皇中興の業は衰へた。藤氏勢力の衰頹と共に、皇威も亦振はなくなつた。政治的大變動が將にま近かに迫り來つたのである。

【考察問題】

藤氏の衰頹、皇威の不振、之はやがて武家政治時代出現への導線である。その理由を考察せよ。

僧兵 ①僧兵の起原。【佛教の隆盛と寺領の増加（起原の第一階段）】奈良朝以來次第に隆盛を極めた佛教は、最澄・空海の二高僧を経て益々上下を風靡した。かくて僧侶の優遇日に厚く、寺門

の地位愈々高く、従つて僧侶或は寺門の領地が著しく増加した。蓋し、彼等は常に皇室よりの寄與をうけた。人民よりの寄進をうけた。また人民との間に殊更に争を構へ、訴訟を起して必ず勝を得た。巧妙なる横奪手段だ。

【地方制度の紊亂と僧兵の發生(第二階段)】藤原氏の專權以來地方制度が全く亂れた。殆んど無政府無警察の状態となつた。されば寺院はここに於て、その廣大な領地の自衛の必要上、僧侶に武技を學ばしめた。又は領内の人民を徴して兵馬の術を練らしめた。恰も地方の豪族が、自衛の必要上、私兵を養つたのと同じ経路だ。かくて僧兵が起つたのである。

【寺院の特權と僧兵の増加第三階段】元來僧侶は課役の義務を免除され得る特權を有してゐる。さらでだに、社會秩序の紊亂に乗じて、民を掠めて横行濶歩するは、人間の動物的本性上、痛快極まる事に相違ない。かくて無賴の徒が四方より集まり來つた。頂襜衣に姿をかへて僧籍に身をおいたのだ。生れながらの武士は甲冑の下に情をみつむが、俄か仕立ての僧兵はやさしき衣の下に兇暴な殘忍性をつつむ。前者は社會秩序の建設者で、後者はその破壊者だ。時勢は益々恐しく展開することを豫感せしめる。

延喜の治を以て稱せられた醍醐天皇朝に、三善清行上つた封事によれば、天下の人民、三分の二は皆く禿首の者なり。此れ皆家に妻子を蓄へ、口に腥膻を啖ふ。形は沙門に似て、心は屠兒の如し。」とある。

「天下の人民の三分の二云云」は、言や過ぎたるに似たれど、また以て當時の一斑を知り得るではないか。

●僧兵の起暴 大小至る處の寺院は皆僧兵を養つた。が、中にも興福寺(南都)、延曆寺(北嶺)、園城寺(三井寺)の如き山緒深き諸大寺は、何れも數千人を蓄へた。勿論それらの僧兵は、殆んど言語に絶する亂暴狼籍の限りをつくした。佛教尊信の院政時代だ。彼等は所得頗に蔓つて、權門を掠め、庶民を苦しめ、寺院相互の間にすら争鬪を續けたのだ。かの山法師(比叡山)が日吉の神輿を、また奈良法師(興福寺)が春日の神木を、共に陣頭に奉じて、不平の事ある毎に、雲の如くに都に亂入して、闕下に嗷訴し、院宣・勅令と雖も之を奉じなかつたのはこの頃である。さしも豪氣にまします白河法皇すらも、「賀茂川の水、雙六の筈、山法師。是ぞ朕が心に隨はぬもの。」と歎ぜられたのもこの頃である。

源平二氏の興隆 僧兵のこの横暴を挫くためには、勢ひ武人の力をからねばならぬ。ここに於て朝廷は、常にこのことを源平二氏に委ねられた。兩氏の勢力がかくて益々強まつたのである。

鳥羽法皇の院政 堀河天皇の後を承け給へる鳥羽天皇も、早く位を御子崇徳天皇に譲り、御自らは上皇となり、ついで法皇となり、やがて白河法皇の崩後は政を院中にみそなはした。而して此の時代の政治・經濟・宗教その他萬般の社會事情は、善惡兩様の方面に於て、白河法皇院政時代のそのままの延長であると思へば、蓋し大過はない。

風俗 概説 後三條天皇の御改革によりて、舊弊は一時大いに刷新されたけれども、院政の頃より、奢侈の風またまた増長し、衣服に居室に華美を競ひ、遊興の數々日夜を盡すの様となつた。

服制 鳥羽法皇は、殊に華美を好まれたから、從來の萎裝束は、之を強裝束に改め、また烏帽子に額をつけることをも始められた。而してこの服装は、之より江戸時代の末に至るまで、大様變ることがなかつたのである。尙ほ仔細に觀れば、男女次の種々の服制がある。

男子 束帶(公事の時の禮服)、直衣(略服)、直垂・水干(共に家居平常の服)、狩衣(出遊の服)等。

女子 單・五衣・表衣・唐衣等を重ね、袴をつけ、裳をひき纏ひ、髪を長く後に垂れた。

遊興 詩歌管絃の遊、さては雙六・圍碁等の娛樂、何れも藤氏全盛時代の昔に劣らず。加ふるに田樂上下に流行し、白拍子とて、女子が男装をなし、太刀を佩いて歌舞することも、それに伴ふ

て流行した。白粉をつけ黛を施し齒を染めた朝臣等が、日夜かかる遊興に耽るの様は、まさに文化の極度の爛熟を思はしめる。爛熟は發達の健全なものではない。花環を以て囁飾された墮落への第一門そのものである。

【考察問題】 (一)院政時代の服制圖と、藤原氏榮華の時代の服制圖とを比較觀察し、相互の異同點を述べよ。

(二)後三條天皇の朝權恢復の御遺業が、遂に成らなかつた理由を述べよ。

【練習問題】 (一)白河法皇(高校)。(二)僧兵の起原(高師)。(三)南都北嶺(陸士)。(四)強裝束。

### 第廿二章 保元の亂

原因 崇徳上皇の御不満 【崇徳天皇讓位を強要せられ給ふ】 鳥羽法皇、御子崇徳天皇を愛し

給はず、寵姫美福門院(中納言藤原長實の女得子)の所生體仁親王(生後僅かに三ヶ月の方)を立てて皇太子とし、やがて天皇

に論じて、この皇太子に位を傳へしめられた。新帝は第七十六代近衛天皇にして、御年三歳の御幼主にましますのである。

【御子重仁親王の即位をも遮られ給ふ】 近衛天皇は、御年十七、御嗣子なくして、崩御せられた。

鳥羽法皇は氣持よく  
御子崇徳天皇を愛し  
給はず、寵姫美福門院  
の所生體仁親王を立てて  
皇太子とし、やがて天皇  
に論じて、この皇太子に  
位を傳へしめられた。

よりて崇徳上皇は、此度こそは御自ら御重祚あらせられるか、又は御子重仁親王を即位せしめられるか、二つに一つと御期待遊ばした。輿論も亦重仁親王に望を囑した。然るに美福門院及び關白忠通等は、近衛天皇の崩御は崇徳上皇の呪咀によるもの等々疑ひ、法皇に勸めて、上皇の同母



は、長子關白忠通を愛せず、次子左大臣頼長を愛した。ここに於て、忠通は日に不満を重ね、頼長は兄に代つて關白たらんとの野望を逞うした。

●頼長・崇徳上皇を奉す。頼長は頭腦明敏の才子であつた。之がために、常に父忠實の愛を獨占し得たのみならず、また鳥羽法皇の御信任を得、かつ朝野の衆望を悉く收めて、權勢一時は兄をも凌いだ。けれども大度の傑士ではなかつたらしい。愛に狎れて増長し、專恣の振舞をやがて重ねた。されば間もなくまづ法皇の寵を失つた。而して寵を失ふと小才子の常だ、日頃の横柄さにも似ず、俄にあはてふためいた。その結果が小刀細工的政策の捻出となつた譯だ。即ち崇徳天皇に親近し、その御子重仁親王を擁立し奉るこゝによりて、己れやがて攝政たらんを計畫したのである。

かくて天下が略々二派に分裂した。鳥羽法皇・後白河天皇・關白忠通を中心とする勢力と、それに對して、崇徳上皇・左大臣頼長を中心とする勢力だ。

●崇徳上皇の召兵。後白河天皇の保元元年（一八一六年）、鳥羽法皇崩ぜらる。崇徳上皇、よりて直ちに入臨せんとせられたのに、左衛門權佐藤原惟方は、遺詔を稱して、之を宮門に拒み奉つた。ああ感情の去來あはたたくして、理智の輝きために發せず、加ふるに奸惡の黨、徒に蔓りて事を益々紛糾に導く。上皇子として而も父法皇を弔ひ給ふ能はず。御激怒今やその極に達せ



**結果** ●崇徳上皇 (一)崇徳上皇は、白河殿をお落ちの後、一旦仁和寺に入つて落飾されたが、遂に讃岐に遷され給ふた。(二)また御子重仁親王は剃髪を強制され給ふた。かくて皇統の御望みが、崇徳上皇の御後からは、永久に断たれたのである。

●藤原頼長 (一)藤原頼長は、逃走の途上流矢に中り、遂に奈良坂で斃れた。(二)その子兼長・師長等十三人は、悉く遠流に處せられた。

傾きかけた藤原氏の勢力が、かくて之より益々傾いたのである。

●源氏 ●崇徳上皇方 (一)まづ爲義が斬られた。尤も、流石に義朝も、父を斬るには到底忍びず、己が勳功の悉くを捧げて、以て之を救はうとしたが、許しを得ることが出来なかつた。(二)爲義處刑の審議開かるるや、審議概ね以爲らく、「死刑久しく廢す(藤原仲成を誅せし後、朝臣も死に處せざること三百四十年)。加ふるに今諒闇なり。之を行ふ可からず。」と。されど只一人小納言藤原通憲は主張して曰く、「悉く誅するに非ざれば恐らくは後患を生ぜん。」と。かくて爲義の五人の子(即ち義朝及び爲朝等の兄弟)をはじめとして、黨與七十餘人が皆斬られた。時人以て淫刑と評する如くに、確に、社會秩序や人間道徳そのものを考へての刑ではなかつた。(三)爲朝も勿論斬られんとした。されど非常の壯士なるを以

て、勅して特に死一等を減じ、臂筋を断ちて、伊豆大島に流された。

【後白河天皇方】 義朝は獨り武勳めでたく、次第に重く用ゐられて、左馬頭に累進した。

けれども一族の勇士悉く斬られては詮術もない。日に細り行く源氏の命運をみつめては、彼はただ心に涙するばかりであつた。

●平氏 ●崇徳上皇方 平忠正は清盛のために斬られた。されど清盛がこの忠正を斬つたことには、「われ叔父忠正を殺さば、義朝も必ず父爲義を殺すべし。」との、政策的動機が、多分に含まれておることを忘れては成らぬ。

【後白河天皇方】 平清盛は武勳第一として播磨守となつた。勿論官位も累進した。

かくて保元の亂は、ある意味に於ては、平氏興隆の發祥戦であつたのである。

【考察問題】 一 保元の亂の武勳第一の者は、衆目の見る所、源義朝であつた。その故を問ふ。(二)保元の亂は、戦争としては見るべき程の大亂ではなかつたが、政治上には甚だ重要な意味を持つておる。理由如何。

【練習問題】 (一)保元の亂(商船)。(二)藤原忠通(高師)。(三)源爲義(女高師)。(四)源義朝(陸士)。(五)保



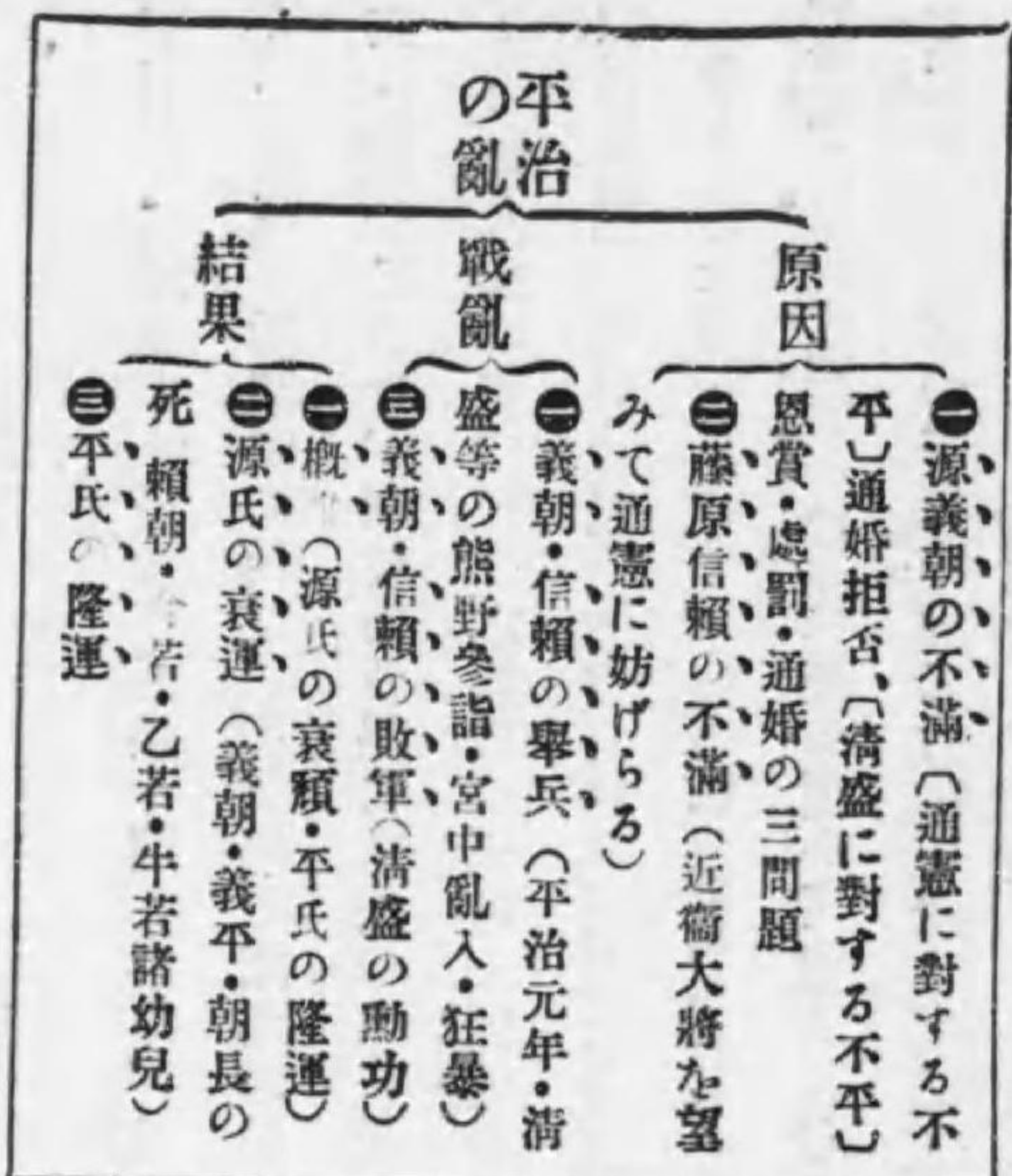
元の亂の結果(外語)。

### 第廿三章 平治の亂、平氏の全盛

**原因** ●源義朝の不滿 【通憲に對する不滿】 保元の亂後、後白河天皇は、位を御子二條天皇に譲り、御自らは上皇として政を院中にお聴きになつた。時に藤原通憲(維髪して信西と號す)あり、博識多才を以て上皇に信任せられ、威權頗る高かつた。されば源義朝は、兼ねて一族の衰微を歎けることとて、その挽回の策として、通憲の子是憲に、己が女を嫁せしめんとした。然るに通憲は、之を拒んだ。拒んだのみならず、未だ幾許も經たずして、清盛の女を納れて、子成範の妻とした。ここに於て義朝は、遂に通憲を惡むに至つたのである。

【清盛に對する不滿】 保元の亂の鎮定後、義朝・清盛兩人は、犬猿以上の不和となつた。義朝の勳功第一に在り乍ら、恩賞遙かに清盛の下におかれたことは、その原因の第一だ。源氏の子弟郎黨の悉くを斬り乍ら、平氏を殆んど罰しなかつたことは、その第二の原因だ。加ふるに今また清盛はその暗中大飛躍の大活動によりて、權勢當時に高き通憲の姻戚となつた。身のため家のため源

氏一族のため、鎮めんとしても心終に鎮まらず、斃而後已まん奮闘を、何等かの形式に於て試みることは、義朝の考慮當然の歸結であらねばならぬ。



●藤原信賴の不滿 通憲と時を同じうして藤原信賴があつた。後白河上皇の寵遇また甚だ厚く、請によりて、近衛大將御叙任の御沙汰さへあらうと志してゐた。兩雄並び立ち得ぬのは自然の理法。ここに於て通憲は、法皇を諫めて曰く、「大將は重任なり。華胄に非ざるよりは敢て輕々しく授けず、若し信賴を以て之に任せば、恐らく禍根を取らん。願くば少しく聖意を止めよ。」と。遂に信賴を妨げたのである。

同病相憐む。義朝・信賴兩人は、いつしか固く相結托した。

**戦亂** ●義朝・信頼の擧兵 平治元年（一八一九年）、清盛は子重盛等と共に、熊野に詣で、洛中俄かに隙を生じた。ここに於て義朝・信頼の兩人は兵を擧げた。保元の大將義朝に指揮される兵士もが、榮華優柔の公達等を都に襲ふ。赤兒の手よりも、もつと捻ぢ易いに違ひない。即ち、宮中に亂入して、畏くも上皇及び天皇を幽し奉り、次に通憲を攻め殺し、また信頼は、自ら大臣・大將となり、義朝を播磨守に任じ、その他の黨與の者にも悉く官階を加へ、かくて朝餉所に居て冠服舉止に天子に倣ひ、朝會ある毎に群僚の上に坐し、専ら機務を司つた。兒戯に類する事だらうけれど、當人達はすつかり本氣だ。天晴れ鬱憤をはらし了つたお積りだ。

【考察問題】 義朝・信頼の擧兵は、動機は可愛い。けれどもその手段たるや、寸分の酌量をも加へられぬ。このことを念頭において、平治の亂の批判を行へ。

●義朝・信頼の敗軍 清盛、變を聞いて途よりひき返し、直ちに天皇を己が邸第六波羅に迎へ、また上皇をも逃し奉つて仁和寺に行幸を請ふた。かくてはじめて、義朝・信頼追討の詔をうけ、長子重盛等をして、兵を率ゐて大内に向はしめた。勿論この戰に於て、義朝・義平（義朝の長子）等の源氏の諸將は皆勇敢に奮戦し、大いに重盛方をなやました。けれども大勢は如何ともなし得ない。凱歌はやが

て攻撃軍の奏する所となつた。

**結果** ●概説 平治の亂は色彩愈々鮮かな源平二氏の争であつた。さればこの亂平定の後には、敗軍の源氏は殆んど滅び盡し、榮冠の平氏は彌が上にも隆運を壽いだのである。

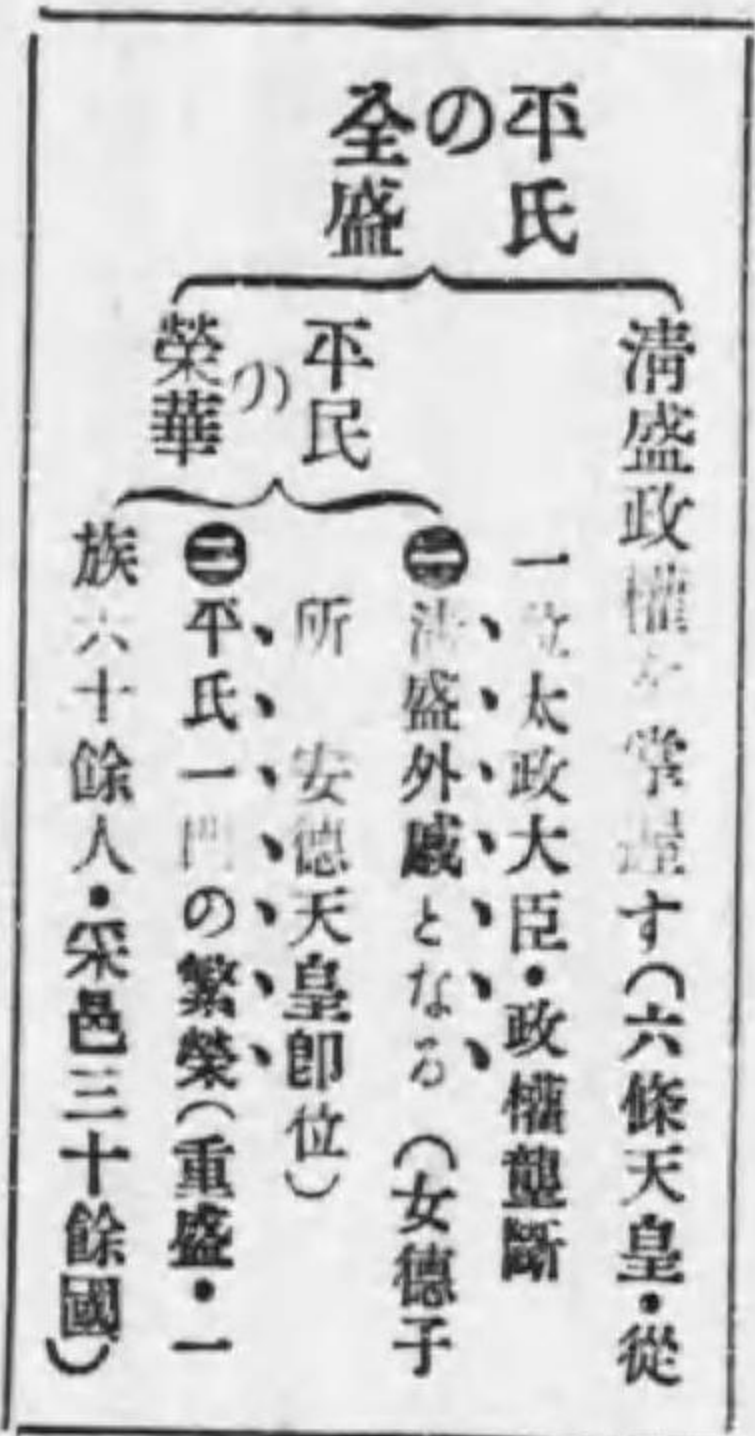
●源氏の衰頹 義朝は一旦尾張に逃れて家臣に頼つたが、反つて之に殺された。時に年三十八。義朝の長子義平は、待賢門の戰の時などは、頗る勇名を馳せたが、遂に敵し得ず、捕へられて六條河原に斬られた。年二十。また次子朝長は、父と共に逃れて美濃青墓まで至つたが、たまたま風雪大いに激しく、かつは戰に蒙つた傷のために、行歩意に任せず、從容として父の刃に斃れた。かくて源氏は、今や餘す勇士殆んどなく、只々年僅かに十三の第三子頼朝が、清盛の繼母池禪尼の慈により、死を宥されて伊豆蛭島に流されたこと、また義朝の妾常磐の抱く今若・乙若・牛若の三幼兒が、纔かに死を宥されたこと。ただそれだけがせめてもの頼みであつた。

●雪壓笠 檐風 捲袂 呱呱 覓乳 若爲情 他年 鐵拐 蜂頭 險叱 叱叱 三軍 是此聲

●平氏の隆運 保元の亂の勳功は源平二氏の山別けだつた。けれども平治の亂の勳功は、清盛・重盛父子より外に、之を歸すべき人がない。即ち全く平氏の獨舞臺であつた。亂後の平氏の隆運に

決して不思議はないではないか。

清盛政權を掌握す 保元・平治の戦功によりて、平氏の威望大いに高まり、第七十九代六條天皇の御代には、清盛、従一位太政大臣となり、武臣乍らも政權を掌握した。是に於て院中また實權なく、まして藤原氏、攝政・關白・太政大臣等は、ただ全く員に備はるのみとなつた。



平氏の榮華 清盛外戚となる。やがて清盛の女徳子(建禮門院)、第八十代高倉天皇の中宮となり、皇子言仁親王を生み奉る。而して親王は、生後一ヶ月餘にして皇太子に立ち、御年三歳にして帝位に即かれた。第八十一代安徳天皇である。之より清盛は外戚として、益々威權を逞うした。

平氏一門の繁榮 かくて平氏一門の繁榮甚だましく、重盛が内大臣となりついで左近衛大將となつたのをはじめとして、要職に上りて朝官たる者一族中に六十餘人、その采邑は實に併せて三十餘國に跨つたと云ふ。確に平時忠(清盛の妻の兄)の豪語した様に、平氏に非る者は人でなかつた。

【練習問題】 (一)平治の亂(商船)。 (二)藤原通憲(高校)。 (三)藤原信賴。 (四)保元・平治の兩亂と源氏の勢力の消長。

### 第廿四章 諸源の舉兵

#### 鹿ヶ谷の變

鹿ヶ谷の會合 「驕る平家は久しからず。藤原氏及び源氏は云ふまでもなく、平氏一族の中にすら、清盛のこの専恣この横暴を惡む者は、漸く多きを數へて來た。而して後白河法皇が、また隠然この黨與の中堅をなされたことも特に注意に値する。

たまたま後白河法皇の寵臣執事權大納言藤原成親は、左近衛大將たらんことを望んだが、平氏のために遮られた。即ち平重盛之に任じ、剩へ弟宗盛は右近衛大將に任じられた。よりて成親不平である。遂に藤原西光と謀り、法皇の密旨を得て、源行綱・平康賴・僧俊寛と約結し、京都鹿ヶ谷の山莊に會して、平氏討滅の策議を廻らした。時に法皇は、親しくここに行幸せんと思召したが、このことだけはと、僧靜憲が諫止し奉つた。

事敗る されど謀議は遂に露はれた。よりて清盛は、まづ西光を捕へて斬に處し、更に成親を越



前に流して、翌年人を遣りて殺し、康頼及び俊寛を鳥も通はぬ鬼界島に遠流した。またこの時、清盛は長くも法皇までも幽しまつらうとした。けれども之は、忠孝兩全の子重盛が諫止したこゝ、人のあまねく知る所である。

【忠ならんと欲すれば孝ならず】 ……悲しきかな、君の御爲めに奉公の忠を致さんとすれば、迷塵八萬の頂

きよりも猶高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を遁れんとすれば、君の御爲めには已に不忠の逆臣とも成りぬべし。進退是れ窮まれり。是非如何にも辨へ難し。申し請くる所詮は、唯重盛が頭を召され候へ……。(平家物語)

【考察問題】 (一)僧靜憲は如何なる心で、法皇の鹿ヶ谷行幸を諫止したか。(二)忠孝兩つの道を全うしたる重盛の至誠は、平家物語「忠ならんと欲すれば孝ならず」の章中に體如としておる。是非一應熟讀玩味せよ。

**清盛の專横**

●無道の極み

【後白河法皇を幽し奉る】

治承三年、

内大臣重盛病を得て薨する

や、清盛の專恣無道は再び昔へ逆行した。即ち後白河法皇が、關白藤原基房と謀り、重盛の故領を召し上げられたことを大いに怒り、基房をば流罪に問ふた。法皇に親近しまつた三十九人の朝臣をば悉く刑した。而して遂には法皇をまで鳥羽殿に幽し奉つた。

【安徳天皇を擁立す】 高倉天皇は、御父後白河法皇の幽閉に、益々清盛を厭はれた。けれどもそれを清盛は寧ろ喜んだ。何故ならば、かねて外戚の權威を振はんことに汲々たりし彼であるから、この機に乗じて、天皇に迫り、己が女建禮門院徳子の所生言仁親王を擁立するに好都合であ



埋木の花咲く事もなかりしに、身のなるはてぞ哀れなりける、との辭世をこどめて、平等院の扇の芝で自殺した。美しい最期だ。

●諸國の源氏 頼政は舉兵と共に敗死した。けれども之より近江・美濃・尾張・信濃・甲斐・伊豆・常陸等の東武士、及び、各地に離伏してゐた源氏の一族郎黨は、一齊に奮起して、令旨を奉じた。頼政の英靈永へに安らかであるに違ひない。

源頼朝 ●舉兵「姪島に放たれた虎の子」頼朝は、長じて智略益々卓で、頻りに平氏討滅の刃を磨いてゐたが、ここに以仁王の令旨を拜して大いに喜び、直ちに多年の傳育の恩人北條時政と相謀り、その援を得て兵を起し、まづ目代平兼隆を攻め殺して伊豆を略取した。それより彼は相模に進んだ。尤もその國石橋山では、大庭景親・伊藤祐親等の雲霞の大兵を腹背に受け、流石に彼も惨敗したが、轉じて安房に入るに及んでは、舊恩を思ふ東國武士が、續々來り屬したから、忽ちにして大勢力を形成したのである。

●富士川の對陣(平氏の軍を潰走せしむ) 頼朝舉兵の報傳はるや、清盛は大いに驚き、直ちに嫡孫維盛及び弟忠度等に兵を興へて、源氏の軍と富士川を挟んで對陣せしめた。然るに、時に源氏が總兵二十萬而も援軍續々として各地より到來するといふ大氣勢に反して、平氏は總兵僅かに五萬にすぎなかつた。加ふる源氏の軍は何れも一騎當千の東武士、それに反して、平氏の軍は懦弱優柔の武者人形にすぎなかつた。さればこそ平氏の軍は、たまたま一夜、富士沼に群る水鳥の驚き飛び立つ羽音をきくや、必定敵の夜襲に相違なしと誤信して、軍中俄かに大混亂、大將維盛をはじめとして、將卒皆悉く、とる甲冑もとり敢へず、箆をもうち忘れて、醜くも潰走したのである。

●鎌倉に據る 平氏潰走せりも雖も、頼朝は、後を追ふて都には上らず、軍をかへして鎌倉に赴き、まづ八幡宮を鶴岡に再建し、ついでその近郊に居館を營んだ。寂しかつた坂東の一漁村が、今や天下政權の發動の地たらんとしておる。

【考察問題】 頼朝が直ちに西上せず、軍を暫く東國にかへしたのは何故か。

源義仲 ●舉兵 之よりさき頼朝の従弟義仲(木曾山中に成長したから、木曾義仲又は木曾冠者とも云ふ) 又以仁王の令旨を奉じて信濃に起り、北陸道に出でて越中國俱利伽羅峠に維盛の軍を破碎し、進んで叡山に據つた。勿論僧兵はその同盟者だ。而も彼はここに後白河法皇すらも迎へ得た。

●平氏の都落と義仲の入京 【平氏の都落】 時に平氏にては、清盛已に薨じて、嗣子宗盛不肖であつた。されば彼は、義仲都に迫ると聞くや、周章狼狽なす術を知らず、壽永二年（一八四三年）七月、安徳天皇及び神器を奉じ、一族を擧げて、遂に都を後に西國に落ち行いた。

【清盛の薨去】 入道相國（入道清盛）病みつき給へる日よりして、湯水も喉へ入れられず、身の内の熱き事は火を焼くが如し。臥し給へる所、四、五間が内へ入る者は、熱さ堪へ難し。唯宣ふこととは、あたあたとばかりなり。誠に徒事とも見え給はず。餘りの堪へ難さにや、比叡山より千手井の水を汲み下し、石の船場へ、其れに下りて寒え給へば、水夥しう湧き上つて、程なく湯にぞ成りにける。若しやと笈の水をかすれば、石や鐵などの焼けたる様に、水進りて寄り附かず、自ら中る水は、焔と成りて燃えければ、黒煙殿中に充ち満ちて、炎渦巻いてぞ上りける……（平家物語）

【考察問題】 (一) 平家物語の「清盛薨去」の章は、前記「忠ならんと欲すれば孝ならず」の章と、著しい対照で書かれておる。即ち、強く勸善懲惡を暗示する作者の態度が窺はれる。是非一應熟讀玩味せよ。(二) 専恣無道の清盛は、その當然の應報として、臨終の苦惱がはげしかつた——と見ることは、平家物語作者の頭を相當強く支配した思想であつた。よりて之等を通して、當時の國民の倫理思想（殊に忠君）の一斑を窺へ。

【義仲の入京】 ここに於て義仲は法皇を奉じて入京した。義朝の敗北以來廿三年にして、京都が再び源氏に歸した譯である。かくて義仲は功を以て伊豫守に任ぜられ、また行家（爲義の第十子）は備前守に任ぜられ、更にまもなく義仲は百四十餘所、行家は九十餘所の采邑を賜はり、かつ共に院の昇殿を許された。得意の程思ふべしである。

●義仲の狂暴 義仲京都に在るや、功に誇りて頗る狂暴、遂に叛いて法皇を幽し奉り、また卿相の貶陟を行ひ、加ふるにその將卒は市中の良民を劫掠した。されば之より上下の人心漸く彼を離れ、その追討を希ふ心が甚だ切となつて來た。

●義仲の敗亡 かれて頼朝は、先んじて都に入つた義仲を、密かに嫉む心が多かつた。然るに今またかかる狂暴を目撃した。されば機會まさに乗すべしとなし、二弟範頼・義經に命じ、兵六萬を率ゐて攻め上らしめた。かの佐々木高綱・梶原景季の兩雄が、共に頼朝から賜はつた名馬池月・磨墨にうち乗つて、白浪をく宇治川に、互に先陣を競ふたことは、寄せ手の軍が京師の關門宇治・勢多を衝いた時の壯舉であつた。

かくて義仲はまもなく都を棄て去つた。兵を失ひ弓矢を盡して、今は如何ともなす能はず、深く

腹かき切らんぞ、粟津の原に駒を馳せたが、時あたかも黄昏のこととて、誤つて深田に乗り入り、心ならずも敵矢に斃れた。擧兵後僅かに三年、いはば洛中の平氏を態々追ふて、之を頼朝に與へたのと異らぬ。旭將軍の英名もただ一瞬時の電光であつた。

**一の谷の戦** ●平氏福原の舊都に據る。さきに平氏は義仲に追はれて、一度び九州太宰府にまで逃れたが、いま京都に於ける源氏一族の争起るや、また勢力を挽回し、九州・四國の兵を率ゐて屋島に據り、更に山陽各地の兵を併せて、進んで攝津福原の舊都に據つた。即ち北は磯・鴨・越・摩耶・六甲と續く武庫連山の險を負ひ、南は須磨・和田の海に臨み、また東門としては生田森、西門としては一の谷を固め、中に十餘萬の大兵を擁し、數多の兵船を舫べ、陸にも海にも風に紅旗をなびかせて、威容堂々の陣を張つた。

●一の谷の戦。ここに於て範頼及び義経は、平氏追討の院宣を拜した。よりにて範頼は兵五萬を率ゐて播磨路より一の谷に赴き、義経は三萬を具して丹波路から同じく一の谷に迫つた。思ふに源氏の策戦は、東門(生田森)よりも西門(一の谷)の備防の手薄ならんことを豫想し、敵のこの虛を衝かんとするに在つたらしい。加ふるに義経は更に虛中の虛を衝いた。即ち西門は之を土肥實平

に托しおき、自らは精兵三千を率ゐ、一の谷の搦手たる鴨越の險峻をさか落しして火を敵營にあびせかけた。然るに、折から風烈しく猛火煙塵忽ち天地を晦冥し、城兵頗る周章狼狽、固むる門をも固め得ず。範頼・實平はじめ源氏諸軍の亂入するがままにうちまかせた。何たる醜體ぞ。

かくて平重衡(盛)の弟は虜にされた。忠度(叔)・經正・經俊・敦盛・通盛(以上何れ)等の一族諸將は戦死した。宗盛は安德天皇を奉じ、倉皇として海路より四國の屋島に落ちのびた。ただ知盛(弟)だけは、再擧を企つべく、西海をさして奔つた。

**屋島の戦** 一の谷の戦の後、範頼は知盛を追ふべく山陽道から九州さして進んだが、義経は水軍を整へ風雨を冒して屋島に赴いた。而して屋島のこの戦たるや、云ふまでもなく、源平兩氏にも秘術を相盡した。即ち義経が得意の火攻めの策をとれば、宗盛もまた三十六計逃ぐるに如かさる策をとり、天皇及び女院を奉じて海上に浮んだ。陸と澳とが白と紅との討戦である。「戦を挑み合ふ、夕暮れの屋島……」。

そこで次が奈須與一の「扇の的」と云ふ場面の譯だ。

【扇の的】「……澳には平家、船を一面に並べて見物す。陸には源氏、櫓を並べて之を見る。何れも何れも晴



れならずといふこと無し。與一目を塞いで「南無八幡大菩薩、別してはわが國(郷國下野國)の神明、日光權現、宇津宮、那須温泉大明神、願はくばあの扇の眞中射させてたばせ給へ。是れ射損する者ならば、弓切り折り自害して、人に一度面を向ふ可からず、今一度本國(同じく)へ歸さんと思はし召さば、此の矢はづさせ給ふなと心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏽を取つて番ひ、まっ引いてひやうと放つ。小兵と云ふ條、十二東三伏、弓は強し、鏽は浦響く程に長鳴りして、あやまたず扇の要際一寸許りおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏽は海へ入りければ、扇は空へぞ揚がりける。春風に一探二探もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、澳には平家船を扣いて感じたり。陸には源氏船を扣いてどよめきけり。(平家物語)

**壇浦の戦** ●平氏の滅亡 平氏の軍は、屋島を落ちて、筑前博多に逃れたが、時に豊後に在つた範頼に遮られて、遂にその勢力を伸ばすを得ず、止むなく途を返して長門壇浦に漂ふた。兵船約五百艘。やがて義経七百艘を率ゐりて之を攻める。窮鼠却つて猫を咬むか、大將義経また名を成すか。平氏の命運終に終るか、源氏中道に蹉跌をふむか。互に死活にかかはる此の一戦であつた。

されど平氏は再び敗れた。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。奢る者は久しからず。唯春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ。偏に風の前の塵に同じ……」と。實に平家物語の云ふ如く、平氏の一族は、壽永四年(一八四五年)櫻の花散る彌生の頃、榮華僅かに二十年、槿花一朝の夢のまゝに、痛ましくも、安徳天皇及び神劍を擁し奉り、殆んど悉く、分斷の荒き波の底に姿を散らした。

●義経等の凱旋 やがて義経等は、神鏡・神璽及び建禮門院を奉じ、宗盛父子を伴つて、めでたく京師に凱旋した。さうして久しく續いた源平二氏の争が、ここに一先づ幕をとざした。

【神劍の御代り】 神劍は、くまなく海底を探したけれど、遂に得ることが出来なかつた。よりて晝御座敷を以て、之に代へさせられたが、やがて二十餘年の後、第八十三代土御門天皇の御宇に、更に伊勢神宮の神庫中なる寶劍を以て代へさせられた。

【練習問題】 (一)藤原成親(高師)。 (二)福原の都(高校)。 (三)以仁王。 (四)旭將軍。 (五)屋島の戦(高校)。 (六)壇浦の戦(陸士)。

## 中古史(後)概括問題

### 時代の區分に關する問題

- 一、中古後半の時代(桓武天皇の平安奠都より安徳天皇の御代の平家滅亡に至るまで)は、之を平安時代とも云ふ。その理由如何。
- 二、平安時代は、之を、學者によりて左の四期に細分する。その理由を考察せよ。
  - 1 平安奠都期(第五十代桓武天皇より第五十四代仁明天皇に至る約五十年の間にして、平安奠都・蝦夷征伐・漢文學の隆盛・佛教の新宗派の興隆・藏人所及び檢非違使廳の設置等によりて起れる大寶令の變化・藤原氏の擡頭等の諸事件を含む時代)
  - 2 藤原氏專權期(第五十五代文德天皇より第七十代後冷泉天皇に至る約二百年間にして、菅原道眞の貶謫・他門の排斥・一門の争・攝政關白職の壟斷等の藤原氏の專恣榮華、承平・天慶の亂・平忠常の叛・前九年の役・後三年の役・或は武門武士の興起等の地方制度の紊亂、支那風を脱したる本邦獨特の文化の發達等の諸事件を含む時代)。

3 院政期(第七十一代後三條天皇より第七十八代二條天皇に至る約百年の間にして、後三條天皇の親政・白河法皇の院政の御創始・僧兵の横暴その他の院政の弊害・保元の亂・平治の亂・平氏の勃興等の諸事件を含む時代)。

4 平氏專權期(第七十九代六條天皇より第八十一代安徳天皇に至る約二十年にして、平氏の專恣榮華・諸源の擧兵・平氏の滅亡等の諸事件を含む時代)。

### 時代の特徴に關する問題

- 一、平安時代の特異點を次の項目から考察せよ。(1 政權推移の状態、2 宗教・藝術・學問等に於ける共通基底原流)。
- 二、左の各期の時代的特異點を、括弧内の諸項目に基いて考察せよ。
  - 1 平安奠都期(1 平安奠都、2 宗教・藝術・學問・政治組織等の徐々たる國民化、3 藤原氏興隆の基礎の確立)。
  - 2 藤原氏專權期(1 藤原氏興隆の経路、2 都に於ける藤原氏の榮華と地方に於ける諸制度の紊亂、3 藤原氏衰頹の経路)。
  - 3 院政期(1 院政の創始からその衰滅に至る経路、2 源氏興隆の基礎確立)。

諸種の問題

1 平氏専權期(1平氏の専恣榮華、2源氏興隆の基礎確立)。

一、上古より桓武天皇に至るまでの蝦夷征伐の概要を述べよ(陸士)。

二、平安時代に於ける天台・眞言兩宗派の盛衰消長を述べよ(高校)。

三、平安時代に於ける對外關係を詳説せよ。

四、平安時代に於て、藤原氏抑壓の御企劃及び御實行を遊ばされたる天皇名を列擧せよ。並にその御抑壓の狀況を概説せよ。

五、莊園の由來を明確に説け(高校・高商・海樓等)。

六、源平二氏の起原及びその盛衰を述べよ(高師・女高師・陸士)。

中古史(後)年表

延暦	三(一四四四)……長岡奠都
同	四(一四四五)……藤原種繼暗殺さる
同	七(一四四八)……僧最澄比叡山に延暦寺を創む。紀古佐美を征東大將軍とさる

(一) 代 時 安 平

期 都 奠 安 平

50 桓武	同 一〇(一四五一)……大伴弟麻呂を征夷大使とさる
同	一一(一四五二)……渤海來貢す
同	一三(一四五四)……平安奠都
同	一六(一四五七)……阪上田村麻呂を征夷大將軍とさる
同	二〇(一四六一)……田村麻呂蝦夷を討平す
同	二二(一四六二)……勝澤城を築きて鎮守府を移す
同	二三(一四六四)……最澄・空海入唐す。秋田城を廢して郡となす
51 平城	同 二四(一四六五)……最澄歸朝して天台宗を傳ふ
大同	元(一四六六)……空海歸朝して眞言宗を傳ふ
弘仁	元(一四七〇)……藏人所を設く。藥子の亂
同	四(一四七三)……文屋綿麻呂蝦夷を平ぐ
52 嵯峨	同 七(一四七六)……空海高野山に金剛峯寺を創む
同	一一(一四八〇)……藤原冬嗣弘仁格式内裡式を撰す
同	一二(一四八一)……藤原冬嗣勸學院を建つ
53 淳和	天長 七(一四九〇)……檢非違使廳を設く
承和	九(一五〇二)……皇太子桓貞親王を廢し、橘逸勢等を貶謫す
54 仁明	嘉祥 三(一五一〇)……學館院を建つ

(二)代 時 安 平

(1) 期 權 專 氏 原 藤

55 文徳もんたく 天安 元(一五一七)……藤原良房太政大臣となる

56 清和せいわ 貞観しんかん 八(一五五五)……藤原良房攝政となる

57 陽成やうせい 元慶 五(一五四一)……在原平辨學院を建つ  
同 八(一五四四)……藤原基經天皇を廢し奉る

58 光孝くわうかう

59 字多うだ 仁和 三(一五四七)……藤原基經關白の詔を受く  
寛平 元(一五四九)……平姓を高望王に賜はる  
同 三(一五五一)……菅原道真藏人頭となる  
同 六(一五五四)……遣唐使の派遣を停め給ふ

60 醍醐だいご 昌泰 二(一五五九)……藤原時平を左大臣とし、菅原道真を右大臣とし給ふ  
延喜 元(一五六一)……菅原道真左遷せらる  
同 三(一五六三)……道真薨去す  
同 五(一五六五)……紀貫之等古今和歌集を撰す  
延長 五(一五八七)……渤海滅ぶ  
承平 五(一五九五)……新羅王高麗に降る。平將門、叔父國香を殺す  
天慶 二(一五九九)……藤原純友叛す

(三)代 時 安 平

(2) 期 權 專 氏 原 藤

61 朱雀すざく 同 三(一六〇〇)……平將門誅に伏す  
同 四(一六〇一)……藤原純友誅に伏す

62 村上むらかみ 慶和 元(一六二一)……源姓を經基王に賜はる

63 冷泉れいぜん 安和 二(一六二九)……安和の變

64 圓融えんじゆう 貞元 二(一六三七)……源兼明左大臣を罷められて親王とさる

65 花山くわざん 寛和 二(一六四六)……天皇花山院入御、翌日出家し給ふ

66 一條いちじゆう 正暦 四(一六五三)……菅原道真に正一位太政大臣を追贈せらる  
長保 二(一六六〇)……藤原道長の女彰子を中宮とし給ふ

67 三條さんじゆう

68 後一條ごいちじゆう 寛仁 三(一六七九)……刀伊入寇す  
治安 二(一六八二)……法成寺成る。供養のため天皇臨幸さる  
萬壽 四(一六八七)……藤原道長薨す  
長元 元(一六八八)……平忠常下總に叛す

69 後朱雀ごすざく

平安時代 四代

院政期	藤原氏(3)
70 後冷泉 天喜 元(一七二三)……鳳凰堂成る 康平 五(一七二二)……前九年の役終る	永承 六(一七一)……阿倍頼時陸奥を亂す
71 後三條 延久 元(一七二九)……始めて記録所をおき、莊園の券契を調へ給ふ	
72 白河 應徳 三(一七四六)……白河上皇院政を創始し給ふ	
73 堀河 寛治 元(一七四七)……後三年の役終る	
74 鳥羽	
75 崇徳 大治 四(一七八九)……鳥羽上皇の院政始まる	
76 近衛	
77 後白河 保元 元(一八一六)……保元の亂	
78 二條 平治 元(一八一九)……平治の亂	

平安時代 五代

平氏專權期
79 六條 仁安 二(一八二七)……平清盛太政大臣となる(武臣太政大臣の始め)
80 高倉 承安 二(一八三二)……平清盛の女徳子入内して中宮となる 安元 元(一八三五)……僧源空淨土宗を開く 治承 元(一八三七)……藤原成親等、平氏討伐の陰謀を企つ 同 三(一八三九)……平重盛薨す。清盛、法皇を幽し奉る 治承 四(一八四〇)……源頼政、以仁王を奉じて兵を擧ぐ。頼朝・義仲等續いて起る
81 安徳 同 (同)……福原遷都 同 (同)……源頼朝侍所を鎌倉におく 養和 元(一八四一)……平清盛薨す。富士川の對陣に平氏潰走す 壽永 二(一八四三)……平氏の都落ち。義仲入京 同 三(一八四四)……義仲粟津に敗死す。一の谷の戦 同 (同)……頼朝、公文所・問註所を鎌倉におく 同 四(一八四五)……平氏屋島に敗る。次いで壇浦に滅ぶ

餘白錄

菅原道真

知らぬ火を當てにとび行く梅の花

同

寝坊な鶯眼がさめてオヤ筑紫

能因法師

能因は一つの嘘を小半年

源義經

義經は實に源の九郎人

平清盛

清盛の醫者は裸で脈をとり

同

三年忌ぎりて清盛無縁なり

旭將軍

朝日出て二十餘年の夢はさめ

宇治川

怪我あるななどと高綱ちやらを云ひ

一谷合戦

矢合はせの無き日は須磨の歌合せ

同

みんな荷にしろと笏にて御指圖

第三編 近古

第一章 源賴朝

幕府の創立

治承四年（一八四〇年・平氏滅亡の五年前）、源賴朝は侍所を鎌倉に開いた。之れ鎌

倉幕府の始めであるが、抑々幕府がここに開かれた理由は、凡そ次の二つである。1、鎌倉は源氏舊縁の地であること、平氏の聲望が西國に高いのに對して、源氏の聲望は東國に高いと云ふ事は、既に今まで屢々述べて來た。2、鎌倉は要害の地であること、西・北・東の三面は山を繞らし、南は澎湃たる怒濤の大洋に臨む。加ふるに西の方遙かなる足柄・箱根の連山は、京都に於ける平氏及び朝廷等に備ふべく好箇の天險である。

【考察問題】（一）北及び東の二方面には、足柄・箱根程の天險を要しない。何故かを考察せよ。

幕府の職制

概説 概して武家の政治は、何事も簡易にして實行を主とし、形式に拘泥せざ

るを以て特長とするから、その職制の如きも、皆必要に応じて定められたものばかりである。冗員多くして政務に滞滯を來しがちなかの王朝の制等とは、全然趣を異にする。

●在鎌倉の諸職 【侍所】 治承四年、幕府草創の際、之を置き、和田義盛を以てその別當としたことに始まる。武士を進止し、非違を檢断し、罪人を決罰し、また宿衛・扈從の兵員を選び、更に

幕府の創立 治承四年、幕府が鎌倉に開かれた理由(舊縁の地・要害の地)

●概観(簡潔)

●在鎌倉の諸職【侍所】 治承四年、和田義盛・職掌、【公文所】 壽永三年・大江廣元・職掌。【問註所】 同平・三善康信・職掌

●在京の諸職【京都守護】 同年、初めは義經、【六波羅探題】 承久の亂後、京都守護に代ふ

●地方の諸職【守護地頭】 設置の理由・職掌・設置の結果

源朝

幕府の職制

幕府の創立 治承四年、幕府が鎌倉に開かれた理由(舊縁の地・要害の地)

【職員】 別當、長官、和田氏滅亡の後には、代々北條氏を以て之に補した。所司(シヨシ)、次官、當初は梶原景時之に補されたが、建保六年以後は、常に四人をおくやうになつた。その他、開闢・小舎人・下部等がある。

【公文所】 壽永三年(一八四四年)、之を鎌倉の營中に設け、大江廣元を別當とし、他に五人の

【鎮西奉行】(長門探題)、【奥州探題】

議奏 設置の理由・掌・設置の結果

●奥州征伐の理由(陸羽の強盛・秀衡及び義經の死)

●奥州平定(文治五年・奥州平定・奥州總奉行をおく)

●天下 征夷大將軍拜命及び其意義

●頼朝の善政(鎌倉武士の美風を養ふ・地方制度を整頓す)

●皇室尊崇

●猜忌の心(骨肉功臣誅除)

政治及び人物

遂に北條氏の世襲となつてしまつた。令、次官。その他、家主・知家事・寄人等。

【問註所】 壽永三年、三善康信をして、諸人の訴を聞かしたことに始まる。問註とは、原告と被告とを推問して、その詞を文案に註記するの義である。

【職員】 執事、長官、三善康信の死後は、その裔なる町野・太田二氏の世襲となつた。執事代、常置の職では

ない。執事に事故ある時、臨時補せられるものである。その他、寄人等。

【考察問題】 侍所・公文所・問註所の中、侍所の權威特に重きは何故なるか。

●在京の諸職 【京都守護】京都(主として御所をさす)警衛の任に當り、洛中及び近畿を守護し、兼ねてその政務をも掌る。壽永二年平氏京都を去り、次いで翌三年義仲敗死するや、義經この職に補せられたが、文治元年その京都を去りて後は、北條時政之に補せられた。

【考察問題】 鎌倉幕府が京都守護をおいた根底的動機を考察せよ。

【六波羅探題】 承久の亂後、北條義時は、京都守護を廢して六波羅探題をおいた。内裡警衛を口實として、密かに之を抑壓し奉らしめたものにして、必ず北條氏の一族を以て之に任じた。(後章詳す)

●地方の諸職 【守護地頭】 1 設置の理由

功とその聲望と、その官位昇進の速かな、こゝこを嫉み、加ふるにまた梶原景時の讒言等を信じたから、遂には自己の地位の危きを慮るに至つた。(口)平氏殘黨討滅策。平氏の主腦はすでに西海に滅びたさは云へ、その恩顧の殘黨は、なほ各地に身を潜め、かくて頼朝の威令が未だ天下に遍く

なかつた。

ここに於て頼朝は、大江廣元の議を用ゐ、之等を追捕するを名として、朝廷に強請して守護・地頭をおいたのである。

【頼朝・義經の不和】 屢越狀、壇の浦の戰の後、義經は、生慶宗盛父子を送つて鎌倉に赴いたのに、頼朝は宗盛父子だけを請け取つて、義經の入府を許さなかつた。いたくわが身の不幸を歎いた義經は、屢越驛(鎌倉越村江の島の對岸)に至り、書を大江廣元に與へて、兄の心を和げんと乞ふた。この書が有名な屢越狀で、文辭愷切、讀む者をして涙を流さしめる。

●奥州落ち 鎌倉を追はれた義經は、或は吉野に、或は十津川に、時には北嶺に、また南都に、凡そ京都を中心として潜伏數月に及んだが、寸地も許さぬ厳しい追捕のために、遂に妻を修驗者に擬し、伊勢・美濃を経て北陸道から陸奥には入つた。平泉なる藤原秀衡に頼らんがためである。かの名高い勸進帳は、この奥州落ちの途中、安宅關で、辨慶の奇智巧に功を奏して警戒の眼をくらました物語である。但し史實としての眞否は疑問に屬する。

2 職掌 (イ)守護の職掌。守護は之を諸國におく。軍事(軍役ある時は、國中の地頭・御家人を)・警察の



事を司る。(口)地頭の職掌。莊園・公領におく。兵糧米徴收の事を司る。

3 設置の結果、頼朝はその家臣を以て守護・地頭にあて、而も己れ自らは之等を統率したから、從來國司・郡司等の有した土地及び兵馬の権は、頼朝の手一つに集つて來た。即ちやがて政權武門に歸するの緒をなしたのである。

【考察問題】 守護・地頭設置の根本動機は、義經及び平氏殘黨の討伐にあるか。或は天下の政權の掌握にあるか。

【鎮西奉行】 壽永四年、源範頼、平氏の餘黨を鎮めんがために、暫く豊後に留まつたことに起原する。而してそれが、鎮西奉行と稱せられるに至つたのは、建久二年のこごにして、更に九州探題と改稱されたのは、それより約百年後の永仁元年のことである。九國・二島の政を總ぶることを以て職掌とする。

【長門探題】 元寇以來、中國の沿海を防備し、兼ねてその政を總ぶるために、長門守護を廢して長門探題をおいた。多くは北條氏の一族を下して之に補した。

【奥州總奉行】 陸奥の藤原泰衡を滅ぼした後之をおいた。(詳しくは頼朝の奥州征伐の條参照)

議奏 頼朝は、進んで朝廷の内政にも干渉せんと欲し、守護・地頭設置と同年なる文治元年、新に朝廷に議奏を設置し、右大臣九條兼實・内大臣後徳大寺實定等十人を選んで之に任じた。之等の人々は、何れも頼朝に好意を持つ人ばかりであるから、之より頼朝は、身鎌倉に在りて、而も京都の政治を意のままに執り行ひ得る様になつた。

【考察問題】 政權掌握に關する頼朝の惡辣不忠な政策を指摘せよ。而して、この政策の謀臣は、常に大江廣元であるから、新井白石・賴山陽・藤田東湖等は、何れも詩を賦してまで廣元を攻撃してゐる。研究せよ。

奥州征伐 奥州征伐の理由 【陸・羽の強盛】 陸・羽の族豪藤原秀衡は、頼朝が次第に天下の政權を壟斷するを見て、常に心うちに面白からず、何時かは自家の禍根となるべきを察してゐたので、たまたま義經來り投するや、大に之を迎へて衣川館に優遇した。されば此の時已に奥州は、頼朝にとりては一大敵國の觀をなして表はれた。蓋し、精悍なる陸・羽二國の兵を率うるに、衆望ゆたけき秀衡あり、智略兼備の義經があるからである。

【秀衡・義經の死】 秀衡卒せんとするや、子泰衡に遺命するに、義經を奉じて大將軍となし、あくまでもその命に従ふべきことを以てした。されど泰衡は、才略智謀遙に父に及ばず、昇天の慨

ある鎌倉幕府の權勢をみては、到底之に抗するを得ず、前後の思慮もなく、遂に精兵數百騎を以て、義經を衣川館に襲ひ、その首級を得て之を鎌倉に送つた。

●奥州平定　されど頼朝窮極の志は、一小義經の誅伐よりも、寧ろ陸羽全部の完全な併呑であつたから、義經の首級を鎌倉に捧げた泰衡は、やがてをのが首級をも亦鎌倉に捧げねばならなかつた。即ち頼朝は、「義經を容隠し之を殺すことの遅かりし泰衡は、また義經と同罪なり。」との口實をかざして、自ら大軍を率ゐる、衰頹の奥羽を容赦もなく一蹴した。かくて頼朝は、やがて此の地に奥州總奉行を設け、家人を以て之に補したから、陸羽はここに完全に平定された。時に八十二代後鳥羽天皇の文治五年（一八四九年）である。

天下一統　奥州平定によりて、頼朝は天下一統の實を擧げた。然るに建久三年には、また征夷大將軍に拜せられたから、天下一統の名もまた、ここに相伴ふに至つたのである。蓋し、征夷大將軍に拜せられることは、畢竟するに、朝廷の御委任を體して天下に號令することに外ならぬからである。

〔征夷大將軍〕　征夷とは元來「蝦夷を征する」の義である。元正天皇の御代、多治比縣守が持節征夷將軍に拜

せられたのは、史上に表はれたこの職名の最初であるが、その時及びその後暫くは、明かに「東北の蝦夷征討」の義に用ゐられてゐた。然るに木曾義仲が征夷大將軍に拜せられた時から、全く意義は一變して、「土地兵馬の權を一手に收め、朝廷の御委任を體して天下に號令する」の謂となつた。而して後世に至りては、いつしか「征夷大將軍は必ず源氏より出づ可きもの」と定まり、かくて足利氏・徳川氏の累代何れも征夷大將軍に任ぜられたが、織田氏は平氏の故を以て、豊臣氏は卑賤の家の故を以て、共にこの地位を獲得することが出来なかつた。

【考察問題】　（一）鎌倉幕府の創立は、「王朝より武家政治へ」と云ふ意味に於て、日本史上の一大革命である。されどこの所謂革命も、いま試みに西洋史及び支那史上に於けるそれと比較すれば、著しい相違がある。問ふ、その相違を。（二）徳川家康は、その家系を捏造（？）するに當りて、源氏の裔とした。家康の野心の存する所を詳にせよ。

### 頼朝の政治及び人物

#### ●頼朝の善政

頼朝は、平氏が武門より起り乍ら、はやくも浮華文弱の京都の風に染み、ためにその滅亡を早めたのに鑑みて、幕府を鎌倉に開くや、質朴武強を以て下を率ゐ、卑怯未練を戒め、節義を勵まし、只管武士の美風を作ることにつとめた。（後章にも）。然のみならず、刑罰を省き、租税を減じ、政令簡にしてよく行き届いた。ここに於て、藤原氏の専

権以來棄てて顧みられなかつた地方の政治は、今や漸く恢復した。久しく疾苦に泣いてゐた萬民は、今やはじめて平和を齎したのである。

●皇室尊崇　さきに平氏は横暴を逞うし、朝廷に對しても屢々不謹慎の振舞をすることが少くなかつたが、之に反して頼朝は深く皇室を尊崇した。或意味に於て、朝權の横奪者であり乍ら、而もよく後白河法皇の歡感を忝うし、法皇より權大納言・右近衛大將を授けられ、やがてこの兩官を辭するや、直ちに征夷大將軍に任ぜられたこと。而もよく臣下及び天下の悅服を得て、幕府創立の大業を何の滞りもなく成し遂げたこと。また而もよく後世の人々より不忠の臣と稱ばれないこと。すべて之等は、彼が有する皇室尊崇の念を基礎として考ふるにあらざれば、到底解釋することの出来ない謎である。

【考察問題】(一)頼朝の皇室尊崇の實例を求めよ。(二)頼朝にも皇室尊崇の念慮がなかつたならば、「王朝より武家政治へ」のこの革命は、日本史上如何に表はれてゐただらうか。それを想像叙述せよ。

●猜忌の心　されど頼朝は、極めて疑深く、叔父行家・弟義經及び範頼等の骨肉の親、一條忠親・平廣常等の創業の臣にして、終を完うせざるものが少くなかつた。源氏が僅か三代廿八年にして

滅亡した一半の理由は、頼朝のこの缺點によると云はねばならぬ

【行家の末路】　さきに義經は、頼朝の怒に觸れて身の危きを知るや、叔父行家と語り、後白河法皇の院宣をうけて兵を起さうとした。けれども天下既に頼朝に靡くので、遂に如何ともする能はず、前述の如く奥州に逃れた。而してこの時行家は、西川に奔らうとしたが、遂に捕へられ、やがて殺された。

【範頼の末路】　後鳥羽天皇の建久四年、頼朝、富士の裾野に狩す。時に曾我祐成兄弟あり、父の仇敵工藤祐経を獵營に殺したが、この時鎌倉にては、將軍遺害の訛傳が傳はつた。よりにて範頼は、「範頼あり、假令大事ありとも、請ふ思を安んぜよ。」と、只管御台所政子を慰めた。然るに頼朝は之を聞いて大いに怒つた。即ち範頼を、異圖ありと疑ひ、遂に伊豆修善寺に幽閉し、やがて殺してしまつた。

【練習問題】(一)鎌倉幕府の職制(高校)。(二)守護地頭(高商)。(三)源頼朝の奥州征伐(高師)。(四)征夷大將軍(高校)。(五)源頼朝が政權を獲得するに至つた過程。

## 第二章 北條氏の政權横奪

### 源頼朝

●北條時政及び政子の輔導　頼朝薨じて長子頼家職を襲ぐ。時に年僅かに十八、加ふる

に性暗愚、到底よく父の大業を承くべきの資ではなかつたから、母政子政を簾中に聞き、北條時政(政子の父)・大江廣元・和田義盛・三善康信等十三人が之を補佐した。されど勿論、政治の實権は時政の手に在つた。されば北條氏は、この時既に政權横奪の最初の地歩を獲得したのである。

【尼將軍】 頼家を佐けて政を簾中に聞いた時、政子は薙髮して尼となつてゐた。故に世人政子を尼將軍と云ふ。

北條氏の實朝

頼家

- 北條時政及び政子の輔導(頼家・政子・實權は時政)
- 頼家・一幡・北條氏に殺さる(天下兩分の謀、頼家・一幡・比企能員の激怒と滅亡)
- 執權時政(政所別當をも兼ね)
- 執權義時(政所及び侍所兩つの別當をも兼ね)
- 實朝殺さる(官位翹望及)

【源氏と北條時政】 源氏敗滅のとき、年僅かに十三にして姪島に追はれた頼朝を、陰に陽に常に輔導すること廿星霜、遂に幕府創立の大業を成し遂げしめたのは、實に北條時政である。加ふるに時政の女政子は頼朝の妻、従つて時政は二代頼家の外祖父である。政治の實権が當時時政の掌中に壟斷されてゐたのも、蓋し不思議ではない。

●頼家及び一幡、北條氏のために殺さる。 頼家病に罹るや、政子は時政と謀り、天下を兩分し、頼家の弟

政權横奪

正統 断絶

攝家 將軍

●親王將軍迎立の企(政子・義時之を企つ、後鳥羽上皇之を許し給はざりし理由)

●攝家將軍迎立(九條賴經・幼少の攝家將軍迎立の理由)

をつまみ剪る北條氏の政策を、どうして憎まずに居れやう。

源實朝 ●北條時政の執權 頼家の弟千幡職を襲ぎ、名を實朝と改めた。時に年十二。されば尼將軍政子政を聴くこと舊の如く、時政の權勢亦依然として強く、大江廣元と並んで政所の別當となり、續いて執權の職に補せられた。されど時政は尙ほ飽くことを知らなかつた。即ち遂に、實朝を廢して、己が女婿平賀朝雅を立てんと企つるに至つた。尤も之だけは政子の激怒を買ふこと

となり、却つて自ら薙髪し退隱するの餘儀なきに至つたけれども。

●北條義時の執權 時政の子義時執權となる。義時はその權略隱忍なること父にもすぎ、和田義盛の權勢を忌んで之を滅し、己れやがて侍所の別當をも兼ねた。之より執權北條氏は、政治(政所別當を兼ねるが故)軍事(侍所別當を兼ねるが故)兩權を一身に集め、權勢愈々盛んとなつた。

●實朝殺さる 【實朝の官位翹室】 實朝は有爲の才を抱いてゐた。けれども時すでに、和田・畠山等の源氏の諸功臣は除かれ、加ふるに源氏の裔も殆んど残つてゐなかつた。されば實朝は、只管心を文筆に傾け、和歌・風流の遊びに悶を遣り、また頻りに官位を翹望し、遂に右大臣に昇進した。

【實朝殺さる】 承久元年(一八七九年)、實朝、右大臣拜賀の式を鶴ヶ岡八幡宮に擧ぐ。然るに、神拜を終りてまさに歸らんとする時、八幡宮の別當公曉(賴家の子)、突如躍り出でて、石の階で實朝を刺し殺した。

やがて公曉は義時の手に殺された。僅かに残つた源氏の二つの嫩葉が、かくて全く剪除され盡したのである。

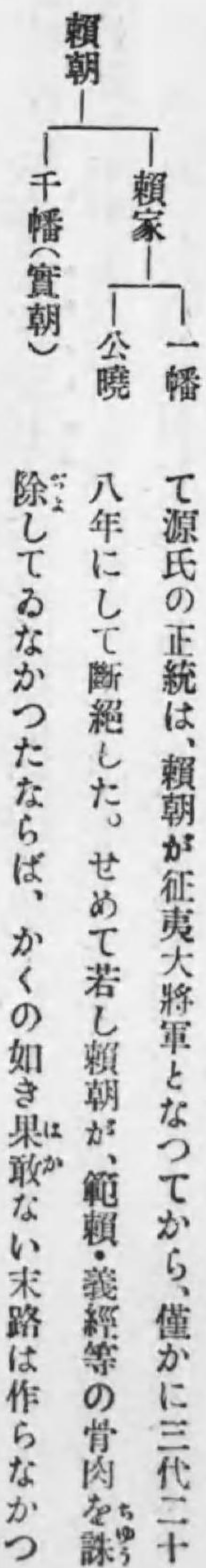
【實朝刺殺についての疑念】 「公曉が實朝を殺したのは、義時が人をして公曉を教唆せしめたからである。」と

論ずる歴史家が少くない。勿論實錄に明文がないから、かかる斷定を輕卒に肯定することは出来ないが、次の諸事情は、或はこの斷定が、真相を語るものではないかといふことを思はしめる。(一)北條氏はさきに賴家及び一幡を謀り殺した。こと。(二)拜賀の式をまさに擧げんとする時、忠臣大江廣元は、實朝にすすむるに、「この式は日中に擧げ、かつ式服の下には武器を召さるべし。」の言を以てした。こと。(三)實朝まさに式に赴かんとする時、庭の梅を願て「出でていなば主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ春を忘るな。」と詠んだ。かれての覺悟が、この歌で窺はれること。(四)拜賀式のその時、義時は、はじめ劔を持つて實朝に従つてゐたが、宮寺の樓門に至るや、俄かに急病と稱して、劔を他人に譲りて退去した。こと。

【考察問題】 (一)源氏柱石の臣比企氏滅ぼされ、和田氏滅ぼされ、畠山氏また滅ぼさる。之等の諸事實をも併せ考へて、源氏に對する北條氏の政策を略述せよ。(二)公曉が實朝を殺すに至つた二つの理由とは何か。

源氏の正統斷絶す

賴家・一幡は時政の時代に殺され、實朝・公曉は義時の時代に殺され、かく



ただらうに。政策を弄する人は反てその政策に禍されるものだ。

**攝家將軍** ●親王將軍迎立の企 源氏の正統ここに斷絶したから、尼將軍政子は執權義時と謀り、後鳥羽上皇の皇子雅成・頼仁兩親王の中何れか一人を撰び、親王將軍として關東に迎へんことを請ふた。されど後鳥羽上皇は、この好機を逸せず、政權を朝廷に復さんと御志にましましたから、鎌倉よりのこの請を御聽許にならなかつた。

●攝家將軍迎立 よりて鎌倉にては頼朝の遠縁に當れる右大臣九條道家の子頼經を迎へて將軍とした。之を攝家將軍といふ。されど將軍、この時年甫めて二歳、従つて政治の實權は北條氏に在りて、將軍は徒に虚位を擁するにすぎなかつた。



れば之を追ひ、廢立意のままに行つたから、後醍醐天皇の元弘三年、その滅亡に至る百十五年間、

源氏の後をついで完全に天下の政權を掌握したのである。

【攝家將軍】 攝家とは攝政關白となるべき家、即ち藤原氏一族なる近衛・九條・二條・一條・鷹司の五家をいふ。

頼經はこの五攝家の一なる九條家から出た將軍であるから、攝家將軍と稱せられる。

【練習問題】 (一)比企能員(高師)。(二)和田義盛(海兵)。(三)北條義時(海欄)。(四)尼將軍。(五)北條氏の政權傾奪の概況を述べよ。

### 第三章 承久の亂

**原因** ●後鳥羽上皇の朝權恢復の志 後鳥上皇は天資英明にまします。かねてより政權武門に歸したるをいたく嘆じ給ひしかば、源氏の正統斷絶すと聞き給ふや、御雄圖勃々として抑へ難く、

然るにやがて攝家將軍の迎立ありて、鎌倉の權勢依然たるを見給ふや、御憤り愈々その極に達し、遂に一舉北條氏を討滅せんものと、日夜武事を講じ、或は親しく刀劍を瘁きて謀與の臣に賜はる等、只管機會の到來するをお待ち遊ばした。

【一時に三上皇】 順德天皇は御父後鳥羽上皇と志を同うし給ひしが、承久三年俄に位を仲恭天皇にお譲り遊

ばした。ここに於て後鳥羽 本院・土御門(中院)・順徳(新院)の三上皇が一時にましますこととなつた。

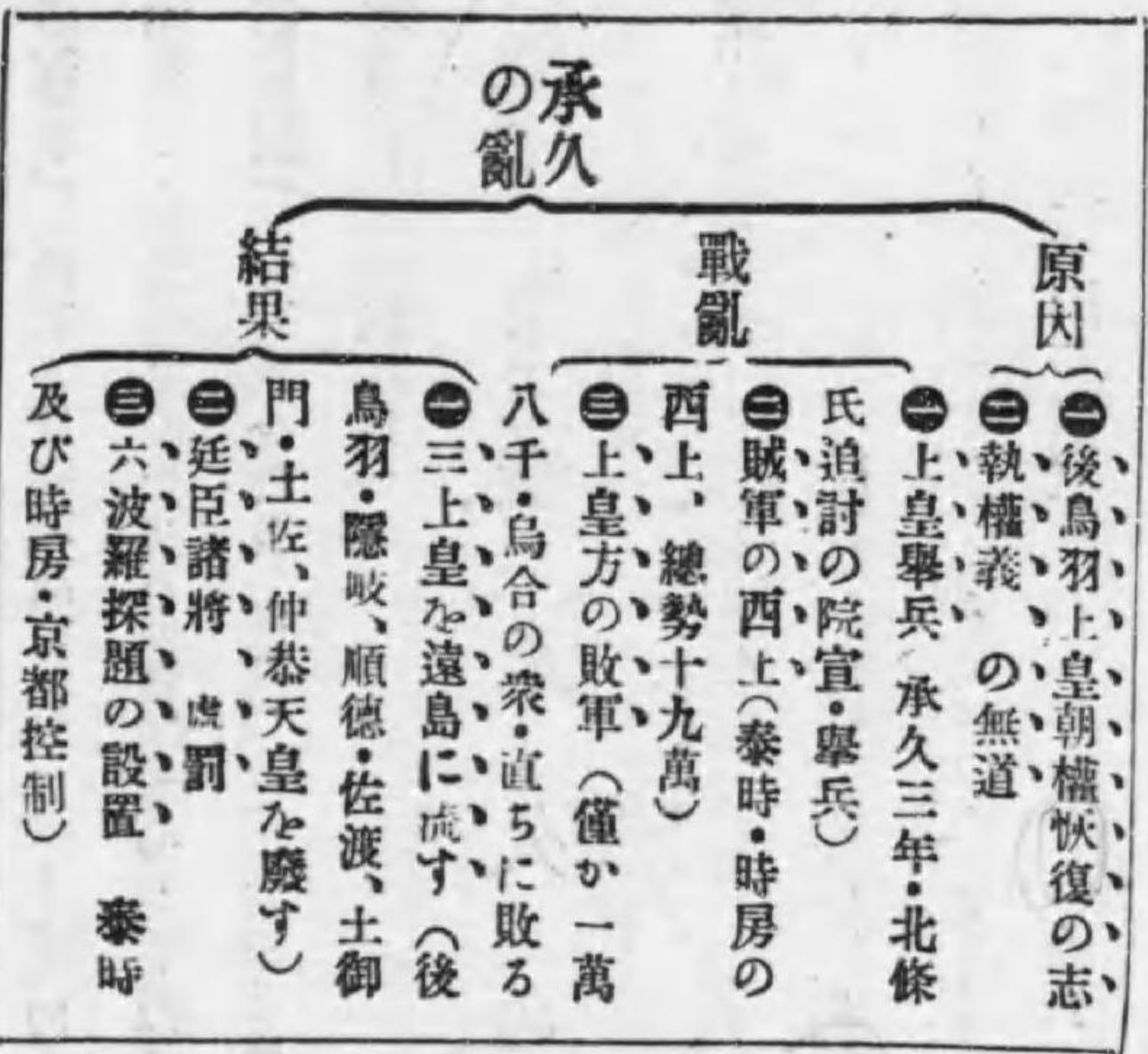
【考察問題】 (一) 順徳天皇が俄に御退位ありて、御白らは上皇となり給ひし理由如何。(二) 後鳥羽上皇は、

實朝が心を文筆に傾けることを御獎勵になり、また實朝が望むがままの官位をお與へになつたが、之は上皇の遠大なる御謀に出でたことである。詳にそれを考察せよ。

● 執權義時の無道 時に鎌倉の執權北條義時、上皇の御旨を奉ぜざる事再三に及んだから、上皇遂に義時追討の意を御決定遊ばした。

● 上皇の舉兵 承久三年(一八八一年)、後鳥羽上皇は順徳上皇と圖り、鳥羽城南寺の流鏑馬に託して近畿十四國の兵を集め、總勢一千九百を得給ひければ大に喜び、直ちに義時以下の官爵を削り、また追討の院宣を五畿七道に下して兵を募し給ふた。

この時土御門上皇時期尙早を唱へて頻に諫止すれど、後鳥羽上皇はお聴き入れにならなかつた。



● 賊軍の西上 鎌倉にては尼將軍政子、諸將を會して戰略を議し、大江廣元の議によりて、義時の子泰時、及び、弟時房等を西上せしめることとした。泰時即ち軍を分ちて三とし、東海・東山・北陸三道より京都に攻め上る。而して泰時は叔父時房と共に東海道の軍を率ゐた。三道の軍總勢凡そ十九萬。

「賢くも問へる男子かな」かくて打ち出でぬるまたの日、思ひかけぬ程に、泰時只一人鞭を上げて馳せ來り、「軍のあるべき様・大方の控等をば、仰せの如くその心を得侍りぬ。若し道の邊にも、計らざるに辱く風聲を先き立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なるにも参り逢へらば、その時の進退如何侍る可からん。この一言を尋ね申さんとて一人馳せ還り侍りき」と言ふ。義時とばかり案じて「賢くも問へる男子かな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を引くことは如何あらん。然ばかりの時は、兜を脱ぎ弓の弦を切りて、偏に畏まり申して身を委せ奉るべし。然はあらで、君は都におはしましたし乍ら軍兵を賜はせなば、命を棄てて千人が一人になるまでも戦ふべし。」と言ひも果てぬに急ぎたちにはけり。

【考察問題】 (一) 「賢くも問へる男子かな」は、増鏡に記載する所である。全文を熟讀して感想を述べよ。(二) 西上の軍に父加はらばその子を鎌倉に残し、子行けばその父を留めた。幕府の此政策の意義如何。

●上皇方の敗軍 官軍は僅かに一萬八千。而も之に將たる者には、公卿あり、武士あり、所謂烏合の衆であつた。されば、濃尾の野に賊軍を防いだが、衆寡敵せず、かつ進退の一致せざるを如何せん、宇治・勢多に退きて守りしも効なく、泰時等遂に京都に進入した。

結果 ●三上皇を遠島に遷す。後鳥羽上皇を隠岐に、雅成親王を但馬に、頼仁親王を備前に(兩羽上皇皇子)、順徳上皇を佐渡に遷し、仲恭天皇を廢して後堀河天皇を立て奉る。土御門上皇は直接謀に與り給はざりければ、北條氏も敢て之を咎めなかつたけれど、ただ御一人京都に留り給ふに忍びず、御自ら土佐(後阿波)に御遷幸遊ばした。

「御いたはしき三上皇」 人離れ里遠き島の中、松の柱・葦葦(あし)に十九年、御歳六十路の老の御身が、鹽風遠く隔てた都を思召し出て、「我こそは新島守上隠岐の海の荒き波風心して吹け」と詠み給ひし御心の程を忍びまつる時、「うき世にはかかれとてこそ生れけめ道理知らぬ我が涙かな」と御袖入しほり給ひし土御門上皇を忍びまつる時、はては荒海(あらい)の佐渡島に廿二年の憂き月日を遣り給ひし順徳上皇を忍びまつる時、誰か悪逆無道の北條氏をなじらざるものがあらう。

●廷臣諸將の處罰 前代未聞の下剋上を起した北條氏である。世界一の大不審を敢てし、日蓮上人をして「日蓮この不審を晴さんが爲に佛門に入る。」と叫ばしめた北條氏である。されば廷臣諸將の北條氏のために斬られ流され罰されたものは到底枚擧に遑がない。

●六波羅探題の設置 亂後泰時・時房の二人、南北兩六波羅において近畿・西國を治め、京都を警備し、また陰に朝廷に備へた。これ六波羅探題の始めにして、六波羅探題は執權につぐ重職である。されば承久の亂は、後鳥羽上皇の初志を空しく水泡に歸せしめ、反て幕府及び北條氏の勢を愈々盛んならしめたのである。

【考察・練習問題】 (一)承久の亂に於ける官軍の敗因を考察せよ。(二)六波羅探題(高商)。(三)承久の亂(高師)。

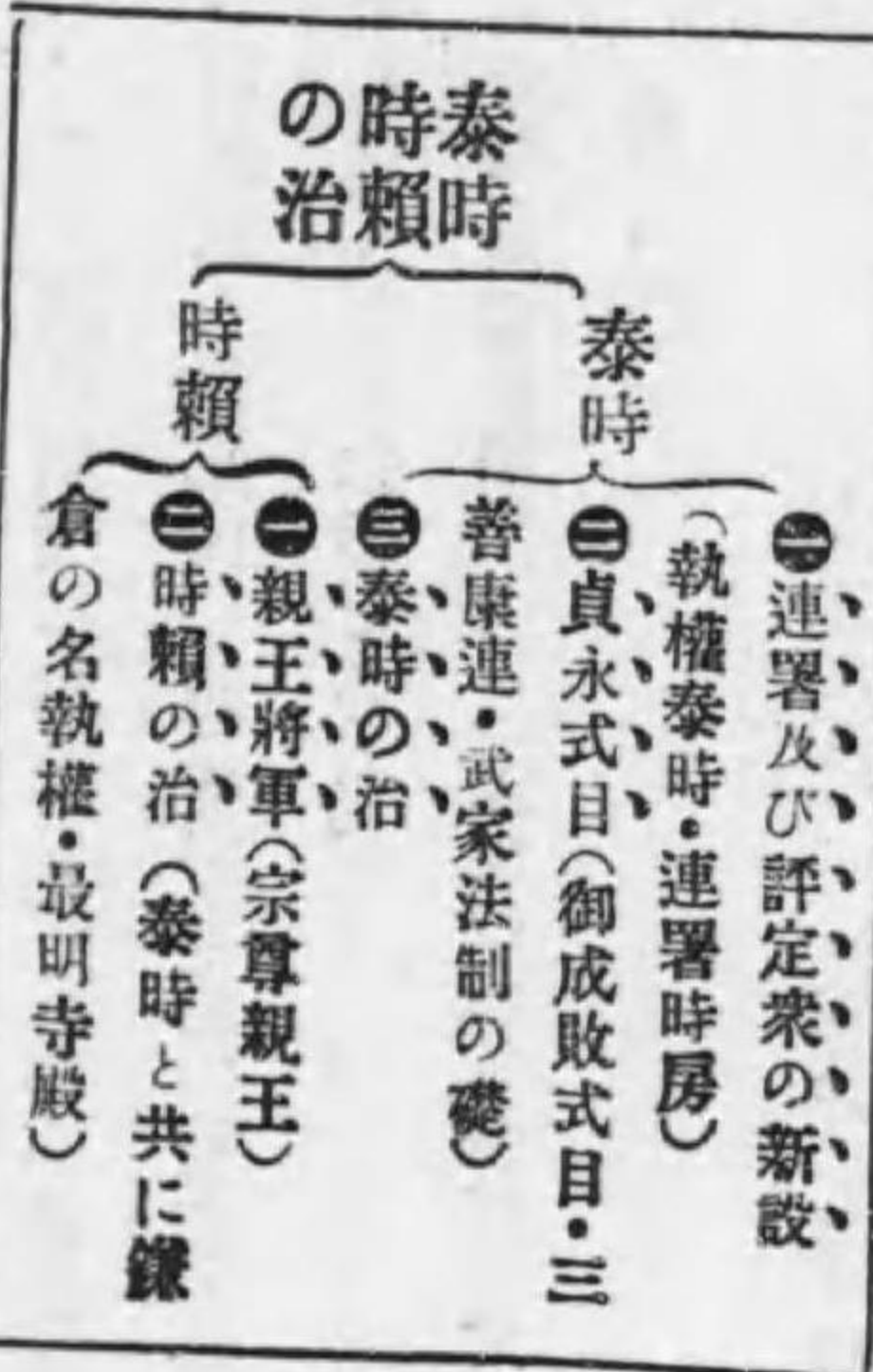
### 第四章 泰時・時頼の治

泰時の治 ●連署及評定衆の新設 承久の亂後三年、泰時・時房兩人京都六波羅より歸り、泰時は執權職を襲ぎ、時房は新設された連署に補せられ、執權を補けることとなつた。また泰時はこの時評定衆をも新設して、政治を參議せしめることとした。



【連署・評定衆】 連署 連署とは執權を補佐して政務を聽斷する重職である。従つて之に任ぜられるものは、常に北條氏にして、かつて他家より求められたことはない。蓋し、連署の義は「執權と共に公文に連署する」の謂。泰時が叔父時房に公文の連署を求めた時、はじめてこの職の設置を見たのである。

【評定衆】 政所に列して庶政に參與する要職である。常に北條氏一族・大江・中原・三好の諸氏中の文章に堪能なものをして之に補し、時には關東の名族からも之を採つた。人員は十五人乃至十六人。



【貞永式目】 泰時、幕府に未だ制定された一定の法制なきを慮り、貞永元年(一八九二年)、三善康連等と議し、貞永式目(御成敗式目)五十一條を作つた。よく時勢に適應して永く武家法制の基礎となつた。

【貞永式目】 朝廷の法制たる律・令と比較すれば、次の特異點を持つ。(一)律令が殆んど支那制度の模倣であるのに對して、之は當時の武家政治の要求に應じて生れたもの、従つて一として不實行の空文がない事。(二)律・令の如く天下公布のものでなく、裁斷の標準として只評定衆に備へ付けおくに限られる事。(三)適用の範圍は律令の如く天下全般でなく、幕府の家人及び幕府の勢力範圍内に限られる事。

● 泰時の治 かくの如く泰時はよく頼朝の遺法を守り、質素を旨とし仁政を施したから、天下大いに治まつた。されば嘗ては北條氏の横暴を憎みたりけん士民も、今や反つて北條氏の善政を謳歌するに至つた。

● 時頼の治 ● 親王將軍迎立 時頼、攝家將軍頼朝を廢し、後嵯峨上皇の皇子宗尊親王を、新に將軍として京都から迎立した。これ親王將軍の初めて、爾後北條氏は、幼き皇族を迎へて將軍に仰ぎ、長ぜらるるに及ぶや京都に送り還すを例とした。

● 時頼の治 時頼は泰時と共に鎌倉の名執權として謳はれる。また最明寺時頼としても慕はれるが、之は職を讓つた後、最明寺に閑居したからである。

【引付衆】 時頼の創置にかかるもの。評定衆の補助にして、訴訟を裁斷し、庶務を施行し、兼れて政所の簿書を註記すること加掌るのである。

【考察問題】 嘗て親王將軍を迎立せんとして失敗した北條氏は、今や漸く宿志を遂げた。然らば、北條氏は何故かくも親王將軍を熱望するか。(一)謡曲「鉢の木」は、時頼について如何なる點を謳歌しておるかを研

究せよ。(三)松下禪尼は時頼の母である。禪尼について知る所あらば述べよ。(四)北條氏が陪臣を以て而もよく天下の人心を収め得た理由を考察せよ。

### 第五章 鎌倉時代の文物

**鎌倉武士** ●鎌倉武士道 頼朝以下泰時・時頼等何れも、質朴武強を以て天下を率ゐる、卑怯未練を戒め、節義を勵ます等、只管武士の美風を作ること力めたから、當時の武士は恩義を思ひ、身命を輕んじ、名を尊び、恥を知るをその本分とした。かくて我が國固有の武士道は、この時代に於て赫々たる光輝を發揮するに至つたのである。

【考察問題】(一)東八ヶ國の勢を以て日本國全體の勢に對し、鎌倉の勢を以てよく東八ヶ國の勢に對する。と、當時は驅はれてゐた。之は何を意味するか。(二)關東武士が剛健勇武なるは何故か。次の要項にもとづいて考察せよ。1文弱の京都に遠い、2殺伐の蝦夷に近い、3質朴武強の幕府。

●武士の風俗 【武士の遊戯】 京都の公卿が詩歌・管絃の遊びに日を過るのに反して、鎌倉武士は、かりそめの日々の遊戯の間にも、射術・劍術・馬術・狩獵・放鷹・相撲の如き勇壯なるものに熱狂

し、専ら心身を鍛錬し武藝を純磨した。



【射術】 流鏑馬(ヤブ)、長さ二町の馬場の三ヶ所に、各一つ宛の的をおき、馳せつゝある馬の上より、この三個の的を順次に射るもの。笠懸(カサ)的の作り方・おき方によりて、笠を懸けた様であるから、笠懸の名がある、射法は流鏑馬と同じく、やはり馳せつゝある馬の上から射る。犬追物(イヌオ)、八十間四方の馬場の中に、三十六の騎士がは入る。騎士は分れて三組となり、各組競争して、馬場の中に放たれた百五十匹の犬の中から、五十匹宛の犬を早く

射止めやうとする遊戯である。

【服装及び家屋】 衣冠・束帶等と華美を競ふた平安朝のそれに反し、服装は一般に質朴簡素、直垂・水干を以て常服とした。また頭を露はすことを耻ぢ、男子は家居平生にも烏帽子を戴き、女子は外出に被衣・笠をつけて面を掩ふたこともこの時代の特色である。而して家屋は概ね板葺又は茅葺にして、ここにも亦平安時代の如き寢殿造等は見られなかつたのである。

學問 概観 世一般に武を偏重したから、學問は廢れて、大寶令に定まれる學問も行はれず、殊に武人にて學に志すものは、曉天の星の如く疎に、只々北條實時(義時の孫・金澤文庫の設立者)及びその子顯時等があつたのみである。されど僧侶及び京都の公卿は、この間に在りて尙ほ文筆を好んだから、鎌倉時代の文學も、依然として京都の文學であつたと云はねばならぬ。

漢學 已に平安中葉以來、衰運に向つてゐたこととて、鎌倉時代に於ては、正格の漢文を作り得るものは殆んどなく、終に和漢混合の變體を作り出すに至つた。吾妻鏡(鎌倉幕府の記録)・貞永式目等は何れも皆この文體で書かれた。

國文 その盛んなることは平安時代と同じいけれど、その文體はそれと全く趣を異にしてゐる。

即ち、尙武の氣象は雄渾なる文勢として表はれ、宗教思想の普及は儒教・佛教思想を如味したる文體として表はれた。當時の著作の主なるものは、隨筆に鴨長明の方丈記・僧兼好の徒然草、歴史物語に水鏡・保元物語・平治物語・源平盛衰記・平家物語・古今著聞集、日記・記行文に阿佛尼の十六夜日記・源親行の東關紀行・源光行の海道記等があり、何れも古今に名高い。

和歌 和歌はこの頃最も隆盛を極めた。されば後鳥羽上皇・順徳上皇以下、藤原俊成・子定家・藤原家隆・僧西行・鴨長明等、その名を古今に謳はれる者が少くなかつた。

【新古今集】 後鳥羽上皇の院宣により、定家・家隆等五人の撰定したものである。此の集の和歌は、古今集以後別に一體軸を出したもので、歌調流麗にして雅致に富み、言詞を弄するの巧妙は廿一代集中第一と稱せられる。されど氣力を失ひ、纖巧に陥り、浮華に流れたとの評もまた死ねない。

美術工藝 建築 佛教の興隆に伴ふて堂塔佛寺の建築起り、就中壯大な禪刹が多く建立された。(後述佛教の項参照)。今尙ほ建長寺や圓覺寺等で見る様に、當時の建築は、質素實用を旨として又支那風であつたが、之れ畢竟するに、當時の時代的反映に外ならないのである。

彫刻 佛像彫刻最も盛んにして、鋭くして深い刀法、逞しい容貌、華麗濃厚な色彩の佛像は、

此の時代の特色である。定朝以来の名手運慶・湛慶(運慶の子)・快慶等が、雄健豪放の靈刀を揮つて、かの二王・四天王・五大明王等の動的佛像を刻んだのは實にこの時代である。

③繪畫 繪畫も彫刻と同じく、前代の纖巧情弱な風を捨てて、活氣權溢・筆力雄渾の作を出すに至つた。而して諸々の作品の中で、佛畫と繪卷物とは最も勝れ、殊に繪卷物に於ては、土佐光長(賴朝の)・藤原信實(泰時・時頼の)以下多くの名手を出し本邦美術史上獨特の光彩を放つて居るのである。

【繪卷物】 繪卷物はその畫題を、多くは歴史物語・小説・社寺の緣起・神佛の靈驗記・名僧の傳記等に選んだ。④武器具 武器具の製作は、尙武の時勢に適應して著しい進歩を示した。粟田口吉光(伏見天皇の御代の人)・岡崎正宗(後醍醐天皇)等は、この時代の名工で、日本刀の鍛鍊實に精妙を極めた。

⑤陶器 陶器の製作は久しく遅々として振はなかつたが、尾張の人加藤景正、僧道元に隨ひて宋に赴き、歸朝してその陶法を傳へてから、俄然としてその進境を示すに至つた。かの瀬戸燒は實にこの時に起因するのである。

【考察問題】 (一)鎌倉時代が、靜止的の佛菩薩の像(阿彌陀・觀音等)を作り出すに乏しかつたのは、如何なる原因によるか。(二)鎌倉時代の美術工藝は如何なる點に特長を有するか。

佛教 ①新宗派 【新宗派勃興の理由】 (一)從來の天台・眞言兩宗派は、その所説頗る高尚深遠、

従つて世俗の耳に中々は入り難い。殊に學問及教育標準の一般に低下してゐた當時の人々の耳に對して然うであつた。(二)加ふるに兩宗派は、世を降るにつれて次第に内部の腐敗を醸した。即ち教祖の教理の一部なる實際方面にのみ發展し、その所謂高僧なるものは、加持祈禱を以て専ら己が職を心得た。或は南都北嶺の僧兵・僧侶をはじめ、諸國の僧兵・僧侶は何れも公々然良民を苦めて横暴の限を盡した。(三)從來存する佛教の狀況此の如き時にあたりて、その基礎磐石にも譬へられた藤原氏の勢力が見事顛覆し、やがて平家は權花一朝の夢そのままの運命を辿つた。さなきだに人生の無常に惱んだ當時の人心、かかる事實を目撃しては、さうして飄然解脱の道を求めて進まずして居れやう。(四)この時にあたり、源空・範宴・日蓮・智眞以下の諸英俊は、相踵いで出て、淨土宗・眞宗・日蓮宗・時宗等の諸新宗派を開くに至つた。云ふまでもなく、之等諸新宗派は、從來の天台・眞言等の諸宗派に比すれば、1所説甚だ卑近にして俗耳に入り易い。即ち何れも所謂他力宗にして、只管御佛の力に依り頼り、南無阿彌陀佛或は南無妙法蓮華經等と唱ふれば、ただそれだけで、涅槃の妙境に達し得るとするのである。2末輩の僧侶・一介の信徒に至るまで、何れも

潑刺たる新興の意氣に燃えておる。念佛無間・禪天魔・眞言亡國・律國賊と叫んだ日蓮上人の意氣は、まさにその代表的事例だ。従來の諸宗派と異り、新宗派は何れもわが日本人によりて作られたものである。されば日本人の信仰にびつたりと合致し易い。

以上を要するに、翻然として解脱の道を求めてやまぬ當時の人心と、當時の人心に遺憾なき法悦を與へ得る新諸宗派。それはまさに二つの力の協働だ。相殺でなく相乗だ。相乗の結果はおそろしく大きい。當時が、わが佛教史上燦然たる光輝を放つておるのも、全く之がために外ならないのである。

【新宗派】 淨土宗 僧源空（法然上人）・高倉天皇の御代。淨土眞宗 僧範宴（親鸞上人）・後堀河天皇。法華宗 僧日蓮（日蓮上人）・後深草天皇。時宗 僧智眞（一遍上人）・龜山・宇多兩天皇。

【僧源空】 年十五の少年時代より難髪受戒し、爾來修行研鑽數十年、あらゆる宗教の奥義を極むるに至つたが、晩年僧源信の往生要集を讀んで大に悟る所あり、遂に多年の所習を弊履の如く棄て、ここに未開の新宗派を開いた。即ち専心念佛を唱ふれば、阿彌陀佛の慈悲により、吾等衆生は濟度され、淨土の來世に導かれると説くものである。要するに彼は、宗教改革の初に立つ偉人である。

【僧範宴】 源空の弟子である。師の遺法を更に進め、自ら範を示して肉食妻帯を僧侶に許した。禁慾を以て僧侶の第一信條とした多年の傳統に對して、確に師源空以上の大改革ではないか。淨土眞宗はまた一向宗とも云ふ。一向に阿彌陀佛に歸依して往生を希ふを以て、この名が與へられたのである。

【僧日蓮】 彼の叫んだ「念佛無間・禪天魔・眞言亡國・律國賊」の句が、はたして正鵠を得たものか否かは暫く此處に問はない。只彼の信徒は、壯大なる宗教的意氣と、熱烈なる國體尊重の觀念とに於て、明かに他の諸宗派から獨特の色彩を以て區別されるのである。

【僧智眞】 衆生濟度に力を捧げて、全國を遊行する所に、彼の宗教の特異點がある。即ち、彼も熊野權現に百日の懇念を凝して一頌を神から授かつたのをはじめとして、或は諸國の社寺に參籠し、或は直接衆生に法を説く等、勸進帳と念佛札とを携へて、普く五畿七道に足跡を印した。

● 禪宗 【禪宗興隆の理由】 (一) 禪宗はもと印度に於て、釋迦第廿八世の法弟達磨によりて大成されたものである。而してその修行法は、自力なれども、而も尙ほ天台・眞言兩宗の如く大部の書籍を讀破するを要せず、かの達磨が範を示すが如く、沈思靜座すれば足るもの。即ち、所謂「不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛」である。されば教育程度の一般に低い當時の人心によく適

合した。(二)特に武士の心によく適合した。されば前述諸新宗派が、多く平民階級に喜ばれたのに、對して、この禪宗は多く武士階級に喜ばれた。詳しく述べれば次の通りだ。1よし文學に親しまないものは云へ、爲政者たる武士はやはり知識階級である。従つて彼等は、無智なる平民階級が歸依する他力宗に就くを潔しとせず、自力の禪に歸依した。2禪宗の修行者は、寒暑に抗ひ飢餓に堪ふる等、強固不拔の意志の力で、心身の鍛錬に不斷の精進を捧げねばならぬ。けれども之が武士には氣に入る所だ。己を空うして只管佛の力に依り縋る他力宗は、武士から見れば確にあきたらなかつたに相違ない。

【當時の禪宗諸派】 臨濟派(リンゼ) 榮西(後鳥羽天皇の御代)。曹洞派(ソウトウ) 道元(後堀河天皇の御代)

【榮西】 榮西は禪宗を我國に傳へた最初の人である。即ち宋に入ること二回、彼の地に臨濟派の禪宗を學び、歸朝後將軍頼家及び實朝の尊信を受け、京都に建仁寺を建て、鎌倉に壽福寺を建てた。前者は京都五山の

一、後者は鎌倉五山の一である。

【道元】 榮西の高弟である。入宗して曹洞派の禪宗を得て歸り、越前に永平寺を建てて本山とした。

尙ほ當時は、道隆・祖元等の如き禪宗の高僧が、陸續支那より我に來つて布教に従事したから愈々この興隆に力をそえた。

【考察問題】 (一)洩まじと言ふは桶屋と彌陀如來。一向佛は平壺所に骨を捨て。石塔がしめしをかぶる門徒寺。以上の三は何れも、當時の眞宗を諷刺諧謔化した狂句である。句の意味如何。(二)淨土宗・眞宗・時宗は純然たる他力宗であり、禪宗は同じく自力宗であるのに對して、日蓮宗は「來世の成佛を得るためには法華經の研鑽修行を積まねばならぬ。尤も無智者は氣聲高らかに、専然ただ南無妙法蓮華經を唱ふるだけで、立派に成佛を遂げ得る。」と説く。然らばこの宗派は自力か他力か。(三)當時の宗教が、當時の美術工藝及び學問の上に及ぼした影響如何。

【練習問題】 (一)鎌倉時代の學問(外語)。(二)同、佛教(高師)。(三)同、わが國に起つた新宗派(外語)。(四)僧源空(高師)。(五)親鸞上人(高師)。(六)僧日蓮(海兵)。(七)一蓮上人(高校)。(八)榮西(美術)。(九)粟田口吉光。(十)運慶。

## 第六章 文永・弘安の役

### 元の東漸

●元の強大 土御門天皇の御代、支那北方の蒙古に鐵木眞(成吉思汗)と號す、元の太

祖)といふ大英傑現はれ、頻に四近を侵略してまづ支那中原の地を併呑し、やがて遠く西の方中  
央アジア・歐羅バロシアまでも版圖を擴けた。

●忽必烈の東漸 鐵木眞の孫に忽必烈あり、用兵自在、父祖の業蹟を辱しめない英傑であつたが、

彼は矛先を東へ轉じて直ちに高麗を征略した。

即ち朝鮮全半島を併呑したのだ、危い哉わが國。

火焰を吐き爪牙を磨きたてた猛獸の大群が、美

しわが國を一呑みにせんものご、僅か一衣帶水

の彼方に、今やたけりにたけり狂ふておるので

ある。

【考察問題】(一)當時僧日蓮は立正安國論を著はし

て蒙古の襲來を豫言し、かつ國難を憂へた。これ彼

が世界の大勢に通じた大聖であり、又彼の教義が報

國盡忠の赤誠に燃ゆるものであつたからであ。然

文永弘安

元の東漸 ●元の強大(鐵木眞) ●忽必烈の東漸(朝鮮を併せて我に迫らんとす) ●初度の元使(龜山天皇の文明五年・潘阜・空しく歸る) ●其の後の元使(翌年・黒的・金有成・趙良弼・放逐さる) ●出陣(御宇多天皇・文永十一年・四萬人九百餘艘) ●對馬壹岐を侵す(守護代宗助國・同平景隆等戦死) ●博多附近の激戦(少貳・大友・菊池等奮戦) ●元軍大敗(暴風)	我を招致せんとす ●其の後の元使(翌年・黒的・金有成・趙良弼・放逐さる)	文永の役 ●對馬壹岐を侵す(守護代宗助國・同平景隆等戦死) ●博多附近の激戦(少貳・大友・菊池等奮戦) ●元軍大敗(暴風)
---	---	--

の役

弘安の役 ●使誅戮と沿岸防備(文永十二年杜世忠を龍の口・沿岸防備・弘安二年周福を博多) ●東路軍來襲(弘安四年、四萬・洪茶丘・河野通有等の奮戦、龜山上皇御祈願) ●江南軍來襲(同年・十萬・范文虎・東路軍と相合して迫る) ●元軍大敗(閏七月一日暴風) ●戦勝の原因(國體の卓越・武士道・北條氏の善政)	勝因と影響 ●戦役の影響(國威の發揚・北條氏の衰運を招く)
--	----------------------------------

らば問ふ、1當時のわが國民は武士も公卿も平民も殆んど悉く、そのはじめ彼の豫言を一笑に附してゐた理由。2日蓮及び彼の教徒以外の高僧は、よし世界の大勢に通じてゐたとしても、而も憂國の赤誠を披歴しなかつた理由。(二)近年日蓮は長くも陛下より立正大師の號を賜はつた。その理由如何。

我國を招致せんとす ●初度の元使 龜山

天皇の文明五年(一九二八年)、元主忽必烈は高麗王を介して、國書を以て、我を招致せんとし

た。されどその書辭如何にも無禮を極めてゐたから、朝議執權時宗の言を納れて、之に答へざるに

決し給ふた。されば元使潘阜は返書を待ちて太宰府に留まること五ヶ月、而もそれを待せずして空しく國に歸つて行つた。元來挺でも動かぬ我國だ。兵艦を連れて攻め立てられても動せぬわが國だ。

第三編 近古 第六章 文永・弘安の役

それを僅か一通の國書で降服せしめやうと考ふる忽必烈は、傲慢と云はうより寧ろ淺薄ではないか。

蒙古驛狀

上天眷命

大蒙古國皇帝。奉書

日本國王。朕惟自古小國之君。境土相接。尙務講信修睦。況我

祖宗。受天明命。奄有區夏。遐方異域。長威懷德者。不可悉數。朕即位之初。以高麗

無辜之民。久瘁鋒鏑。即令罷兵。還其疆域。反其旄倪。高麗君臣。感戴來朝。義雖君臣。而歡若父子。計

王之君臣。亦已知之。高麗朕之東藩也。日本密邇高麗。開國以來。亦時通中國。至於朕躬。而無一乘之

使。以通和好。尙恐

王國知之未審。故特遣使。持書布告朕志。冀自今以往。通問結好。以相親睦。且聖人以四海爲

家。不相通好。豈一家之理哉。以至用兵。夫孰所好。

王其圖之。不宣。

至元三年八月

蒙古來

額山陽

筑海颶氣連天黑、蔽海而來者何賊、蒙古來、來自北、東西次第期吞食、

嚇得趙家老寡婦、持此來擬男兒國、相模太郎膽如、防海將士人各力、

蒙古來、吾不怖、吾怖關東令如山、直前斫賊不許、願、倒吾橋、登、

檣、虜將、吾軍賊、可恨東風一颶附、大濟、不使、殫血盡膏、日本刀。

●其の後の元使 文永六年三月、第二回の元使黑的等對馬に來つて前年の返答を求めた。されどこの頃我國にては、國論已に斷固と決する所あり。即ち、朝廷にては長くも宸筆の宣命を大神宮に奉り、或は勅使を諸陵・諸社寺に遣はして奉幣祈禱を捧げ給ひ、また一方幕府にては、時宗凛々しくも濱海諸地方に戒嚴の令を發して不虜に備へてゐた程であるから、對馬の島司は何等の逡巡もなく、言下に黑的等を追ひ還した。

同年八月、更に使者金有成一行は太宰府に入り、その後忽必烈の祕書監趙良弼等再三來つたけれど、我外交政策に一歩たりとも交讓妥協軟化退嬰の色がなかつたから、何れも悉く空しく歸國し





みて石壘を築造する等、天下は擧げて今や緊張の極に達した。嗚呼何ぞ剛膽なる。加之、剛膽の時宗及び諸將卒は、單なる防禦戦を潔しとせず、進みて海を渡り、大蒙古の併呑をすら計畫した程であつた。

【周福等を斬る】 杜世忠一行の誅戮を聞いて、忽必烈はその怒髪まさしく天を衝いた。されば弘安二年の元使周福等一行の渡來は、彼としては實に我に對する最後の通牒であつた。然るを時宗はまた之等を筑前博多に斬り捨てたからたまらない。戦宣はかくして互に布告された譯だ。

●東路軍來襲 弘安四年（一九四一年）六月、朝鮮合浦を發した東路軍約四萬人（約三萬の蒙古兵と、九百餘艘の戰艦は、大將洪茶丘・忻都等に率ゐられ、まづ對馬・壹岐を掠め、進んで博多に迫つた。されど大蒙古の併呑をさへ企てる忠勇無双のわが將卒だ。夜に乗じて敵船を焼くもの、敵船に躍り入りて一擧數人又は十數人を屠るもの等ありて、其機敏その勇武全く神業ごしか思へない程であつた。河野通有・竹崎季長・菊池武房等、吾等は幾人か之等の勇者を數ふることが出来る。【河野通有】 通有は伊豫の人。選ばれて防備兵として博多に赴かんとするや、三島祠に祈りて曰く「われ賊を待つこと十年にして賊もし來らずんば、則ち海を渡りて進まん」と。されば元軍來襲と聞くと大いに喜

び、直ちに子八郎通忠・伯父伯耆守通時等と輕舟に駕して進んだ。されど賊船高大、味方の不利甚だしかつたから、猛然彼は帆柱を仆して梯子と爲し、賊船に躍り入り、以て賊船長の首級をはじめ手向ふ奴等九片なぐりに薙ぎたはして凱旋した。

【龜山上皇】 元軍再び來襲したとの報全國に傳はるや、人心恟々として流言して曰く「賊、長門を指し、直ちに京師を侵し、又轉じて東海・北海を衝かんとす」と。よりに廷議或は曰く「宜しく兵を關東より召して京師を護衛し、後深草・龜山二上皇をして賊を關東に避けしめん」と。されど龜山上皇は斷然かかる議を斥け給ひ、親しく石清水八幡に詣で、また宸筆の宣命を伊勢大神宮に上り、畏くも身を以て國難に代らんとお祈り遊ばした。英邁の上皇いまし、また剛膽の時宗在り。どうして舉國一致をせずしておれやうか。

●江南軍來襲 同年七月、江南軍約十萬人三千五百餘艘の戰艦 大將范文虎に率ゐられて、勢威堂々博多に迫る。但し東路・江南兩軍對馬にて落ち會ひ、以て十數萬相携へて、一擧我國を屠らんとの策戦計畫は齟齬したけれど、而も博多附近の海上は殺氣充ち溢れるものがあつた。

●元軍大敗 加之、之に對するに、敵手の優勢を見て意氣愈々昂然たるわが軍がある。曠古未曾有の大決戦はここに開かれ、玄海の怒濤ために血腥からんとしたが、時恰も閏七月一日、颯風

大いに起り海水簸蕩、賊船の破壊覆没算なく、死傷また到底その数を知らなかつた。醜いことよ。戦はずしてはや怖氣をなし、残兵われ先にと逃げて行く。戦友悉く瘡れて只一人になるまでも、敵に背を見せないのが兵たるの本領ではないか。

【異國征伐の壯圖】 北條實政が鎮西に下つたのは、鎮西防禦の總指揮官に補せられたためばかりでなく、やがて異國征伐軍の總指揮官に補せられんがためだらうといふことは、當時の人々も之を察してゐたが、果せるかな、彼の下向と相前後して、異國征伐の大命は降された。それによれば戦艦は明年三月頃出帆すべく、船員は鎮西より採用するも、もし不足ならば山陰・山陽・南海諸道より補充することとなつてゐた。この壯圖がもしも果されたとしたら、歴史は更に壯絶快絶な跡を残したに違ひない。

【考察問題】 (一)使節を斬れば、何故天下の人心が緊張するか。(二)東路軍が博多に攻め寄せた時、彼等は什器・農具等をも携帶してゐた。之は何を意味するか。

戦捷の原因・戦役の影響 原因 (1)わが國體の世界無比であること(上は龜山上皇及び北條時宗より下は諸將卒及び一般國民に至るまでの舉國一致)。(2)頼朝以來武士道を奨勵したこと。(3)泰時・時頼以來北條氏の民政よく行き届いてゐたこと。

影響 (1)國威の發揚。(2)北條氏の衰微(軍費及び祈禱料が莫大であつたため、國家の財政が困難に陥り、ために人心漸く北條氏を離れた)。

【練習問題】 (一)元寇(美術)。(二)弘安の役(海兵)。(三)杜世忠。(四)河野通有。(五)合浦。

### 第七章 兩統の交立、五攝家

兩統交立 後嵯峨上皇の遺詔 第八十代後嵯峨天皇、在位僅かに五年にして、位を皇子久仁親王に譲り給ふ。之を後深草天皇と申す。然るに後嵯峨上皇は、その後恒仁親王を挙げ給ふに及び、いたくその御英明を愛でさせ、立てて皇太子とし、やがて位に即け給ふ。之を龜山天皇と申し奉り、御年僅か十一歳におはした。

上皇崩じ給ふに臨み、遺詔して、御長子後深草上皇の御子孫には、長講堂百八十ヶ所及び播磨・尾張等に宏大な莊園を與へて、即位を斷念せしめ給ひ、御次子龜山天皇の御子孫には、永く皇統を相繼ぐこと定め給ふた。之より後深草上皇の御後を持明院統(上皇の仙洞御所)と申し、龜山天皇の後を大覺寺統(天皇は退位後大覺寺を仙洞御所とされた)と申し、兩統間に屢々皇位繼承の争が起ることとなつた。

●後宇多天皇即位(大覺寺統) 龜山天皇は、やがて御遺詔のままに、御子後宇多天皇に位を譲り、御自らは院中に在りて政を聽き給ふた。



のばかりとも解釋せられない。

●伏見天皇即位(持明) 後深草上皇も龜山上皇と共に大宮院の生みまつる所、即ち御母を同じくし給ふ。加之、後深草上皇は皇長子にまします。されば如何に御父君の御遺詔とはいへ、その御遺詔はあまりに酷に思はれた。北條時宗が決然起つて「後嵯峨上皇の御遺詔なりと雖も、後深草上皇は嫡長に生れ、而も何事の誤もあらせられずしてここに至り給ふは、まことに傷ましき事なり。」と、龜山上皇に奏請して、以て後嵯峨上皇の御子伏見天皇を立て奉つた。こゝは、強ち北條氏の專權を語るも

●後伏見天皇即位(院統) 伏見天皇は、執權貞時に諭し、その援をかりて皇子後伏見天皇を立て給ふた。

●兩統交立 ここに於て、大覺寺統は、御嵯峨上皇の御遺詔の全然行はれざるの不都合を唱へ、持明院統は、かかる御遺詔の全然非理なることを唱へ、交る交る使を鎌倉に遣はして貞時を責め給ふた。されば貞時も進退窮まり、遂に「以後兩統替る替る皇位を嗣ぎ給ふの議」を上り、その聽許を得た。之より兩統の交立は、第九十六代後醍醐天皇にまで及び、その後この交立の争は所謂南北朝問題にまでもその姿を表はした。

【考察問題】 (一) 伏見天皇が、位を御子後伏見天皇に傳へて、大覺寺統の皇子に傳へ給はなかつた事實を見て、吾等は直ちに、「伏見天皇は御遺詔を無視して、その御子孫にのみ永久に皇位を傳へ給はん御心でおはした。」と結論するは、聊か早計たるをまねかれぬ。伏見天皇の御憤り、換言すれば兩皇統の争は、當時さほど大袈裟なものではなかつた。この争を擴大して遂に所謂南北朝對立の争にまでも導いた最初最大の責任者は、執權貞時であらねばならぬ。よりてその理由を考察せよ。(二) 後嵯峨上皇がかかる御遺詔をなし給ふたのは、皇位繼承についての争を、以後全く根絶せんとの深い御意によるものであつた。わが皇室典

範が、その第一章に於て、皇位繼承規定を定められた精神と、全く同一精神に基くものである。然らば御遺詔は、一概に之を非理として斥けてはならぬ。その間の事情を充分考察せよ。

五攝家

●近衛・九條兩家

藤原氏はその權勢の大部を失墜したとはいへ、鎌倉幕府にとつては、

それは尙ほ恐ろしいものの第一であつた。されば頼朝は、時の攝政藤原基通の弟右大臣兼實が、義經の擧兵(當時義經は兄頼朝討討の院宣を得た)を難じたのを見て、うはべに之を徳とし、兼實に多くの所領を與へ、

以て基通より別れて新に一つの攝政關白の家を興さしめた。之より基通の後を近衛家と稱し、兼實の後を九條家と稱した。

●鷹司家 更に執權時頼は、時の攝政近衛兼經の職をやめ、己が推舉にかかる兼平(兼實の弟)を立てて攝政とした。かくて近衛家より新に鷹司家が分立した譯である。

●二條・一條兩家 執權北條貞時の頃、九條道家あり、長子教實をして九條家をつがしむるの外、第三子實經を愛し、之をして新に一條家を起さしめた。然るに次子良實は北條氏と相好かつたから、貞時の計らひによりて彼は一條家を新に起した。

【考察問題】 かくの如く鎌倉幕府は、藤原氏の權勢を殺がむがために、近衛・九條・二條・一條・鷹司の五攝家を分立せしめ、かつ攝政關白任職の問題に常に容喙した。然らば鎌倉幕府は朝廷に對し奉りては如何なる政策をとつたらうか。成る可く多くの例を擧げて説明せよ。

【練習問題】 (一)鎌倉幕府と朝廷及藤原氏との關係(海兵)。(二)五攝家(高工)。(三)兩皇統の交立(高橋)。

第八章 北條氏の專權と其の滅亡

北條氏の衰運 北條氏は(1)朝廷に對し率りて不敬大逆の振舞多く、(2)文永・弘安の役後財政の窮乏に陥り、(3)あまつさへ當時の執權高時は、性昏愚にして日夜遊宴を事とし、従つて權臣の横暴比なく、賂を以て政を決した。されば天下の人心遂に之を離れるに至つた。

【高時の昏愚】 高時の最も愛好したのは田樂と闘犬とであつた。【田樂】 各大名遂に田樂法師一人づつを預けて裝束を競はしめた。金銀珠玉をちりばめ綾羅錦繡を纏ふた田樂師と、きらびやかな舞ひ姿の大名達とが、日夜醉に心を奪はれて戯れ狂ふ有様。ああ鎌倉武士の面影はいま何處

【闘犬】 犬を愛好すること狂人の沙汰にして、諸國に觸れて之を募り、飼ふに魚肉を以てし、飾るに金銀を以てした。奥に乗せて路次を過ぐるの日は、道急ぐ人も馬より下りて、跪き、野に耕す里人も夫役に採ら

れて恭しくかつぎ奉るといふ仕末。毎日十二度の大合いぬあはせに、三四百匹が分れて兩陣となり、互に入り亂れて咬かみ合ふ聲は天地を轟かし、心ある人々は皆眉まゆを擧あげたといふのである。

【考察問題】 既往における北條氏の不敬大逆の振舞を述べよ。

正中の變

此の時にあたり後醍醐天皇即位し給ふ。天皇は、さきに承久の壯圖を擧げ給ふた

北條氏の衰退	(1) 不敬大逆の振舞、(2) 元寇後の財制困難、(3) 高時の昏愚
正中の變	後醍醐天皇討幕を企て給ふ、企劃洩れて資朝・俊基等流さる、後醍醐天皇再び討幕を企て給ふ(立太子問題に逆鱗)
北條氏	笠置遷幸(大塔宮の建言・藤房具行等供奉)
北條氏	高時光嚴院を擁立
北條氏	隱岐遷幸(高時、天皇を隱岐に遷す。諸親王・公卿・僧侶をも罰す)

後鳥羽天皇、及び、元寇を撃退し給ふた龜山天皇と共に、資性最も御英邁にましましたから、今や此の時を以て朝權恢復の好機とみそなはし、密に討幕の策を廻らし給ふた。即ち文章博士日野資朝を擧げて參議とし、大内記日野俊基を藏人とし、更に萬里小路藤房・北畠親房等の有用の材を重要し給ひ、或は密使を諸國に馳せて勤王の士を募し給ふ等、着々準備お怠りなかつたが、惜むべし、事いつしか

とそ亡の滅

勤王の諸將	① 護良親王(延暦寺・赤坂城・吉野より命令) ② 楠木正成(赤坂城・千早城) ③ 奮起せる諸將(赤松・名和・菊池・土居・得能等) ④ 船上山の行在所(伯耆の名和長年、天皇を隱岐より迎へ奉る)
北條氏の滅亡	① 六波羅陥落(高氏歸順して千種・赤松諸將と共に、こを陥る) ② 鎌倉滅亡(義貞、こを陥る) ③ 諸國平定(賴朝より百四十年にして政權朝廷に歸る)

皇の皇子量仁親王を立て奉つた。されば天皇御逆鱗益々甚しく、或は皇子尊雲法親王(後の大塔宮)を延暦寺の座主(一本山の寺務を)とし、或は春日神社に詣でて之に布施料として備前の地を賜ひ、或は園城寺の焼燼をみそなはして之に讃岐の地を寄進し給ふ等、頻に社寺と結んで僧兵等の力に倚り、以て討幕の謀を進め給ふた。

●笠置遷幸 討幕の御運動は、遂に六波羅征伐の兵を擧げんとし給ふまでに、その機運が熟した。然るに高時は之を知り、元弘元年（一九九一年）大兵を發して西上せしめ、不埒にも承久の例に倣ふて、天皇を絶海の孤島に流し、剩へ大塔宮をば弑しまつらうとしたから、天皇は先見神の如き大塔宮の言を納れ給ひ、夜に乗じて京都を出で、奈良に入り、やがて笠置に遷幸し給ふた。時に左右に侍し奉る者は藤原藤房（萬里小）・北畠具行等その數甚だ少い。ただされどこの時かの忠義の龜鑑楠木正成が、召に應じて來り謁したのは、天皇に對し奉りてまさに千萬の援軍であつた。

【笠置陥落】 高時は足利高氏（後の尊氏）等の諸將を遣はして笠置を攻めしめた。されど官軍もとより忠誠に燃えてゐる。加ふるに笠置の地險にして守るに比なき要害である。されば雲霞とまがふ大軍の賊兵も、流石に策のなすべき所を知らず、遂に城後より火を放つた。一騎尙よく千萬に當るの勇士の面々も、火に攻められては詮方ない。紅蓮の焰みるみる行宮を包むに至つたから、天皇は微服し神器を奉じて正成の赤坂城（護良・尊良の兩皇子もあます）として落ちさせ給ふた。ああ心なき猛火よ、烈風よ、強雨よ。而も闇は深く矢たげびの聲は物凄。三人四人と迷ひ離れて、いつしかお供に仕うまつる者とは藤房・季房ただ二人となつた。夜晝三日供御もなく、御召し給ふに與もなく、晝は道の青塚に身をひそめ、寒草疎な御座を茵とし、夜は道なき草に露

分け迷はせ給ふ。さして行く笠置の山を出でしより、あまが下にはかくれがもなし。」と御製あれば、藤房御返歌申して「いかんせんたのむかけとてたちよれば、なほ袖ぬらす松の甘露。」と。聖慮の程を察し奉る者、誰か涙を催さないでおられやう。

●光嚴院擁立 これよりさき天皇笠置に遷幸し給ふや、高時は量仁親王を立てて光嚴天皇と稱し奉つてゐた。されば天皇ここに再び京都に御還御あるや、高時及び持明院統は、天皇に請ふて神器を光嚴天皇に申し受けた。

【考察問題】 後醍醐天皇が光嚴天皇にお譲り遊ばした神器は偽器であつたと断定する史家もある。もし偽器であるとしたならば、光嚴天皇について吾等は如何に解釋せねばならぬことになるか。

●隠岐遷幸 高時はやがて天皇を隠岐に流し奉つた。尤も遷幸の禮は承久の時に比して遙に厚かつたとは云ふ。されど天皇を遠島に遷し奉ることは、何としてもあるまじき大逆である。時に元弘二年三月。御遷幸の路次、御輦輿を警固の逆徒北條氏より奪はんと企てて成らず、せめてもの赤き心を主上に聞え上げ参らせんものと、櫻を削り墨痕鮮かに、天莫空勾賤一時非無范蠡と賦した兒島高德の美しい物語は實にこの時である。

【兒島高德】 歴史的考證は、兒島高德の實在を否定することもある。されど吾等はそれがために、當時の國民一般の誠忠の思想までも否定するの愚に陥つてはならぬ。或意味に於ては、高德一人の實在よりも、高德に托して誠忠の心を披歴したこの美談の作者の實在、いな、この美談を生むに至つた國民思潮の實在を、吾等は反てうれしく思ふことも出来るのである。

天皇京都を發し給ふた翌日、高時は尊良親王を土佐に、宗良親王を讃岐に遷し奉り、また花山院師賢を下總に、藤原藤房を常陸に、その弟季房を下野に流し、さきに御謀に與つた日野資朝・同俊基を共に配所に殺した。その他有爲の公卿・僧侶等にして、或は殺され或は流されまた罪せられたものも少くなかつた。

**勤王の諸將** 護良親王 さきに延曆寺の座主となられた護良親王は、やがて笠置の行宮の安否を聞こし召さんが爲めに、此處を出でて暫く南都の般若寺にお忍び遊ばした。されどこの南都も、親王を匿し奉るには、賊軍の看守あまりに厳しい處であつたから、やがて落ちて正成の赤坂城に頼り、ついで姿を修験者にやつし、難を熊野に避け給ふた。爾來親王は山深き熊野・吉野・高野の間に往來し、密に恢復の機を窺ひ給ふたが、翌元弘二年八月には遂に令旨を諸國に下し、勤王の

師を募し給ふた。

【考察問題】 熊野・吉野・高野地方は、據りて以て事を構ふるのに實に屈竟の處である。何故に然うであるか  
を、(一)大社寺の存在 (二)地勢、の兩方面より考察せよ。

楠木正成 夙に起つて赤坂城を築き、護良・尊良兩親王を奉じて之に據つた。正成は更に後醍醐天皇をも笠置より迎へ奉らうとしたが、賊兵の攻撃急にして事遂に成らず、やむなく城を焼いて金剛山に身を隠した。されど誠忠無比・知勇双備の正成だ。よし四面に敵の猛襲をうけても、只一騎になるまでも、いかで奮戦せずしておれやう。まもなくここに千早城を築き、岩塊投擲・巨材瀕落・藁人形・投松明など得意の奇策縦横、吉野城の護良親王と相呼應して、小氣味よきまで賊兵をなやました。

奮起せる諸將 さきに護良親王の令旨あり、いままた正成の義戦目ざむる程に鮮かであるから、天下の諸將いかでか風を望みて奮起せずしておれやうぞ。かくて播磨に赤松則村、伯耆に名和長年、肥後に菊池武時、伊豫に土居通増及び得能通綱等が起つた。

【赤松則村】 播磨の赤松郷の豪族。護良親王の令旨をうけて深く榮光に喜び、元弘三年正月義兵を白旗城に



擧げ、山陰・山陽兩道を塞いで、幕命に應じて東上する諸軍を悉く扼止した。

【菊池武時】 弘安の役に武名を轟かした菊池武房の孫である。元弘三年三月、義兵を肥後に起し、寡兵を以てよく足利・少貳・大友等の聯合の大軍と博多附近に戦ひ、九州における勤王軍の魁をなした。

【土居通増・得能通綱】 共に伊豫河野氏の一族。元弘三年二月、兵を擧ぐるや、長門探題北條時直大軍を率ゐて來り攻めたが、内に官軍に内應する者を生じたため敵せずして逃げ歸つた。おお當時の人心は、確に北條氏を去つて勤王軍に靡き傾いたのである。

④船上山の行在所 勤王の軍かくの如く相前後して各地に起つたから、後醍醐天皇に對し奉る幕府の監視の眼は愈々嚴重を極めて來た。されどこの時已に、守衛の士の中にも而も心を天皇によせ奉るものあり、また對岸出雲には天皇を待つ事頻りなる忠臣あり、殊に護良親王は、屢々漁船に托して、勤王の諸將奮起の狀を具に申し送られたから、天皇愈々意を決して、密に隱岐を出でて伯耆に着き給ふた。時に名和長年あり。船上山の行在所に天皇を奉じて、來襲の賊軍佐々木清高（隱岐の守護）の勢を一蹴し、勤王軍のために萬丈の氣焰をあけて、ために山陽・山陰また賊影を見ないまでに至らしめた。

### 北條氏の滅亡

#### ⑤六波羅陷落

茲に於て北條高時は、大いに官軍の強勢に驚き、名起高家・足利高氏等をして西上、以て船上山を衝かしめんとした。されど機を見るに敏なる高氏だ。天下の形勢已に官軍に傾くと見れば、漂然として心を裏返す。即ち、密に使を船上山に送つて歸順の意を述べ奉り、やがて北條氏討伐の論旨を請ひ、丹波より踵を返して、千種忠顯・赤松則村（共に船上山より）と共に京都に攻め入つた。元弘三年五月七日!! そは六波羅陷落の日だ。賊軍の手より京都恢復の吉日だ。否、關西における北條氏の勢力最後の日だ。されば忠顯・則村・高氏等の遣はず急使が、足も空なる喜びに満ちて行在所に馳せ着いた時、後醍醐天皇は申すも畏し、將卒は何れも齊しく欣喜雀躍、霽變たる瑞氣漲る國の前途を祝福した。

#### 【考察問題】

六波羅陷落の時、足利高氏は行動最も敏捷、逸早くも京都に奉行所をおき、降人を招いて賊の討滅に與らしめらる等、從來六波羅府の司つた政務を、いつのまにか己が掌中に収めてしまった。然らば問ふ。高氏は何故にまづかほども六波羅に着目したか。

⑥鎌倉滅亡 この頃上野國新田莊に新田義貞あり、足利氏と同族にして、はじめ北條氏に屬してその命によりて赤坂城を攻めたが、勤王の勅を受くるに及び、倉皇として上野に歸り、ここに北條氏

討滅の義兵を挙げたのである。これ六波羅陥落の吉報の翌日にして、勤王の義心は彌が上にも衆を響かしてゐた折柄だ。されば來り集るもの數知れず、忽ち大軍を得て勢威堂々一舉鎌倉を屠つた。時に六波羅陥落後僅か十五日のことである。

【鎌倉最後の日】 時に義貞は、極樂寺坂切通より大館宗氏等の率ゐる十萬騎、巨福呂坂切通より堀口貞満等の率ゐる十萬騎、假粧坂切通より己白らの率ゐる五十萬七千騎の大軍を以て、鎌倉に進み入らうとした。されど北條氏にとつては實にその危急存亡を決するこの一戦だ。従つて死力を盡しての防戦に、流石の官軍も窮鼠に咬これんとする猫の觀すらあり、一進一退互に雌雄中々に決し難く見えたから、義貞は奮然起つて自ら一隊を率ゐ、稻村ヶ崎を徒渉して、由井ヶ濱の遠干瀧を眞一文字に鎌倉に乗り込んだ。されば、こゝにはじめて、賊兵士氣沮喪し陣容亂れて、潮の如く雪崩れ込んだ官軍の猛襲に次々に猛襲をうけ、而のみならず火を放たれたからたまらない。高時はじめその一族は、父祖代々の墓所東勝寺に退き、深く自刃して、さしにも永く大きかつた無道大逆の罪を天に謝した。

【考察問題】 新田氏は足利氏と共に最初何故北條氏に味方してゐただらう。

③諸國平定 六波羅及び鎌倉陥るや、近畿・東國・四國・中國は勿論、九州にては菊池の外に少貳・大友・島津等の諸將袖を連ねて官軍に味方し、陸奥にては結城氏勤王を唱へ、北陸にても義に奮起するものが相踵いだ。かくて政權再び朝廷に復る。實に頼朝が征夷大將軍に拜せられてから約百四十年のことである。

### 近古史(前) 概括問題

#### 時代の區分に關する問題

- 一、近古前半の時代(第八十二代後鳥羽天皇の御代の鎌倉幕府創立から、第九十六代後醍醐天皇の御代の北條氏滅亡に至る約百五十年間)は、之を鎌倉時代とも稱する。その理由如何。
- 二、近古前半のこの時代は、學者によりては更に、之を左の二期に區分する。その理由を考察せよ。
  - 1 源氏執政期(第八十二代後鳥羽天皇より第八十五代仲恭天皇に至る約四十年間にして、鎌倉幕府の創立。北條氏の專權・源氏正統の斷絶・承久の亂等の諸事件を含む時代)。
  - 2 北條氏執政期(第八十六代後堀河天皇より第九十六代後醍醐天皇の御代の北條氏滅亡に至る約百十年間にして、泰時及び時頼の善政・鎌倉文物の發達・元寇・北條氏の滅亡等の諸事件を含む時代)。

時代の特徵に關する問題

- 一、近古史前半のこの時代に於ける政治的一大特異點は、武家政治の徐々たる確立にある。よりて今その確立の次第を述べよ。
  - 二、また一般文化(政治をも含む)的<sup>な</sup>他の一大特異點は、平安時代に於ては只々僅かに表はれてゐた唐風脱却の色彩が、この時代に入るや愈々鮮明になつたといふことそれである。この事を念頭において、次の諸項目を説明せよ。(1新宗派の勃興、2武士道の發達、3國家的觀念の確立)。
  - 三、左の各期の時代的特徵を、括弧内の項目に基づいて考察せよ。
    - 1 源氏執政期(1源賴朝政權掌握の次第、2北條氏政權橫奪の次第、3政權恢收に關する朝廷の御企劃の顛末)。
    - 2 北條氏執政期(1北條氏がその執政時代に於て成し遂げた政治的功績、2北條氏滅亡の次第)。
- 諸種の問題
- 一、陸奥藤原氏の盛衰を述べよ。
  - 二、國初より鎌倉時代までに於ける公地公民制と土地人民世襲私有制との交互的消長を述べよ。
  - 三、鎌倉時代に於ける武家政治の特徵を、成る可く多くの實例を擧げて述べよ。

- 四、弘安・文永の役に際して表はれたる日本國民性の數々を、實例的に詳細に研究せよ。
- 五、鎌倉時代に於ける將軍家系の變遷を述べよ(陸士)。
- 六、鎌倉時代に關する史蹟地を擧げて、その各々を概説せよ(高校)。
- 七、鎌倉時代に於ける政治的實權の推移を述べよ(陸士)。
- 八、武家が政權を掌握せし次第、及び、その變遷を述べよ(海樞)。
- 九、鎌倉時代に於ける著名なる戦争につきて述べよ(陸士)。

近古史(前)年表

氏	源
82	後鳥羽
同	文治 元(一八四五)……賴朝守護地頭をおく。また議奏十人をおく
同	同 五(一八四九)……藤原泰衡、義經を殺す。賴朝、藤原氏を討つて奥羽を平定す
同	建久 元(一八五〇)……賴朝入朝す
同	同 二(一八五一)……公文所を政所と改む
同	同 (同)……僧榮西、宋より歸朝して臨濟宗を傳ふ
同	同 三(一八五二)……賴朝征夷大將軍に拜せらる

鎌倉時代(一)	
鎌倉	北
期	政
執	氏
83 土御門	86 後堀河
建久 四(一八五三)……源範賴殺さる	元仁 元(一八八四)……北條泰時執權となる。僧親、鷹浄土真宗を開く
同 六(一八五五)……奥州總奉行を定む	喜祿 二(一八八六)……頼朝征夷大將軍に任ぜらる
正治 元(一八五九)……頼朝薨去す	安貞 元(一八八七)……僧道元宋より歸朝して曹洞宗を傳ふ
建仁 三(一八六三)……北條時政、頼家を幽し比企氏一族を滅ぼす。實朝將軍となる	貞永 元(一八九二)……泰時等貞永式目を撰す
同 (同)……時政執權となる	
元久 元(一八六四)……時政、頼家を殺す	
同 二(一八六五)……北條義時執權となる	
建保 元(一八七三)……和田の亂	
承久 元(一八七九)……源實朝害せられ源氏滅ぶ。藤原頼經を鎌倉の主を迎ふ	
84 順徳	85 仲恭
承久 元(一八七九)……源實朝害せられ源氏滅ぶ。藤原頼經を鎌倉の主を迎ふ	同 三(一八八一)……承久の亂。三上皇遷幸。六波羅府の創設

鎌倉時代(二)	
鎌倉	北
期	政
執	氏
87 四條	88 後嵯峨
仁治 二(一九〇一)……高麗、蒙古に降る	寛元 二(一九〇四)……頼朝辭職しその子頼朝將軍となる
89 後深草	同 四(一九〇六)……北條時政執權となる
建長 四(一九一二)……宗尊親王鎌倉に下りて將軍となる	
同 五(一九一三)……僧日蓮法華宗(日蓮宗)を開く	
文應 元(一九二〇)……蒙古の忽必烈、大汗の位に即く	
文永 五(一九二八)……蒙古通好を求め來る。蒙古の使者が卻く。蒙古の難を大關諸社に告ぐ。北條時宗執權となる	
90 龜山	同 八(一九三一)……蒙古國號を元と改む。蒙古使者趙良弼來る
91 後宇多	同 一(一九三四)……文永の役
弘安 四(一九四一)……弘安の役	
92 伏見	
93 御伏見	
94 後二條	

鎌倉時代(三)

北條氏執政期(2)

95 花園 <small>はなぞの</small>	正和 五(一九七六)……北條高時執權となる。同顯時金澤文庫を建つ
正中 元(一九八四)……藤原實朝・同俊基等に詔して北條氏討滅を謀り給ふ。事露はれて兩人等高時に捕へらる	
嘉暦 二(一九八七)……尊雲法親王天台座主になり給ふ	
元弘 元(一九九一)……笠置遷幸。楠木正成義兵を起す。高時光嚴院を擲立す	
96 後醍醐 <small>ごたいご</small>	同 (同) ……笠置陥落す
同 二(一九九二)……天皇隠岐に遷幸し給ふ。正成千早に城を護る。護良親王吉野に城を	
同 三(一九九三)……天皇伯耆遷幸。高氏歸順。官軍京都を恢復す。義貞鎌倉を陥る。北條氏滅	

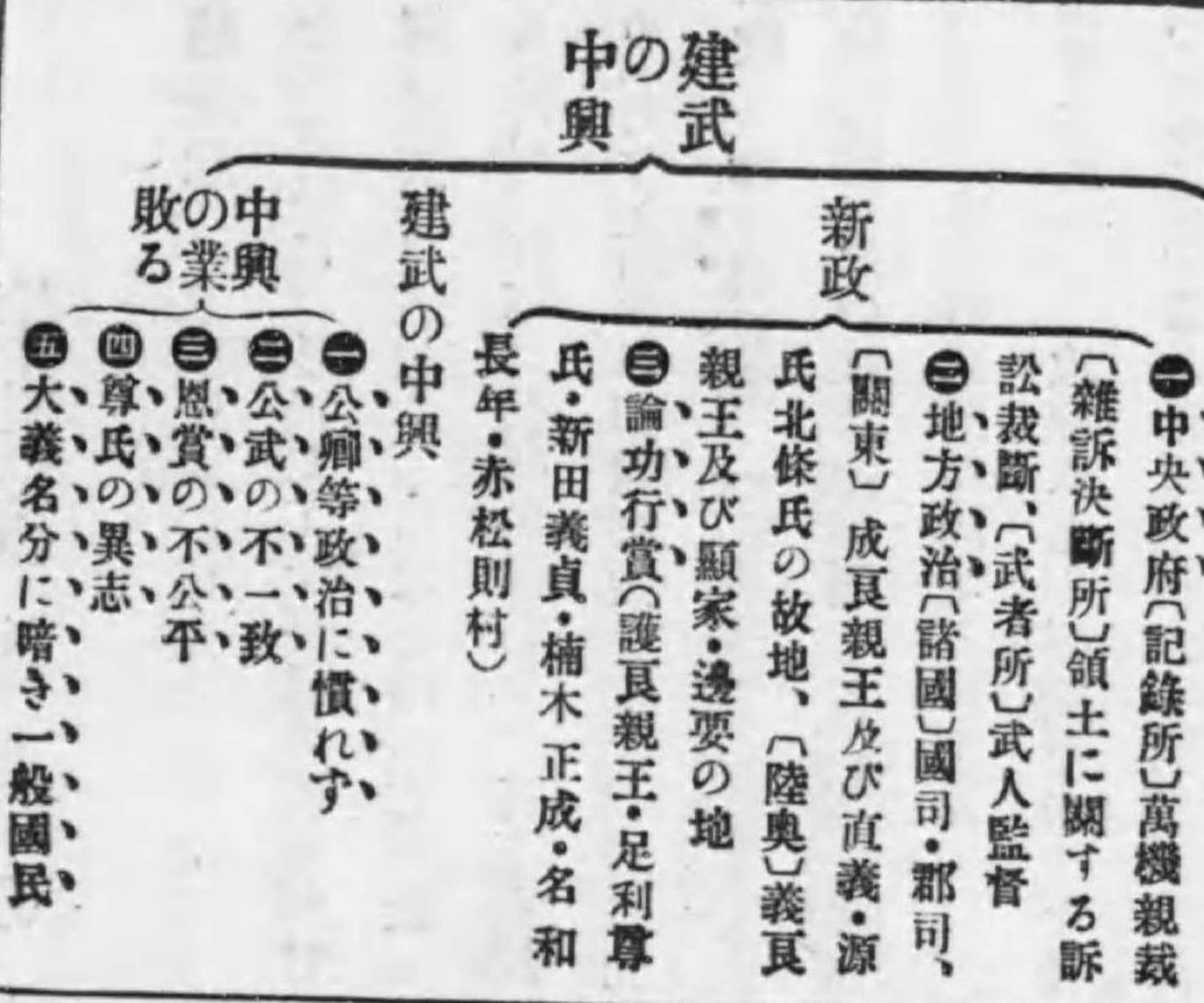
第九章 建武の中興

**京都遷幸** 京都恢復の報船上山に達するや、後醍醐天皇は直ちに此處を發し、途上光嚴院に避位を詔された。已にして千早城の圍も解けたので、楠木正成は赤松則村と共に、天皇を攝津の兵庫に迎へ奉つた。加ふるに之と殆んど前後して、鎌倉滅亡の報も達したので、天皇の御喜びは申すまでもない。官軍に歡呼の聲あり、天下萬民に祝福の狂喜ありて、誠忠の正成を先驅とし、歩武堂々めでたく京都に御還御迎はした。時に元弘三年六月。

**新政** ●中央政府 ●【記録所】 記録所を再興して萬機を親裁し給ふた。元來記録所は、昔、後三條天皇が藤原氏の權勢を抑壓して(當時の關白は賴通)、政權を親しく行はせられた時はじめて置かれたもので、その後政權武門に歸するに及んでは、暫く廢れてゐたものである。

**【雜訴決斷所】** 政權久しく朝廷を去つた後を承け、剩へ京都・近畿・その他の諸國多く戰亂の巷となつた當時のこととして、領土に關する争愈々甚だしく、或は他人の所領を横領するもの、或は己が所領を奪はれるもの等相踵いで、訴狀は積んで記録所に山を成した。雜訴決斷所は實に之等

京都還幸(元弘三年六月)



の訴訟を裁かんがために新設されたもので、吏員としては才學卓でた朝臣が之に任ぜられた。されど重大な事件はやはり記録所で取扱はれた。

【武者所】 この頃諸國の武人、兵を率ゐて京都に在る者甚だ多かつたから、之が統轄の機關として武者所が設けられた。武者所の人としては新田氏の一族が専ら之に補せられた。

【地方政治】 【諸國】 頼朝以來の守護・地頭制を廢して、國司・郡司制の王朝時代の昔に歸つた。蓋し守護・地頭の制は、職務世襲の弊及び土地人民の私有の弊を起し易いが、國司・郡司制は、四年任期の交替制であり、従つて中央集權の實を擧げ易いからである。

【關東】 足利高氏の弟直義を相模守とし、皇子成良親王を奉じて關東鎮撫の任に當らしめ給ふた。これ關東は北條氏の故地であり、また頼朝以來武家政治の故地であるからである。

【陸奥】 北畠顯家(親房)を陸奥守とし、皇子義良親王を奉じて東北地方を鎮めしめ給ふた。是陸奥は邊要の地、それは常に蝦夷族跋扈の恐れのみならず、逆賊の巢窟となる恐れがあるからである。

【考察問題】 徳川時代の大名制度及び現代の府縣知事制度は、各々、守護地頭制及び國司郡司制の何れに屬するか。また現代の我國が、前者を棄てて後者を探つておる理由如何。

【論功行賞】 亂後の新政に最も緊要なる事の一つは論功行賞である。然るにこの時の新政に於てや、或は爲政當局者の不明により、或は高氏等の野望により、それは思ふがままに紊亂し攪亂された。吾等は、當時輔弼の武家及び公卿達が、遂に後醍醐天皇の御大業を、反て損ふたことを返す返すも遺憾に思ふのである。

【護良親王】 征夷大將軍に任ぜられ、天皇を輔けて天下の軍政を統べ給ふこととなつた。

【足利高氏】 勳功第一として武藏・常陸・下野三國を與へられ、加ふるに天皇の御名尊治の一字を賜はり、高氏を改めて尊氏とした。

【新田義貞】 越後・上野・播磨を興へられ、勳功第二位におかれた。

【楠木正成】 攝津・河分を興へらる。

【名和長年】 因幡・伯耆を興へらる。

【赤松則村】 はじめ播磨國を興へられたが、後故なくして領土を縮少され（恐らく尊氏等の暗申、ただ備かに播磨國佐用莊だけとされた。飛躍が効を奏したのだ）。

【考察問題】 (一)護良親王を征夷大將軍に任じ給ふたことは、天皇がいかに親王を信任されたかを語るものである。征夷大將軍の性質を究明し、併せて、親王が之に任ぜられるに充分なるべき人物におはしたことを考察せよ。(二)論功行賞の著しく不公平な箇處を指摘しかつその理由を述べよ。

建武中興 ここに於て天下全く一統して政權朝廷に歸した。而して翌元弘四年正月廿九日、年號を改めて建武とせられたから、世に之を建武中興と申す。

中興の業敗る されど中興の業はまもなく破れた。吾等は次の諸理由を數へ得る。

●公卿等政治になれず 政權朝廷を去りて已に久しいから、公卿等は政治の實際に疎かつた。綸言朝に出でて夕に變り、政綱の方針常なく、或は亂後をも顧みずして頻に土木の業を起す等、弊政

百出の様であつた。

●公武の不一致 公武は文武だ、鳥の兩翼、車の兩輪だ。然るに彼等は相携へず、武人はひたすら軍功に驕り、公卿は武人を文官の徒と侮つた。互に何たる狹量ぞ。大なる國政の前には小さい自己を忘れて然るべきものだ。

●恩賞不公平 例へば尊氏が勳功第一に推され、則村がその功を認められなかつたと云ふが如く、論功行賞は甚だ不公平であつた。元來武士には、天下の形勢を觀望した結果歸順した者、北條氏に對する私怨を晴さんが爲に歸順した者、朝廷よりの恩賞を豫想して歸順した者等が決して少くはなかつた。義のために何故義を唱へないのだらうか。然しそれは大義名分の思想天下に未だ普くなかつた當時のこととて證方がない。ともかく、論功行賞の不公平は、直ちにひいて天下に不平の武士を作りいだした。

●尊氏の異志 かかる間に尊氏は、常に不平の武士を語り招きて己が腹心とした。云ふまでもなく、彼は「大野望奸佞邪惡の權化だからだ」(尊氏の異志については一部分は前に述べた。また詳しくは後章で述べる)。

●大義名分に暗き一般國民 久しく武家政治の下にあり、従つて朝廷の尊嚴動もすれば薄蕩の中

に蔽はれ勝ちの當時であり、加ふるに學問教育の未だ開けぬ當時であつたこととて、眞に大義名分を解する人は甚だ乏しかつた。されば當時の國民は、高時の弊政を厭ひては王政復古を希ひ、やがてその王政の振はざるを見るやまた武家政治の昔を慕ふた。ああ衆愚は御し易い。而も衆愚は御し難い。どこまでも國民教育の堅實な普及が肝要だ。

【練習問題】 (一) 建武の中興(高商)。 (二) 建武の中興が破れた理由(高師)。

### 第十章 足利尊氏の叛

**尊氏の異志** 尊氏が歸順した理由 足利氏は源義國(義家の子)より出で、新田氏とはその祖先を同じくする。代々下野國足利莊に在りて北條氏に隸屬してゐたが、元來北條氏は源氏の臣下であり、かつ平氏より分出した家であるから、足利氏累代の希は、いかにもして北條氏に代りて源氏の舊業を成さんとするに在つた。されば大異志を抱く尊氏が、天下の形勢を見て、逸早くも勤王軍に味方したのは、全く勤王軍と共にまづ北條氏を滅ぼさんとの策に外ならなかつた。

● 歸順後の尊氏 ● 新田義貞を嫉む ● 新田義貞は源氏の嫡流であり、而も鎌倉を攻めて北條氏を討滅した。されば彼の勳功は何としても遙かに尊氏の上にあることは、衆目の共に齊しく認め



所である。けれどもそこは流石に奸佞邪惡の尊氏だ。萬策を弄して遂に、己が勳功を第一位とし、義貞の上におくことに成功したのである。

【不平の武士を語らふ】 前にも述べた様に、建武中興に對する不平の武士があれば、悉く之を語らふて己が味方に引き入れた。即ち恩賞に洩れた武士あれば、之がために天皇に請ひて追賞を施し、或は豫めまづ暗中飛躍、殊更に恩賞の不公平を來さしめ、やがて徐ろに何喰はぬ顔して件の加賞を施す等、實に惡辣の限を盡したのである。

【護良親王を幽閉しまつる】 されば護良親王は、

密に楠木・名和等の諸將と共に、尊氏の異志を天皇に奏言し、またその討滅策を企圖された。され



と悲しい哉、世の將に傾かんとするや、悪魔榮へて善神振はず、尊氏は遂に近臣及び寵臣等と結んで、天皇に、「親王は皇位横奪の野心あり」と讒して、無道にも親王を鎌倉に幽閉し奉つた。蓋し、親王は當時朝廷の柱石をなし給ひし人、従つて尊氏は、親王を天皇以上に常に恐れ憚つてゐたのである。

尊氏叛す

北條時行の亂

北條高時の遺子時行は、鎌倉陥落の日、近臣に扶けられて、僅かに身を以て信濃に逃れてゐたが、長ずるに及び、鎌倉を守護する足利氏に對して報復の念抑へ難く、五萬の大兵を得て不意に鎌倉に攻め入つた。よりて直義、戦ひ利あらず、一時鎌倉を棄てて逃走するのやむなきに至つた。時に建武二年（一九九五年）。

直義、護良親王を弑し奉る

されど將に鎌倉を落ちんとする直義の唯一最大の後顧の患は、護良親王の處分問題であつた。即ち、高時の遺子時行輩は、よしそれが如何程荒れ狂はうとも、天下の大勢已に決した當時のこととて、毛頭の恐れもなかつたが、親王が牢を脱して時行と相結ばれるか、又は舊縁の地吉野・熊野地方に兵を募されるかのこともあらば、それは實に足利氏の死活に關はる重大問題を醸すだらうと考へた。されば直義は、遂に淵部義博を遣はして、親王を土

の牢に弑し奉つた。

護良親王薨去

ほの暗い土の牢屋に、燈火をかけて余念もおはさず御經遊ばしてゐた時、淵部は夏なほ寒

い刃を提げ、面相も凄く徐に親王ににじり寄つた。親王きつと睨みつけ、「汝はわれを殺さんための使者なるべし。心得たり。」と、勇ましくも組みつかれたが、如何せん、九ヶ月餘の御牢居に御身體いたく衰へ、加ふるに防護の刃さへ持ち給はぬこととて、あたら二十八歳の有爲の御身を、いたはしくも逆賊の刃に斃れさせられた。親王おはして政權は朝廷に歸つた。親王薨去せられて逆賊はまた所得願にはびこるだらう。

尊氏鎌倉に據りて叛す

直義の軍を撃破した北條時行は、鎌倉をその手に收めて意氣大いになり、加ふるに東國の豪族多く來屬するありて、その勢力は蓋し中々に侮り難いものとなつた。

この時、「時機愈々至れり」と、心中密にほほ笑んだのは尊氏だ。即ち尊氏は時行討伐の令を請ふこと再三再四、而も御聽許を待つひまもなく、恣に大兵を率ゐて東下し、直義の軍と參河にて會し、やがてまもなく鎌倉に入りて容易に時行の軍を撃破した。ここに於て天皇は、勅使を鎌倉に遣はして、彼を京都に召還せんとし給ふたが、彼遂にきかず、公然叛旗を翻し、自ら征夷大將軍と稱し、義貞を斥けて君側を清むるを名として兵を天下に募つた。

【考察問題】(一)後醍醐天皇が、再三再四の尊氏の請をも聽許し給はなかつたのは何故か。(二)北畠顯家は、楠木・新田諸氏と同様に心からなる忠臣である。天皇はこの忠臣を、相模守足利直義の北方に並べ封じて陸奥守とし給ふたが、それは何故か。

尊氏の上洛と西走 上洛(京都を占領す) ここに於て天皇逆鱗あり、義貞に勅し、陸奥の北畠顯家と共に、鎌倉を前後より襲はしめ給ふた。然るに顯家の軍は未だ到着せず、義貞は足柄・箱根に戦ひて利を失つたから、尊氏及直義は勝に乗じて西上し、播磨に起つた赤松則村と東西相呼應して、勢威堂々天下を壓倒するの概があつた。さればかつて風をのぞんで勤王軍に味方した天下の諸將も、今は響の音に應ずるが如く、陸續として足利氏の麾下に走せ集つた。大義名分の觀念はまだ普くなかつた當時とは云へ、何たる節義に軽い輩であるぞ。かくて尊氏は、淀(義貞の)宇治(楠木)・勢多(名和)の防禦を突破して東より、また則村は西より、共に京都に亂入した。ああ中興の業遂に廢れて、天皇はまた比叡山に行幸された。

西走(京都を奪還さる) 鎌倉討伐の令をうけた北畠顯家は、ここに國中の兵を率ゐ、加之、常陸・下野・上野・上總の諸國に大兵を得、尊氏の後を追ふて、無人の境を行くが如く、破竹の勢を以て京師に入り、直ちに比叡の行在所にまづ主上の御機嫌を奉伺した。然るに偶々洞院實世も亦、東山道の軍を率ゐて西上した。されば勤王軍大いに振ひ、一舉にして京都を賊軍の手から奪還し、尊氏及び直義を西に走らせた。時に延元元年正月(一九九六年)。

【考察問題】(一)足利尊氏はその根據地として何故にまづ鎌倉を選んだか。(二)北條時行を破りて鎌倉に入るや、尊氏は大いに論功行賞を盛んにし、たとひ一步卒と雖も功ある者は厚く之を遇した。權謀術數に長じた彼を考察せよ。

尊氏の再舉 西走後の尊氏 されど勤王軍の京都奪還は、やがて來らんとする嵐の前のただ一瞬時の小康にすぎなかつた。即ち西に走つた尊氏は、光嚴院より給はつた錦の御旗をおしかざして、威風堂々中國及び九州を壓し、加ふるに勤王の將菊池武敏の軍を、大いに多々良濱邊に擊破した。されば彼は、京都を去つて未だ數日ならざるに、はや九州の地を餘す所なくその麾下に風靡して、將に大突進の準備を成し遂げたのである。

湊川の戦 尊氏西走するや、義貞は後醍醐天皇の命を奉じて、播磨白旗城に赤松則村を攻め圍み、やがて中國全部の平定を企劃してゐた。然るに偶々この時、尊氏兄弟大舉東上するの報に傳は

つた。されば、彼は之を兵庫に邀へ討たんとて、急遽白旗城の圍を解いて退いた。時に朝廷にても、對尊氏策戦についての大評定があつた。時に正成申す様、

尊氏卿已に筑紫九國の勢を率ゐて上洛候なれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候らん。御方の疲れたる小勢を以て、敵機に乗りたる大勢に懸け合ひて、尋常の如く合戦を致し候はば、御方決定打負け候ひぬと覺え候なれば、新田殿をも京都へ召し候ひて、前の如く山門（比叡山延暦寺）へ臨幸成り候ふべし。正成も河内へ、籠り下り候ひて、畿内の勢を以て河尻（彦川尻）をさし、黒き、兩方より京都を攻めて、兵糧をつからし候ふ程ならば、敵は次第に落ち下り、御方は日々に隨ひて馳集り候ふべし。其時に當りて、新田殿は山門より推し寄せられ、正成は搦手にて攻め上せ候はば、朝敵を一戦に滅ぼす事ありぬと覺え候。（太平記）

と。されど用ゐられず、

正成が申す處もその謂ありと雖も、征伐の爲にさし下されたる節度使未だ戦を成さざる前に、京都を棄てて一年の内に二度まで山門へ臨幸あらんことは、帝位の輕きに似、又官軍の道を失ふ所以なり。

との、坊門宰相清忠の言用ゐられて、正成は命を奉じて、義貞を援くべく兵庫に赴いた。名高い櫻井驛訣別は、兵庫下向の時のことである。即ち子正行に庭訓を残すやう、

獅子子を産みて三日経る時、數千丈の石壁より之を擲つ。其の子獅子の氣分あらば、教へざる中に跳ね返りて死すすと云へり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、我教誡に違ふこと勿れ。今年の合戦天下の安否と思、今生にて汝が顔を見んこと之を限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍（尊氏）の代に成りぬと心得べし。然りと雖も、一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて、降人に出づることある可からず。一族若黨の一人も生き残りてあらん程は、金剛山の邊に引籠りて、敵寄せ來らば命を養由が失さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。（太平記）

義貞及び正成は、尊氏兄弟の大軍を邀へてよく防ぎ戦つた。殊に正成は、兵庫湊川の戦に於て、得意の奇策縦横、百騎を以て萬騎をなやまし、剩へ敵將直義をまさに虜にせんとすらしした。されど勿論衆軍敵せず。義貞は收れ歸り、正成は戦死した。

抑々元弘以來、恭くも此の君に憑まれ進らせ、忠を致し功に誇る者幾千萬ぞや。然れども智仁勇の三徳を兼ねて、死に善道に守るは、古より今に至るまで、正成ほどの者は未だなかりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて、逆臣横に威を振ふべきその前表のしるしなれ。（太平記）

ああ誠忠の權化正成兄弟は、七生報國を誓ひつつ、にこやかに君に殉じ國に殉じた。

【考察問題】（一）正成の建築を斥けたのは公卿清忠である。當時の公卿が常に武人を無文盲の人として侮



は尊氏の所謂朝廷があつたから。世人動もすれば、此の時代をよぶに南北朝時代の名を以てすることがある。されどこの名は甚だ安當でない。蓋し三種の神器のおはす所は吉野なるを以て、吉野朝廷時代の名を以て稱すべきであるからである。

吉野遷幸

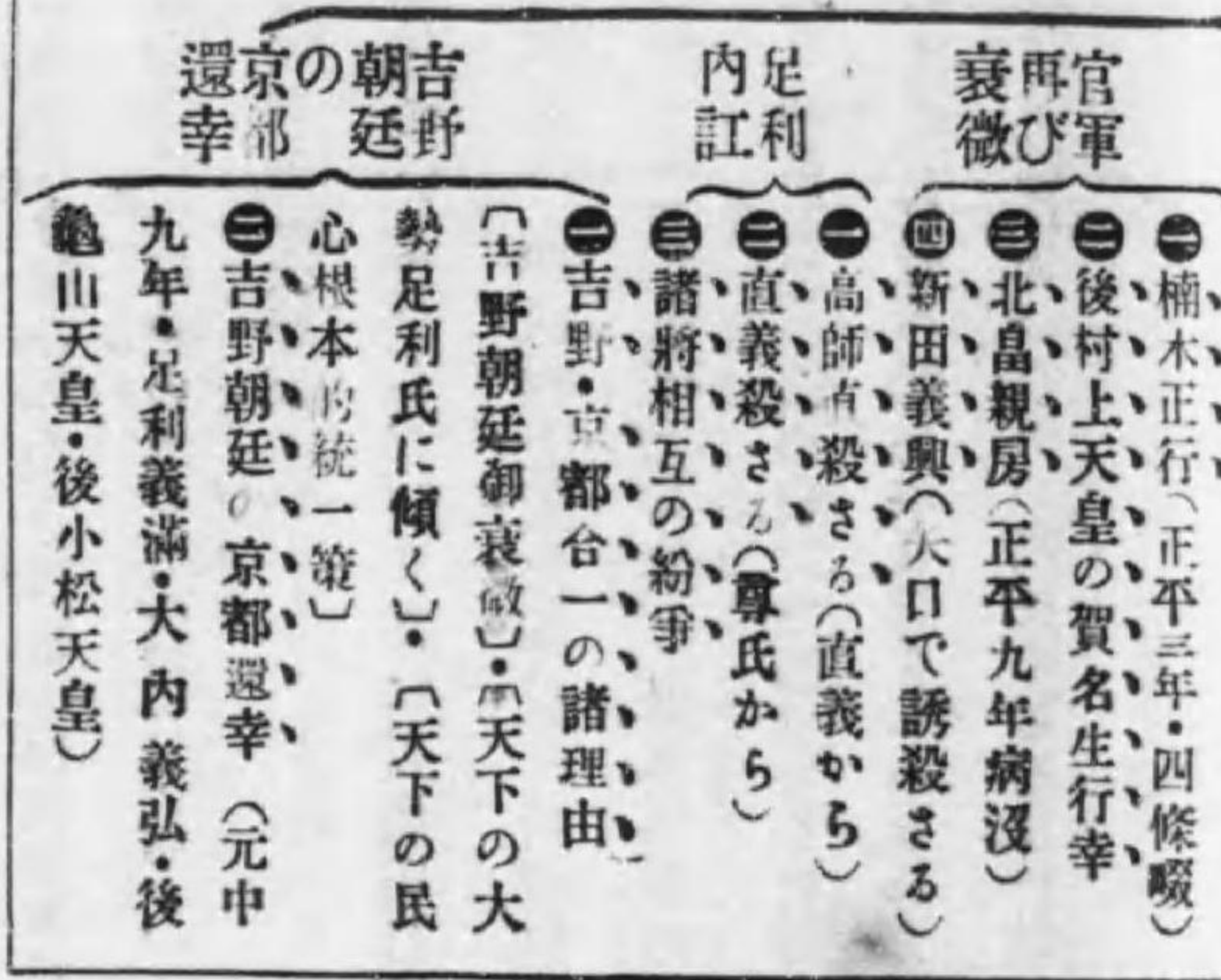
- 尊氏・光明院を擁立す
- 吉野遷幸(延元元年十二月)
- 金ヶ崎落城(尊氏親王・新田義顯自殺、眞國親王殺さる)
- 北畠顯家の西上と其戦死
- 官軍(西上)義詮・師泰を破る、(戦死) 處々に轉戦して石津に敗死す
- 新田義貞戦死(藤島の戦)
- 後醍醐天皇崩御(延元四年)
- 後村上天皇即位(義良親王)
- 東國(宗良親王・新田一族・北畠親房)
- 再官軍(楠木氏)
- 九州・懷良親王・菊池氏

官軍衰微

● 金ヶ崎城陥落 後醍醐天皇の京都還幸に先ち、義貞は勅命によりて越前に至り、金ヶ崎城に據つたが、賊軍に攻められて城遂に陥り、皇子尊良親王及び義顯(義貞の子)は自殺し、皇太子恒良親王は賊手に捕へられ、後京都で殺され給ふた。

● 北畠顯家の西上とその戦死 【西上】 陸奥の北畠顯家は、亦勅命によりて義良親王を奉じて陸奥を發し、下野に入り、武藏を略し、上野に兵を擧げた義興(義貞の第二子)に援けられ、また伊豆に起つた北條時行に援けられて、勢頗る振ひ、遂に鎌倉に攻

吉野朝廷



めて義詮(尊氏の子)を追ひ、やがて猛然東海道を西に進んだ。

【戦死】 顯家の西上軍は、賊兵高師泰の軍をまづ見事に一蹴し、愈々尾張・伊勢を越えて終に奈良に入つた。されば尊氏の驚愕一方ならず、急遽大兵を奈良に向はしめたから、顯家は之と處々に轉戦した。されど天遂に勤王軍に利せず、力つきて吉野に走らんとする途中、和泉石津(堺市の南)に戦死した。

● 新田義貞戦死 金ヶ崎落城の際外に在つた義

貞は、其後北陸に於て頻りに勢を得たが、ここに顯家戦死するや、勅を奉じて京都に入らんとし、まづ越前藤島城の賊軍を攻めた。然るに不幸にも戦義貞に利あらず、流矢に傷き、やがて自殺した。

● 後醍醐天皇崩御 延元四年八月、天皇御不豫にましましたが、月の十六日、遂に都の空をのぞ

みつつ南都にわびしく崩じ給ふた。時に御年五十二。

【天皇御臨終】「……只生々世々の念妄ともなるべきは、朝敵を悉く亡して、四海を泰平せしめんと思ふばかりなり。……中略……之を思ふ故に、玉骨は縱令南山の苔に埋まるも、魂魄は常に北關の天を望まんと思ふ。若し命を背き義を輕んでは、君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず」と、委細に綸言を残されて、左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ、右の御手には御劔を按じて、八月十六日の丑の刻に、遂に崩御なりにけり。(太平記)

勤王の諸將相ついで没し、いままた天皇崩じ給ふ。ああ南風遂に競はず、悲しい哉。

官軍再び振ふ 後村上天皇即位 後醍醐天皇崩じ給ふや、遺詔により第七皇子義良親王が御即位になつた。之を後村上天皇と申し奉るのである。

【義良親王】和泉石津の戦の後、後醍醐天皇は、顯家(石津の戦に)の父親房等をして、また義良親王を奉じて陸奥に下り、官軍の勢を取り返さしめられた。然るに親房等、伊勢より海路東に向つた途中に大嵐あり、親房の船は常陸に着いたが、親王の御船は伊勢に吹きもどされ、親王は吉野に御歸り遊ばした。たまたまその時天皇が、崩御されましたので、御遺詔により親王が御位に即き給ふた。

東國 かくて之より官軍の勢は再び張つた。即ち宗良親王は遠江におはして官軍を督し給ひ、新田義興・弟義宗(共に義)・脇屋義助(義良)等の新田氏一族は亦東國に雄視した。殊に北畠親房等は、常陸地方を中心として熱心に恢復の業を圖り、また軍旅の間に神皇正統記を著はして、以て吉野朝廷の正統なる事を明かにし、民心の嚮ふ處を知らしめた。

【神皇正統記】神代より、後村上天皇踐祚に至るまでに於ける歴代の大要を記し、皇統の由て來る處、國家の治亂興亡等を説き、吉野朝廷が神皇の正統なることを論じたものである。

近畿 正成の子正行及びその一族は畿内に在り、吉野朝廷の大柱石をなしてゐた。

九州 懷良親王は征西將軍として肥後におはす。菊池氏の一族之に屬して忠誠を致した。

官軍再び衰微す 楠木正行 正行、父の遺志をつぎ、吉野朝廷柱石の臣として、常に天皇を守護し奉り、また屢々兵を率ゐて京都を攻めた。中にも山名・細川が聯合軍を、攝津・瓜生野に只一戦に破つた武略は鮮かさ極るものであつた。けれども正平三年(二〇〇八年)、高師直の大軍と四條に會戦するに及びては、流石に衆寡敵する能はず、潔く君國に殉じた。時に年僅かに二十三。別格官弊社四條畷神社にその英靈を祀つてある。



【天下の大勢足利氏に傾く】 勿論足利氏に於ても内訌殆んど絶ゆる時がなかつた。とはいへ天下の大勢が、歩一步と次第に足利氏に傾いて行くことは、何としても争はれない事實であつた。

【天下民心の根本的統一策】 天に二日なきが如く、地に二王ある可からず。足利氏の權勢は、畢竟するに、所謂地上の兩王を合一して、天下民心の根本的統一を達成すること實に其處にまつと、足利氏は思惟した。されどここに注意すべきは、合一のこの劃策が、足利氏の純利己的立場からのみ立てられたと考ふる謬見に陥らぬ様にするに於てである。即ち足利氏は、御衰微の吉野朝廷をそのまま永く放任申し上げておくことを、甚だ心苦しく思つたこと、實にそれが合一劃策の一半の動機をなすものである。

●吉野朝廷の京都還幸 京都と吉野との合一氣分は、かくして日に濃かになつて來た。そこで足利第三代義満は、大内義弘を吉野に遣はし、謹んで京都への御還幸を請ひ奉つた。時に後村上天皇崩じ給ひて、後龜山天皇御位に在したが、天皇は、天下久しく争亂の巷となり、萬民塗炭の中に苦しむをあはれませ給ひ、快く之を御聽許になり、やがて京都へ御還幸あり、父子の禮を以て、神器を後小松天皇に傳へさせ給ふた。ここに於て義満は、上皇に供御の料を獻じ、或は舊吉野朝廷

諸臣に食邑をすすめる等、大に禮を厚くしたので、さしにも難い合一の大問題も、極めて和氣霽々裡に完成した。これ實に元中九年(一〇五二年)にして、延元元年後醍醐天皇吉野還幸より三代五十七年であつた。

【考察問題】 大逆臣の足利氏であり乍ら、而もよく天下統一の大業をなしたけた理由如何。次の諸項目によりて考察せよ。(1)源氏の裔、2)尊氏・義満の人物、3)對諸將卒政策、4)對朝廷政策

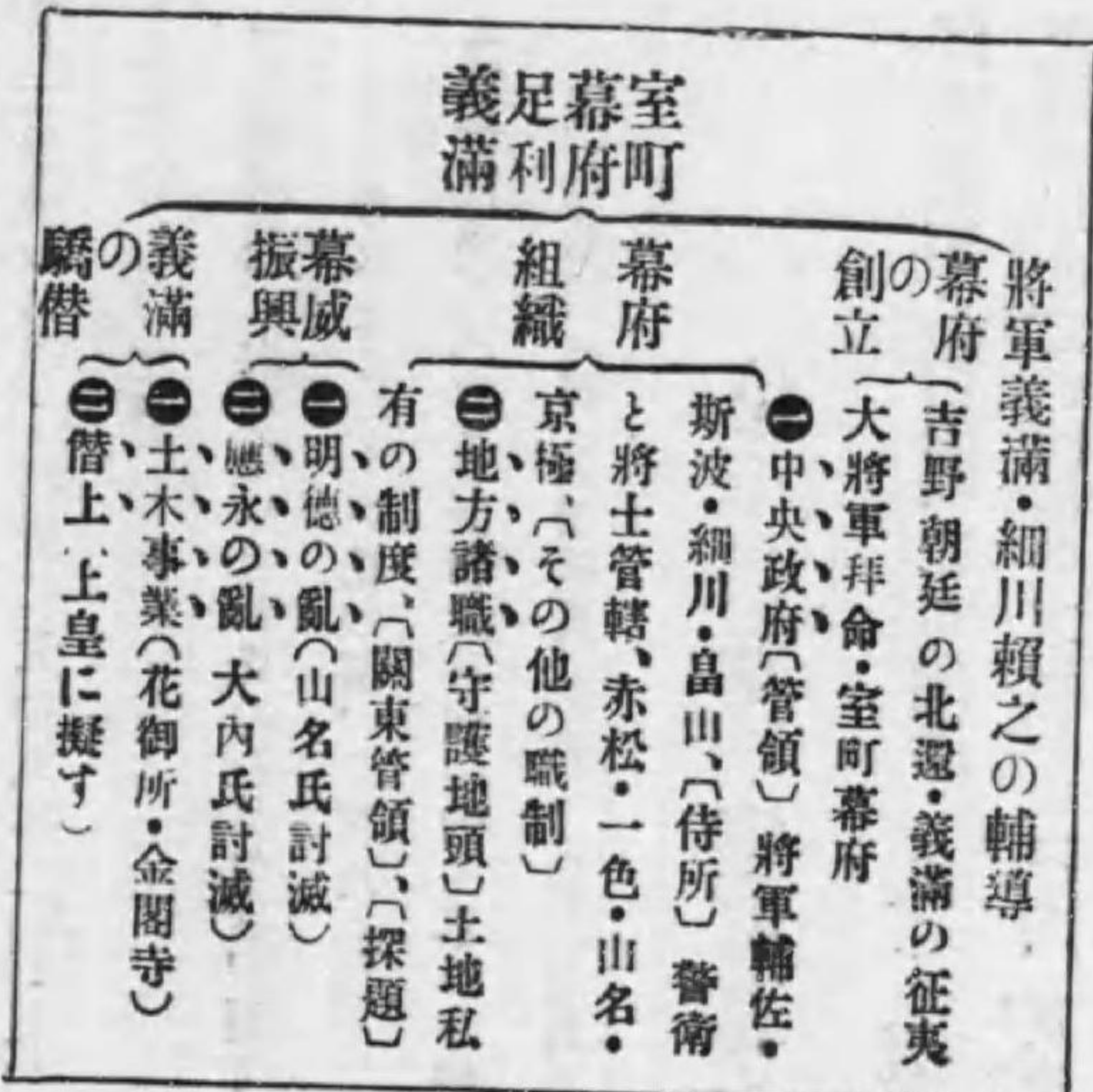
【練習問題】 (一)吉野朝廷時代の勤王軍の動靜を略述せよ。(二)吉野・京都合一の顛末を述べよ。(三)金ヶ崎城(陸幼)。(四)新田義貞(海兵)。(五)北畠親房(高校)。(六)楠木氏(高師)。

## 第十二章 室町幕府、足利義満

將軍義満・細川頼之の輔導 第三代義満は義詮の子、襲職の時年僅かに十歳であつた。されば賢臣細川頼之が輔導の大任にあたり、夙夜勵精、或は文武兼備の士を選んで左右に候せしめ、又戒法を作つて奸臣を取締り、その他禮法を設ける等、只管治をはげんだ。加ふるに義満長じて英邁であつた。父祖の創業が、この時代に於て愈々完全に大成されたのも蓋し遇然のことではない。



室町幕府の創立 尊氏・義詮二代の間は、正統尙ほ吉野にいますを以て、天下統一の業を達成することが出来なかつた。然るに義満の時にいたりて、吉野・京都の合一あり。ついで義満征夷大將



【中央政府】 鎌倉幕府の執權に相當し、將軍を輔佐して政務に與かる職である。されば

軍に任せられたから、ここにはじめて足利幕府の名實が整つた。足利幕府はまた之を室町幕府にもよぶ。これ義満が、新第花御所を京都室町に營み、そこを以て幕府と定めたからである。

【考察問題】 尊氏・義詮二代の間は、名義上はまだ幕府と稱することが出来なかつた。何故であるか。  
室町幕府の組織 室町幕府の組織は、鎌倉幕府のそれに法つてやや潤色されたものである。従つて中央政府・地方政治等、兩者全く相類似してゐる。

職權最も重く、その家系足利氏から出てゐる斯波・細川・畠山の三氏交々之に任せられる。三氏は所謂三管領である。

【侍所】 司る所、鎌倉幕府の侍所と略々同じい。されど權力は遙にそれより重く、即ち將士を管轄し、幕府を警衛し、その他警察の事務等を司る。赤松・一色・山名・京極の四氏交々之に任せられるから、四氏を四職とも云ふ。

【考察問題】 管領家及び侍所家を一家とせず、數家としたのは何故か。  
【その他の職制】 その他政所・問註所・評定衆・引付衆等がおかれた。

【政所】 鎌倉幕府の政所の如き重職ではなかつた。即ちその司る所は、金穀の貸借・田圃の賣買・諸國の稅等、主として財政に關することであつた。伊賀氏の世襲。【問註所】 職掌鎌倉に同じく、主として訴訟を裁決する。町野・太田兩氏の世襲。【評定衆】 職掌はまた鎌倉に同じい。足利氏の一族たる吉良・石橋・山名・一色諸氏を首班とし、尙ほ北條氏の族人をも之に用ゐた。【引付衆】 また鎌倉に倣ひ、五番をおき、頭人五名をおいた。

【地方の諸職】 【守護地頭】 建武中興時代の國司・郡司制を廢して、守護・地頭制の鎌倉時代に復

した。こは明かに土地人民私有制度の昔への逆進である。而して足利氏は、その政權掌握が、守護地頭の力に待つことの多かつた關係上、その守護地頭を優遇する必要があつたが、こは明かに土地人民私有制度の増長である。かく觀來ると、足利幕府季世の大争亂・群雄の大蜂起が、その一端を遠くここに發しておることに氣づくであらう。

【關東管領】 義詮の子基氏、まづ初代の關東管領となつて鎌倉に下つた。されど詳しくは後章に改めて述べる。

【奥州探題・九州探題】 共に邊要の地であるから之をおいた。

【考察問題】 守護地頭制の弊を知り乍ら、足利氏は何故にその制を採用したか。

幕威振興 ①明德の亂(山名氏の亂) 尊氏及義詮は、諸將に對して寛大に過ぎた政策をこつた(その理由は守護地頭の條下参照)。従つて諸將は頗る驕恣、屢々幕命に抗ふた。山名氏清の如きはそれで、實に十ヶ國の所領を擁して、宛然幕府に對する一大敵國の觀を呈した。されば義滿が、身將軍の職に在り乍ら、而も自ら諸將を率ゐて之を攻めたのは、畢竟するに、幕威振興政策の一端に外ならない。果せる哉、山名氏滅亡の後、諸將は漸く幕府を恐れ憚る様になつた。

②應永の亂 義滿はまた大内氏を討ちて之を滅ぼした。詳しくは後章に改めて述べるが、要するに、さきに明德の亂に際して幕府を恐れ憚つた諸將は、いままたこの亂の平定によりて、愈々幕府に恐れ服し、遂に復た叛旗を翻すものがなくなつた。

義滿の驕僭 ③土木事業を頻りに起す 天下は日々に泰平に赴く。泰平の世の人は自ら奢侈に傾く。而も義滿の泰平は義滿自ら作りなした泰平だ。天下萬民頻りに誅斂に泣くのも顧みず、彼が、或は盛んに土木事業を起し、または日々驕奢の遊びに耽つたのは、蓋し寧ろ當然の成行だらう。殊にその土木事業は素晴らしいものだつた。即ちさきには結構善美の花御所を營んだが、いままた京都北山に金閣を造營し、その他大堂・巨刹の建立枚擧に追ない程であつた。

【花御所】 京都室町に建てられた。邸内宏大を極め、結構善美をつくし、かつ庭園には種々の名花珍草を植ゑた。花御所といふ名はそこに起つてゐる。尙ほ幕府が、この邸におかれたことは已に前に述べた。

【北山別第】 義滿は更に別第を北山に起した。何しろ最極盛時の幕府が、至高絶大の權力を以てしての大土木だ。諸大名は競ふて工事を援けた。援ける者はその家榮え、援けぬ者はその家滅びるは、權力至上主義のこの時代の世の習。だから諸大名は、各々その財力を擧げ盡して工事を援けたのだ。従つて竣工のこの

北山別第が、如何に善美の極を盡したものであつたかといふことは、今更謀々を要すまい。例へばかの、第内に建てられた三層の金閣である。目も絢なる金色が、夕陽に燦として輝く時、或は靜かに影を池水にうつす時、己が心に湧き立つ藝術への憧憬を、誰か意識せずして居やう。

遮莫、工成ると共に、彼は、室町の花御所及び將軍職を子義持に譲り、己はこの新第にひき移つて尙ほ幕政を監視した。而してやがて彼はこの新第に、後小松天皇の行幸を仰いだり、その時の如きは、壯麗な御殿を新に造り、その西北には早咲の櫻を並樹に植ゑ、庭に五色の砂を敷きつめ、さて上す饗膳の器具は皆金銀を用ゐ、珍羞は山を成し、舞樂・猿樂・蹴鞠・連歌等絶ゆ、ひまなく、駐紮廿日に及んだといふ。以て驕奢の一端を窺ふことが出来やう。

【大堂・巨剎】 京都に相國寺を建て、更に東寺・延暦寺・興福寺等の金堂(本堂)を建立した。

【考察問題】 (一)義滿の大土木事業と同じく、信長は七層の天主閣ある安土城、秀吉は豪華雄大の桃山城、家光は金銀丹碧の美をこらせる日光廟の大土木事業をなした。權力至上主義のかかる時代に於ては、政權掌握には、何故かかる企てに出づる必要があるか。(1) *Might is right (Macht ist Recht)* は、權力至上主義の時代を象徴する標語である。この標語の意義如何。

● 僭上 これよりさき後小松天皇の應永元年(二一)五四年、義滿は將軍職を子義持に譲り、自らはのぞんで太政大臣に任ぜられた。武人の太政大臣は、清盛以來二百二十年間絶えて無かつたことだ。かくて彼は次第に威に驕り、その僭上は清盛にも過ぐる様になつた。即ち朝廷に出仕するや、公卿以下諸司百官皆常に階下に跪拜して之を送迎し、殊に應永三年九月延暦寺詣での時等は、長くも上皇の御幸に準へたといふのである。

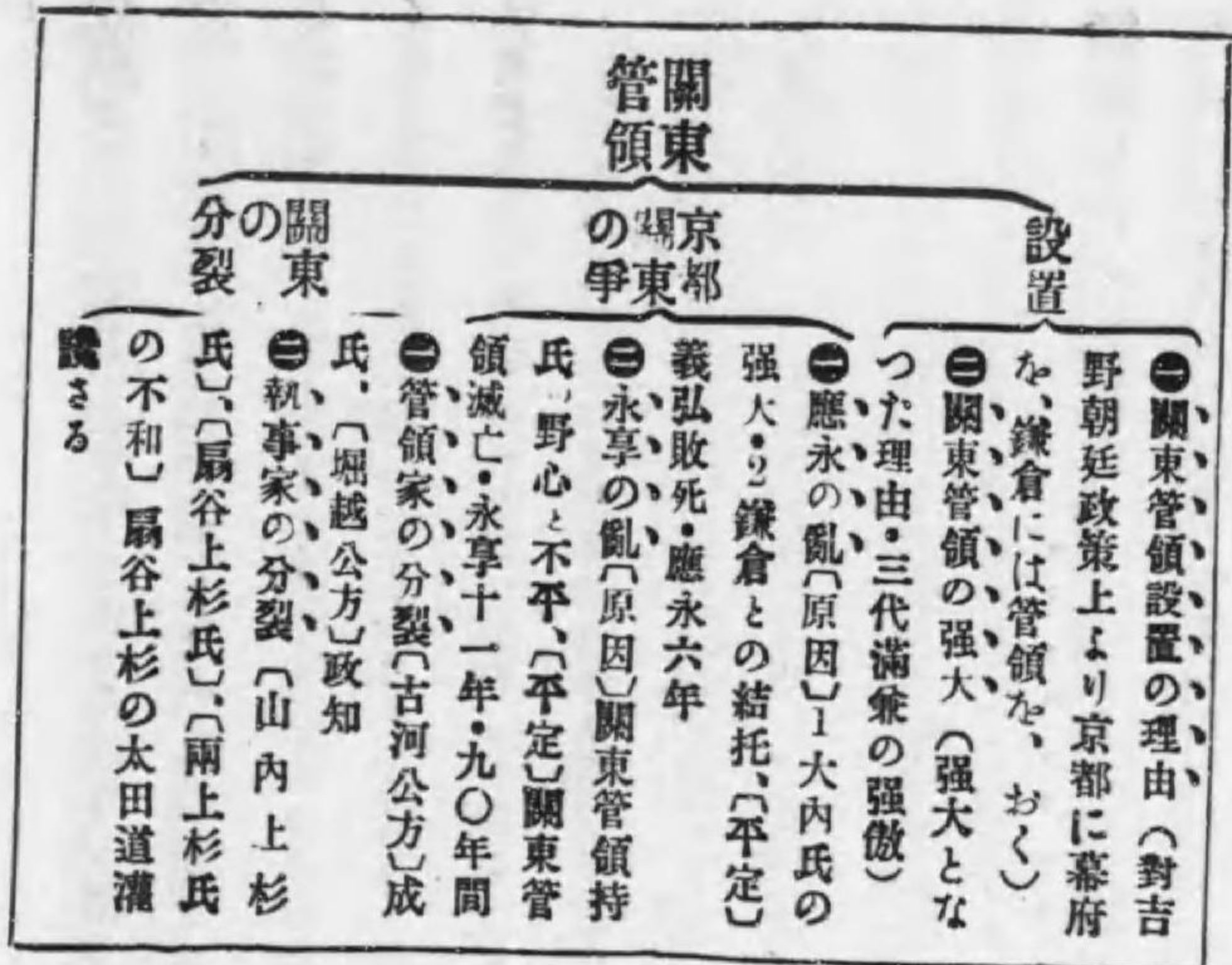
【考察問題】 當時はわが國と明國との交通が開けたが(詳しくは後章)、彼我往來の國書に、彼は「日本國王源道義」と自ら稱して、以て明主の鼻息を窺ふた。國內にては驕僭天皇にもする傲慢自尊の彼が、明主に對しては何故にかくも卑屈退嬰策をとつたか。理由を考察せよ。

【練習問題】 (一)足利義滿(高師)。(二)室町幕府の組織(陸士)。(三)三管領(高校)。(四)四職(海兵)。

### 第十三章 關 東 管 領

#### 關東管領の設置

● 關東管領設置の理由 抑々東國は武人勃興の源泉地、源家勢力の滋養地、加ふるに要害堅固の地、據りて以て天下に號令せんとする武將にとつては、實に絶好の根城であ



る。さればさきに、源頼朝は幕府を鎌倉に開き、京都には守護職をおいた。北條氏亦之に倣つて治所を鎌倉におき、京都には六波羅府を設けた。か  
るが故に源氏の舊業を再興せんとして起つた尊氏  
も、幕府は之を鎌倉に開かんことを切望して  
た。けれども彼にありては、何よりまづ吉野朝廷に  
對し奉る政策を考慮する必要があつた。遂に幕府  
を京都に開き、鎌倉には關東管領をおくのやむな  
きに至つた理由は、ここに存するのである。即ち、  
次子基氏を東下せしめ、上杉憲顯を執事として鎌  
倉におらしめた。

【考察問題】 さきに新田義貞が鎌倉を陥れたとの報を  
きくや、尊氏は逸早くも子義詮をして行きて此處に

居らしめた。何故尊氏はこの政策に出でたか。

●關東領管の強大 前にも述べた通り、關東は地の利を得てゐる。人の心を得易い。そこで基氏  
氏滿、滿兼等と相つづくに及び、次第に富強を重ねて來た。加ふるに代を重ねるに従つて、將軍家  
この血縁が漸く疎くなつたから、今や遂に將軍家の命令に服せず、自ら關東公方くわんとくほうを稱し、執事上杉  
氏をば管領くわんれいと稱せしめて、宛然えんぜん一大敵國の觀を呈するに至つた。

●關東管領と京都幕府との争 兩雄並び立つ可からず、鎌倉と京都とが、いつしかかくて相戦ふ  
に至るは、自然自明の歸結だ。即ち、一は應永おうえいの亂らんで、他は永享えいきやうの亂らんである。

●應永の亂 【原因】 (一)大内氏の強大 大内義弘は、吉野・京都合一の事の殊勳者であり、九州探  
題の援助者として成績めざましく、また明德の亂にも戦功を建てた。かくて中國・畿内きないに廣大な領  
土を有し、勢力頗る強盛、遂に將軍義滿の命に抗ふこと屢々であつた。(二)鎌倉との結託 時に  
管領滿兼は、かねて野心を抱いてゐたこととて、直ちに大内氏に呼應して叛旗を翻した。東西の  
兩大勢力が、首尾整然と、もしも京都を挾撃するこゝに成功したならば、まさに歴史の一大轉機  
だ。時に應永六年(二〇五九年)。

【平定】 義弘は兵を堺浦に屯して大に幕軍をなやました。加ふるに之に相應する各地の諸將少くなく、勢頗る猖獗を極めたが、やがて義満自ら兵を率ゐて來り攻むるに及び、敵する能はずして自殺した。亂後義満は、義弘の舊領を沒收して、之を有功諸將に分與し、また管領滿兼にも下野の足利庄を與へて心を和けた。

【考察問題】 (一)大内義弘兵を擧ぐるときや、各地の諸將は何故にかくも討幕の氣勢を示したか。當時の権力至上主義の風潮より之を考察せよ。(二)義満は何故に大舉鎌倉討伐の軍を起さなかつたか。次の項目によりて考察せよ。1 鎌倉の強大、2 當時の権力至上主義的風潮

●永享の亂 【原因】 關東管領持氏の野心と不平、四代將軍義持薨じて嗣がない。關東管領持氏は、是に於て入りて將軍たらんことを希んだが、將軍義持の弟義教(義圓)が迎へ立てられたから、彼は甚だしく不平であつた。

【平定】 關東管領の滅亡、執事上杉憲實、屢々持氏の不心得を諫めたけれどもきかない。反つて憲實を以て、京都と相通するものであらうと疑ひ、兵を募して之を攻めた。されば將軍義教は、直ちに持氏征討の論旨を請ひ、大軍を東下せしめて鎌倉を攻め、遂に持氏を自及せしめた。時に

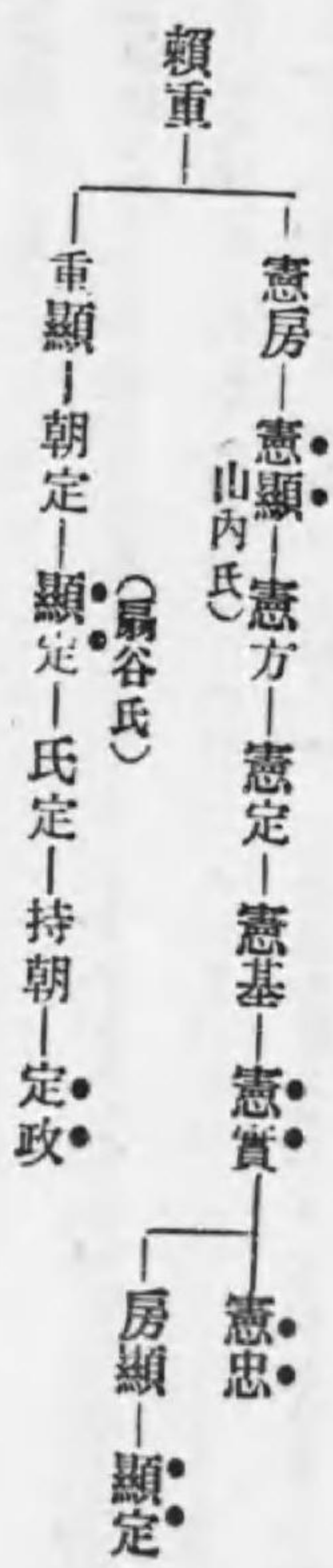
永享十一年(二〇九九年)。之を永享の亂と云ひ、初代基氏より九十年にして關東管領ここに滅亡し、同時に關東における足利氏の勢力も地に墜ちてしまつた。

【義教がもと信てあつた理由】 三代將軍義満に五人の男子あり(義持・義嗣・義教・尊滿・義昭)。長子義持が將軍職を襲いだ外、他の四人は悉く出家したが、これ將軍職繼承問題の争を未然に防ががための政策に外ならない。出家の動機が、單に必ずしも信仰にのみあると考ふる謬見を改めよ。

關東の分裂 ●管領家の分裂 【古河公方】 管東管領持氏の滅びた後、執事上杉憲忠(憲實の子)は、持氏の遺子成氏(永壽王)を迎へて、鎌倉の新主と仰いだ。然るに成氏は、執事憲忠を以て父の仇とし、攻めて之を殺したから、幕府は上杉氏を援けて、成氏を追ひ下總の古河に走らしめた。之を古河公方といふのである。

【堀越公方】 ここに於て關東にはまた主なき有様となつたから、上杉氏は、將軍義政の弟政知を迎へ、之をして伊豆の堀越に居らしめ、古河に對抗せしめた。之を堀越公方と云ひ、かくて關東管領家が兩々相對峙することになつた。

●執事家の分裂 【山内上杉氏】 初代關東管領持氏の執事上杉憲顯の子孫は、代々居を鎌倉の山



内に定めてゐたので、之を  
山内上杉氏といふ。

【扇谷上杉氏】 然るに同じ  
上杉家の他の一族に顯定と

いふ人があつた。其子孫は代々居を鎌倉の扇谷に定めてゐたから、之を扇谷上杉といふ。

【兩上杉氏の不和】 山内・扇谷兩上杉氏は、久しく相對立して不和であつた。殊に古河・堀越兩公方の對立した頃は、山内上杉家にては家宰長尾昌賢卒して、勢甚だ振はなかつたのに反して、扇谷上杉家にては、賢臣太田持資(入道道灌)出で、家運日に盛んであつたから、山内顯定は、ひそかに扇谷定正を煽動し、太田持資を讒して殺さしむる等、醜い術策の限りを盡した。ああ權力至上主義の罪なる哉。道義全く地に墜ちて、君臣相食み、一族相闘ぐことの何ぞ甚だしき。

【太田道灌の江戸城】 太田道灌は江戸城を築いた。けれどもその頃の江戸は、わが庵は松原つゞき海近く、富士の高嶺を軒端にぞ見る」といふ彼の歌で知られる通り、まだまだ至つて寂しいものであつた。人口二百十七萬、音に邦國の雄たるのみならず、同時に世界の偉觀として、市況賑々乎たるわが大東京市の描筆

時代が、實にこゝであつたとは思へない位であつた。

【練習問題】 (一)關東管領(專檢)。 (二)永享の亂(高師)。 (三)古河公方(高師)。 (四)堀越政知(高校)。 (五)

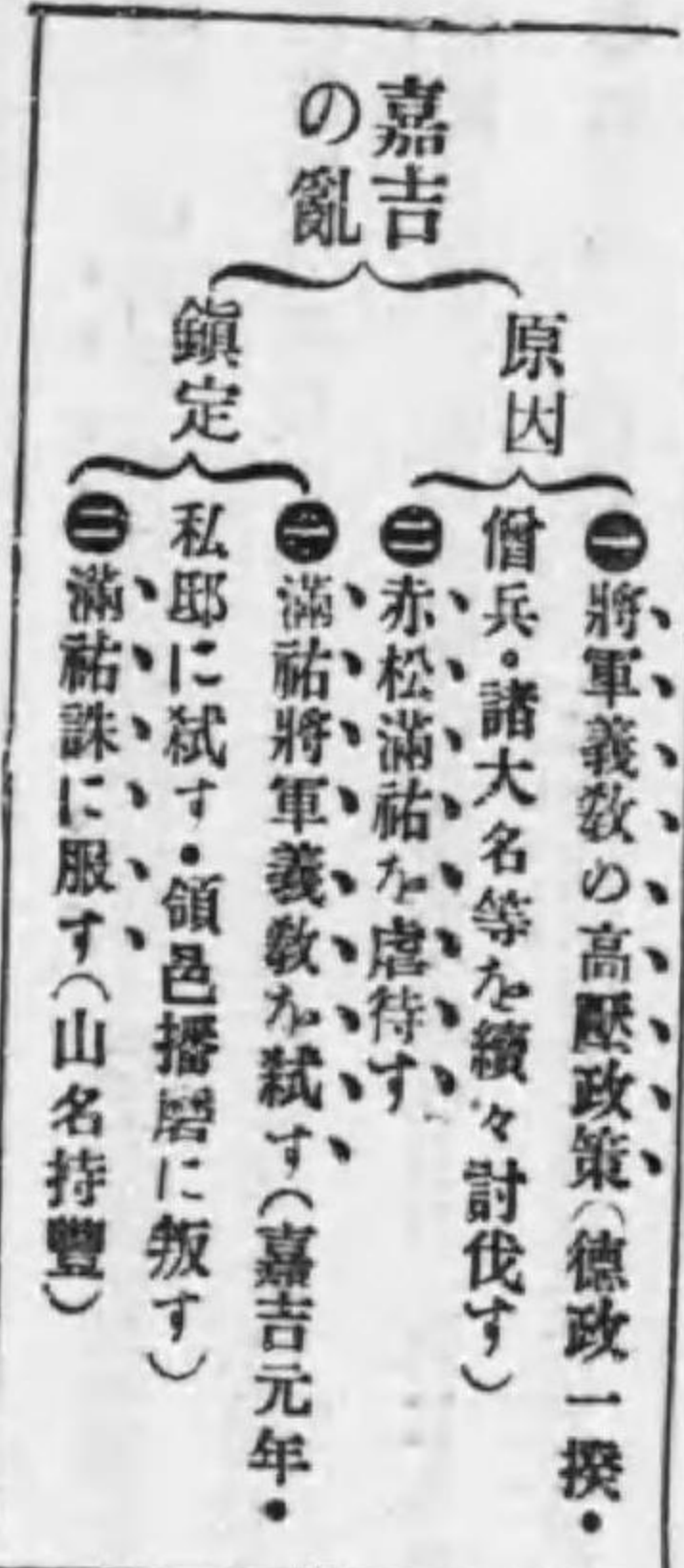
山内上杉氏

### 第十四章 嘉吉の亂

原因 ●將軍義教の高壓政策 第六代將軍義教は、性頗る剛毅果斷、從來の優柔政策を改めて連りに幕威の振興に力めた。即ち或時は畿内(山城・大和・河)及び近江に起つた徳政一揆を平け、或時は南都及び北嶺の僧徒の横暴を挫いた。殊に強驕な鎌倉を仆すや(永享の亂參照)、意漸く驕り、翌永享十二年には、一色義實・土岐持頼の兩將を殺した。されば諸將の義教の高壓政策を怨む者は、日に日に多くなつて來た。

【徳政一揆】 徳政とは元來仁政の義にして、課役・田租を免除し、或は大赦を行ひ、或は物を百姓に賜ふことを云つた。然るに足利時代の徳政は、之と全く内容を異にした。いはば仁政でなく惡政であり暴政であるのだ。抑々足利時代は、幕府も將士も概して貧乏で、大抵は有産平民階級から錢を借りてゐた。勿論、無

産平民階級(細民)が亦借銭の持主であつたことは、何時の世にも變りはない。徳政令が一度び出るや、すべて借銭の持主は、それが幕府自身であらうと、將士であらうと、無産平民階級であらうとを問はず、何れも皆返済の義務を殆んど免除される定めである。だからそこに社會上山々數の問題が起るのだ。即ち有産平民階級は、士民階級の横暴を叫びて反徳政の大運動を起し、無産平民階級は、徳政歡迎或は徳政強請



の大氣勢を擧げ、加ふるに士民階級は、之等の一揆を壓服しやうとして起つから、いはば三つ巴的な社會の大紛亂を現出するのである。

●赤松滿祐を虐待す 時に室町幕府創業の功臣赤松則村の裔に滿祐といふ人があつた。備前・播

磨・美作三國の守護として威望高く、力を盡して義教に奉仕した。然るに義教はこの滿祐を喜ばない。滿祐の一族赤松貞村を嬖寵し、遂に滿祐の領地を削つて、之を貞村に與へんとするに至つた。だから滿祐は流石に憤つた。さうして斷然叛意を決した。

鎮定 ●滿祐、將軍義教を殺す。嘉吉元年赤松滿祐は、結城の亂の平定を祝すに稱して、將軍義

教を京都なる己が私邸に招き、決然起つて刺殺し、直ちに郷國播磨に歸つて叛旗を翻した。時に幕府は諸將を會し、討伐の人を選ばうとしたけれども、何れも躊躇し逡巡して敢て進まず、繼に赴いて故將軍の遺骸を請ひ得たのみだといふ。何といふ腑甲斐なさぞ。道義に乏しい足利の世は、ここにまた新しく泰平柔弱の風を加へた。足利氏の崩壞、群雄の蜂起、戰國大動亂の時代等と、風雲の漸く急なるものあるを豫感せしめるではないか。

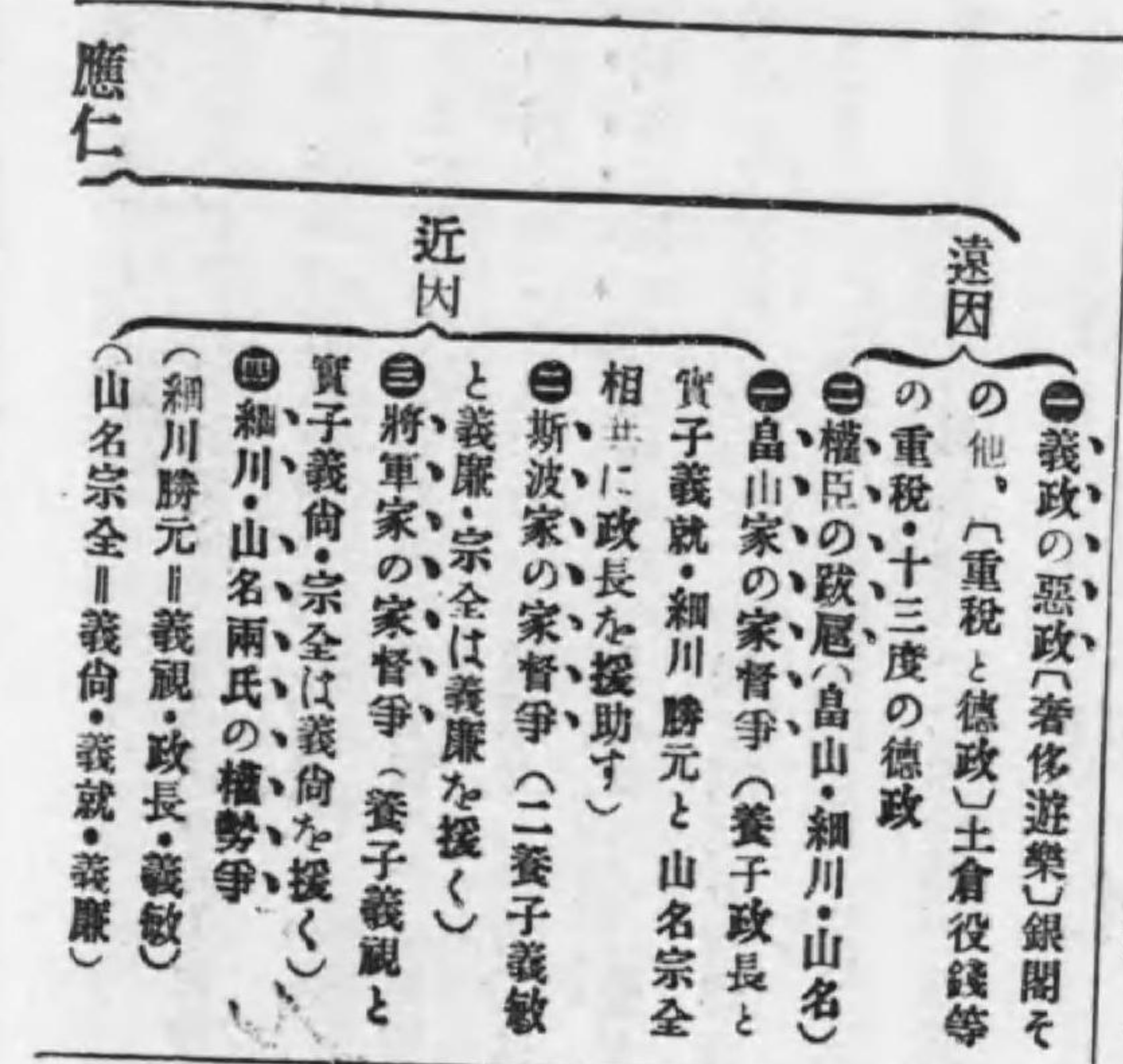
●滿祐誅に服す 滿祐征討のことは山名持豊が之を引き受け、まもなく白旗城を攻落し、滿祐の首級を得て凱旋した。さて持豊は明徳の叛將山名氏清の裔。されば絶えて久しく振はなかつた山名氏は、ここに再び舊勢を盛り返し得た譯である。

【練習問題】 嘉吉の亂(高師)。(二)赤松滿祐(高校)。

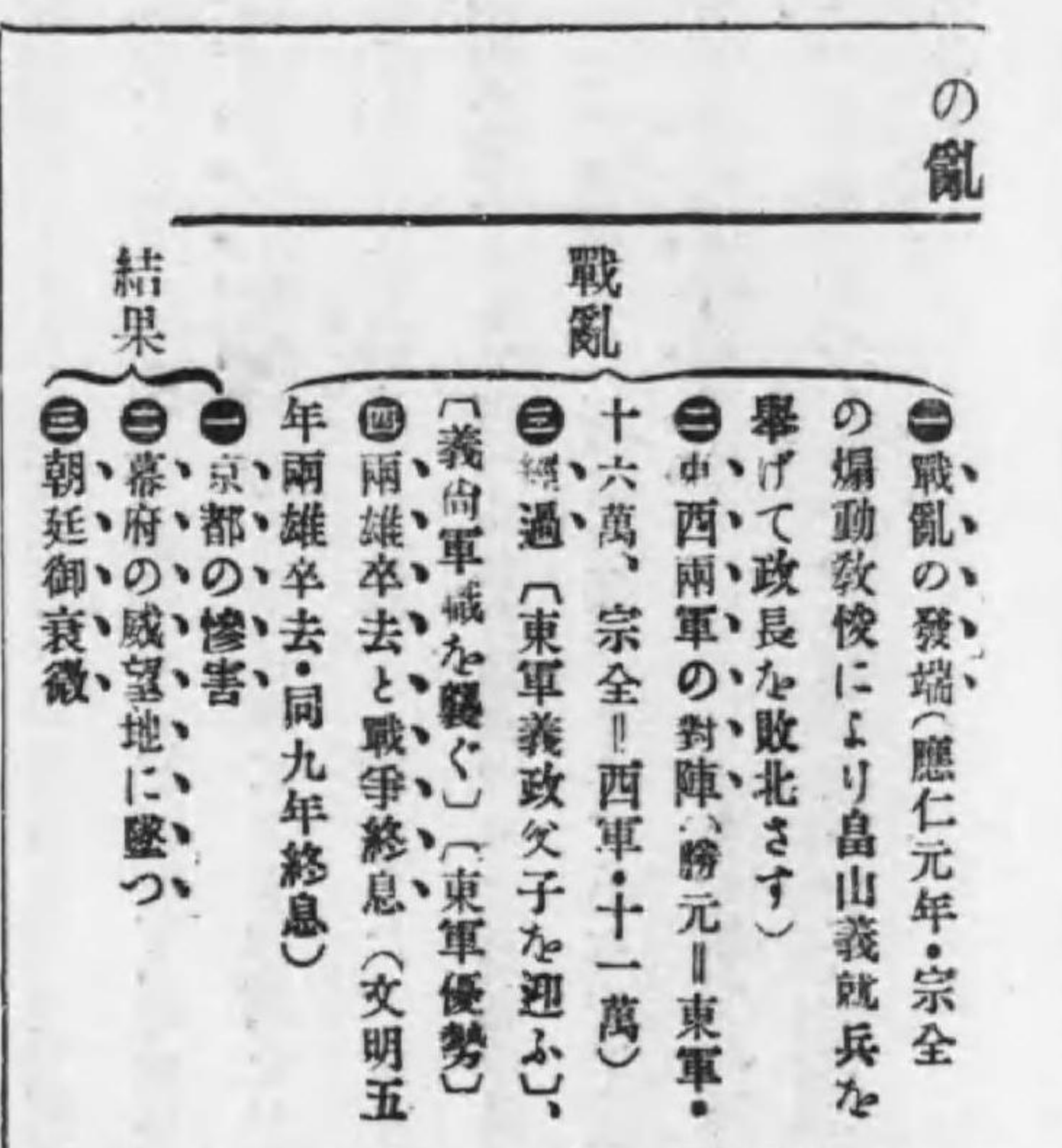
### 第十五章 應仁の亂

遠因 ●義政の悪政 【奢侈遊樂】 第八代將軍義政は、その初政頗る見る可きものを表はした。されど漸く政に倦むや、祖父義滿に倣つて盛んに奢侈遊樂を擅にした。即ち屢々彼は八幡に詣で

た。東大寺に詣でた。洛の内外に花を尋ね紅葉を愛でた。或は競ひ請はるがままに、幾十度か諸將の邸第に遊んだが、殊に義滿の金閣に倣つて結構善美の銀閣を建てた。時恰も大飢饉あり、加ふるに悪疾流行し、死者路に充つるにも拘らず、只管彼は工事を續けたのである。長くも後花園天皇が、深く歎慮をなやまし給ひ、「殘民爭探首陽薇、處處開爐鎖三竹扉、詩興吟醉春二月、滿城紅綠爲誰肥」の詩を賦して、義政をお戒めになつたことを聞くと、吾等誰か恐懼し奉らないものがあらうか。



【重税と徳政】 驕奢の費用は勿論人民の負擔だ。義滿以來さなきだに疲弊せる人民が、或は土倉役錢、或は段別錢、或は棟別錢、はては酒税等、度重ねての重税に苦しめられ、遂には徳政令にまで泣かされる。殊に徳政令は義政のお得意手段で、その公布實に十三度に及んだ。怨嗟の聲四方に滿つるも理だ。大戰亂の胚種は、かかる間に不知不識得て醗酵されつつあるものだ。



【考察問題】 現今のわが政府は、勿論、質屋税・倉庫税地租・戸別割・酒税等の總てを徴収しておる。然るに、手前で、その公布實に十三度に及んだ。怨嗟の聲四方に滿つるも理だ。大戰亂の胚種は、かかる間に不知不識得て醗酵されつつあるものだ。

●權臣の跋扈 かくて幕政は全く紊亂した。加之將軍義政は性優柔、人を容るるの器でなかつた。されば諸權臣の横暴跋扈愈々甚だしく、就中畠山持國・細川勝元・山名宗全(持豐)三氏は、まさに



鼎立して攻争相降らなかつた。

近因 ● 畠山家の家督争

畠山持國は子なきため、はじめ姪政長を養子に迎へて嗣とした、然るにやがて男義就が生れた。さうして政長が廢嫡されて、義就がこれに代つた。即ち人情に囚はれて、義理を忘れたのだ。問題はさうした處に起る。

【考察問題】 この相續争の時、細川・山名の兩權勢家は、相共に養子政長を援助したのであるが、それは何故であらうか。三雄の權勢争ひといふ點から考察を進めよ。

● 斯波家の家督争 時に斯波家にも亦嗣子が絶えた。されば一族中より義敏を養つて嗣としたが、やがてまた義廉をも迎へて嗣とした。かくて二養子間の睨み合ひだ。

【義廉が養子として迎へられた理由】 (一)最初の養子義敏は、將軍義政の怒に觸れ、一旦京都に追放された。そこで義廉が、二度目の養子として、この留守中に迎へられた。(二)義廉の妻は山名宗全の女である。

● 將軍家の家督相續争 將軍家でも亦家督相續の争が起つた。即ち義政在職二十年、齡已に卅にして一子も無かつたので、出家してゐた弟義尋を召して嗣とした。勿論はじめ義尋は、當時家督相續の争頻々たるに鑑みて、固辭して容易に之をうけなかつた。けれども強いて、「我れ他日若し

男子を生まば、襁褓の中より之を併となすべし。」と望まれては、素氣なく拒む術もない。遂に還俗して義視と名のり、細川勝元に輔けられて今出川の邸におるこゝまなつた。然るにサタンが悪戯なる哉。義政の夫人富子はやがて男義尙を生んだ。子故に迷ふは親心の常。夫人富子は、いとしわが子を、生れ乍らに世捨人たらしめるに忍びず、遂に山名宗全に書を與へて、養子義視の廢嫡と實子義尙の襲職とに努力する様云ひ含めた。

● 細川・山名兩氏の權勢争 細川が世か、山名が世か。之は當時を象徴する一つの言葉であつた。されば山名氏が公然義尙を援ける事となると、細川氏も勢ひ義視を援けざるを得なくなつた。また山名氏が畠山義就(實子)及び斯波義廉をひきて援とすると、細川氏も畠山政長(養子)及び斯波義敏をひきて援とせざるを得なくなつた。かくて天下は自ら、互に雌雄を決すべき兩大勢力に相岐れたのである。

● 戦亂の發端 御土御門天皇の應仁元年(一一二七年)、畠山家にて、義就と政長とが兵を以て相争ふた。然るに畠山家のこの争は、もともと山名宗全の煽動致、懷に出づるもの。されば將軍義政も、「義就・政長各々手兵を以て相争ふべし。諸將は斷じてその何れをも援けては相成らぬ。」

と殿命して、争の大事に至る事を未然に防がうとした。けれども將軍のこの命令が遵奉される位なら、はじめから大戦亂は起るまい。宗全の義就援助、従つて政長の大敗によりて、應仁の大戦亂は、完全にここに點火されたのである。

●東西兩軍の對陣 されば勝元も拱手傍觀する能はず、檄を飛ばして兵を募せば、來り集るもの總勢凡そ十六萬。室町幕府の東に陣する。ついで宗全も更に諸國に兵を募し、總勢凡そ十一萬を得て、室町幕府の西に陣する。かくて今や京都は、その全市をあけて修羅の巷に化せんとしておる。色を失ふて逃げ惑ふ市民、周章狼狽聲を枯らして戰鬪禁止の命令を叫ぶ將軍義政。ああ室町幕府崩壞の日が目睫の間に迫り來つたことを思はしめる。

●經過 【東軍義政父子を迎ふ】 細川勝元はその一旦起つや、遙かに山名宗全を凌ぐ權略家であつた。されば彼は幕府の東に陣するや、逸早くも將軍義政及び子義尙を迎へ奉じた。日頃輔導して來た義視(養子)を捨てて、翻然として義尙(實子)を迎へた彼の術策。吾等はその術策中にも應仁の亂因の真相を見出し得るではないか。(後文参照)

【義尙軍職を襲ぐ】 將軍父子を軍門に迎へ乍らも、戦況は概して東軍に利あらず、常に西軍の壓

迫を蒙りがちであつた。然るに拘はらずこの間に、將軍義政は養子義視を廢して、實子義尙を嗣とすることを達成し得た。戦捷に歡ぶ西軍の奉ずる義視が廢されて、戦利なき東軍の奉ずる義尙が軍職をつぐ。一見それは何さいふ不合理なことだらう。而して吾等はその不合理中にも亦、應仁の亂因の真相を見出し得るのである。(後文参照)

【東軍優勢】 概して西軍が優越を示してゐた戦況も、中頃以後は全然局面一轉、東軍の旗色著しく揚るに至つた。戦況は我に善く、將軍父子は投じて我に在る。このまま進めば天下はまさしく細川がものだ。

【細川が術策及び義尙の襲繼に表はれた應仁の亂因の真相】 (一) 應仁の亂の中心原因は、細川・山名兩氏の權勢争に在つて、決して將軍家の家督争にはなかつた。だから勝元は逸早くも將軍父子を迎へたのだ。正直にただ、日頃輔導して來た義視を、依然として奉ずる様では、細川氏の勝利がまづ怪しくなるではないか。(二) 應仁の亂の中心原因が以上の如くであるからこそ、戦局の推移如何に拘らず、將軍職は義尙に歸した。養子が廢されて實子が嗣ぐことは、何としても最も自然な歸結と云ふべきではないか。

●兩雄卒去と戦争終熄 【兩雄卒去】 かかる間に、文明五年二月、宗全は陣中で卒した。時に年七

十。然るに年まだ四十四の勝元も、同年五月に卒去した。かくて戦亂は自ら終熄しゆうせきに導かれる。歴史に及ぼす「偶然」の力も、或る範囲内では、必しも否定し盡すことが出来ないかも知れぬ。

【戦争終熄】 遮莫しちもく、頭首を失つた東西兩軍は、それでも尙ほ戦を續けた。けれども頭首なしのこの戦の進行は、譬たとへば、プロペラを失くした飛行機の情性的進行だ。加ふるに京都の争亂は地方に波及して、諸將士は故國を顧みるの急に迫られた。さればまづ山名軍退き、次に細川軍去りて、文明九年（一二三七年）、愈々完全に大戦の幕が閉ざされた。開戦以來實に十一ヶ年だ。

結果 ●京都の惨害 戦場となつた京都は、見るからにいたましい兵火の惨害を蒙かうつた。宮殿・社寺・民家・累代の寶器・文書等殆んど悉く烏有ういうに歸し、さながら荒野の如く、「汝なや知る都は野邊の夕雲雀ゆうのひばり、あがるを見ても落つる涙は。」の歌をしみじみと味ははせる。實に文化の大破壊だ。文化への大放火だ。文化を停頓ていどんせしめ逆行せしめた最大の罪惡だ。

●幕府の威望地に墜おちつ 應仁の大亂は終始幕府の無能の暴露ばくろだつた。されば之より、天下漸く幕命を奉ぜず、各がじし所在に割據して、遂に群雄割據時代を現出するに至つた。

●朝廷の御衰微 されば恐多くも朝廷はいたく御衰微ごせいびあらせ給ひ、公卿等は住むに家なく、喰ふに

食なく、何れも離散して大名に倚るの餘儀ない状態となつた。（詳しくは後章参照）

【練習問題】。(一)應仁の亂(陸士)。(二)徳政(高校)。(三)畠山政長(高師)。(四)山名宗全(高校)。(五)細川勝元。

## 第十六章 室町時代の文物

概観 室町幕府創立の當時は、人々は皆戦亂の渦中に投ぜられて、文學・美術・工藝等を顧みる餘裕いゆうを持たなかつた。けれども次第に世の秩序は恢復して行つた。加ふるに尊氏以下代々の將軍、多くは文雅ぶんがにして、殊に義満・義政の如きは、多藝好事殆んど爲さざるなきの有様であつた。されば鎌倉以來絶えて久しく振はなかつた文運も、ここに漸く復活の曙光しゆくわうを表はして來たのである。

佛教 ●禪宗 武士階級には一般に禪宗が行はれた。こゝ鎌倉時代と同じい。尊氏はその熱心なる歸依者の一人にして、僧疎石そうそくし(夢窓國師)のすすめによりて天龍寺を建立し、後醍醐天皇の冥福めいふくを祈り、殊に義満は、身軍職に在りながら、袈裟けさを着け、また相國寺を建立した。かの五山ござん・十刹じっしつの制の整つたのも、實にこの時代のことである。



の會を催し、或は書畫・珍寶を蒐集し、また庭園に山水の美を聚むる等、文雅風流に至らざるはなかつた。かの東山の銀閣は、實にそれらの結晶とも云ふべく、庭園は當時の名人相阿彌の手に成るもの、内部を飾る彫刻・繪畫・珍寶も亦當代第一流の名匠名工が心血をそそいだものである。されば將軍義政の時代は、實に足利時代美術工藝の最頂點を示しておる。

【考察問題】 (一)本邦美術史上、足利時代が東山時代の名を以て稱ばれる理由如何。(二)佛教の流行は何故に美術工藝の進歩を促すか。

●繪畫 鎌倉時代の繪畫は濃艶であり雄渾であつたが、この時代のは概して淡泊であり閑雅であつた。蓋し鎌倉時代は、その畫風は未だ平安時代のそれを完全に脱却しない時代であり、その武人は只管實質剛健を尙んだ時代であるが、この時代は、禪味・茶味萬能の時代である、或意味に於て軟弱化された武士の時代であるからである。明兆(佛畫・雪舟(山水畫)・狩野元信(狩野派の祖)・土佐光信(大和繪の中興者)等は、何れもその名古今に謳はれる名家にして、その他周文・小栗宋滿・曾我蛇足等も一世に名高い。

【明兆】 淡路の人。幼にして京都東福寺の僧となつたが、元來嗔ふ事より畫くが好きな少年だ。お経などに氣の向はう筈がない。危く途に放逐されやうとまでした。けれどもやがて殿司として用ゐられ、傍らその才を磨くことを許された。彼の別號兆殿司の名は、ここに起つてゐるのである。

【雪舟】 備中の人。同國のさる寺に僧となつたが、これも讀經が手につかず、ために屢々柱に縛りつけられて虐げられた。處がある日のことだ。藥籠頭に湯氣立ち騰る御師僧が、戒の繩を解きに行くと、件の小僧の足許に、一匹の鼠が楽しさうに遊んでゐる。そしてその鼠が、畫いた鼠だ。小僧先生、柱に縛られながら、板の間に落ちた自分の涙を、足指の先で弄んでゐる中に、いつしか立派な鼠となつたのであつた。だから御師僧驚くこと限なし。これから小僧の才を磨かせたといふ話だ。小僧長じて雪舟と號し、山水畫にその名を轟かした。

【土佐光信】 大和繪の中興者。彩畫を以て妙とし、その畫く所、温良にして細密、濕潤にして清秀、山水・人物・鳥獸・花木何れとして妙趣を窮めざるなく、實にその技神に入つてゐたのである。

【狩野元信】 雪舟が墨繪を以て、光信が彩畫を以て、各々その靈腕を振つたのに對して、獨り元信は彩墨共に美を盡し、即ち和漢を折衷して、新に一派狩野派を開いた。或時その畫數幅を明に送つたところ、明の大畫家直ちに元信に書を送つて曰く、「われ先生の繪畫を見て、その筆蹟の妙に感ず。一木一草と雖も放

心する所なし。實に日本五百年來曾て見ざる大作なり。われ貴國に遊ぶを得ば、必ず先生の弟子たらん。」と。以て一斑を窺ふに足るだらう。元信はまた古法眼元信とも云ふ。

●**髹漆** 髹漆の術も大に進歩し、殊に蒔繪・高蒔繪等は精巧を極め、曾ては師であつた支那すら、今は反て我に學ぶ程となつた。蓋し繪畫の進歩と相伴ふたものであらう。

●**彫刻** 佛像彫刻は到底鎌倉時代に及ばない。それはこの時代の佛教が禪宗にして、従つて萬事質朴簡素を旨とするからである。されど金屬彫刻(刀劍等の裝飾用)は、何としても武家時代だ、鎌倉時代同様頗る進歩し、後藤祐乘等の古今の名手をいだった。また猿樂の流行に伴ふて、之に用うる假面の製作及びその彫刻に多くの名家をいだったことも、注意すべきことである。

●**窯業** 茶道の流行は、自ら陶磁器の需要を來し、かくて窯業の進歩を促した。山田祥瑞(祥瑞五郎太夫)は、當時第一等の名工にして、明に渡つて大にその技を修め、歸朝後磁器の製法を傳へ、また肥前伊萬里に窯を開いて伊萬里焼の祖となつた。

●**學問教育** ●**概説** 【武家及び公卿】 尊氏以下代々の將軍は、武と共に文をも重んじた。されど如何せん、うちつづく戦亂の世の悲しさ。よし志あるものと雖も修學の機を得る能はず。かく

て北畠親房の神皇正統記を著はせる、一條兼良の博識なる、上杉憲實の金澤文庫及び足利學校を再興せる、之等がただ當時の公卿・武家を通じての僅かなる異彩であつた。

【僧侶】 只此の頃、僧侶のみは學問教育の事に親しんだ。されば文筆の業はいつしかその手に歸し、或は幕府に召されて政治に參劃するものあり、或は入明使となりて支那に赴くものあり、氣焰頗る萬丈なものがあつた。殊に京都及び鎌倉の五山は、學問教育の中心として、所謂五山文學の名をすら作りだした。夢窓門下の義堂・絶海、應仁の亂の前後に在世した一休・周鳳等は、當時に名高い學者である。

【金澤文庫】 武藏國久良岐郡金澤村に在り、北條義時の孫實時の創設にかかる。今は全く稻田と變じ、當時を偲ぶよすがもないが、近年までその地を文庫ヶ谷と稱してゐたといふ。

【足利學校】 その遺跡、今尙ほ下野國足利町に在る。抑々この學校の創設者としては、人或は小野篁(平安)をあげ、或は足利義兼(鎌倉時)をあげ、又は足利尊氏をあげる等、諸説紛々たる状態であるが、足利義兼説が最も有力である。而して上杉憲實は、その學校の再興者にして、即ち、多くの書籍を納めて、一般の講讀に便利を與へ、また子弟の教育に便利を與へた。いはば完備した圖書館兼學校とした。

● 謠曲 此の時代に始めて作られたものに謠曲がある。その節譜に今様の歌ひ振りを取り入れ、その文章に古文學の名文句を無数に取り入れてあるから、頗る時代の人に適合してゐる。加ふるに當時は猿樂全盛の時代である。されば謠曲の流行は實に目ざましく、わが文學史上の暗黒時代(戦國時代を中心として)に於て、只獨り燦然たる光彩を放つてゐる。

● 和歌と連歌 【和歌】 和歌は鎌倉時代と同じく頗る盛んであつた。かの徒然草の兼好法師は、頗阿・淨辨・慶雲を併せて、和歌の四天王といはれ、將軍家にては義政・義尚、武人にては細川藤孝(幽齋)・太田道灌等何れも名高い。また征東將軍宗良親王も斯道の達人にましまし、憂國慨世の感、一に之を詠歌に表はされたのである。

【連歌】 されどこの時代、更に著しい流行を見たのは連歌である。宗祇・宗鑑等はその最大の名手にして、その他諸大名にして之をよくする者も決して少くなかつた。

【連歌】 一首の歌を上下兩句に分ち、兩人にて合作したものを連歌と云ふ。日本武尊が甲斐酒折宮にて、「にひばり筑波を過ぎて幾枚かねつる」と上の句を讀み給ひし時、御火燒の老人が「かかなべて夜には九夜日には十日を」と下の句を連れたのは、我國連歌の起原だと傳へられる。また前九年の役、衣川櫛留りて安

倍貞任逃れんとする時、源義家之を追ひつつ、「衣のたてはほころびにけり」と下の句を詠ひしに、貞任直ちに答へて「年を經し糸の素れの苦しさに」と上の句を連れた美談も、立派な連歌的問答である。されど連歌が一つの純藝術として、また遊戯として發達したのは、この足利時代を以てはじめとする。實にこの時代は、連歌の會を催し、衆互にその才を競ふといふ盛況であつた。

また十度の別れをぞする(紹巴) 八重櫻一重はさきに散りそめて(紹宅)。  
心苦しき月をこそ待て(紹巴) 人知れず肌は結ぶいはた帯(紹宅)。

● 風俗 武士の衣服は、常服として烏帽子・素襖・袴を用ゐる、儀式用としては直垂を用ゐた。

また後には肩衣・半袴をも用ゐるに至つたが、之即ち上下の起原をなすものである。

● 家屋 禪刹の影響をうけて、縮紳の邸宅は多くは書院造となつた。即ち立關・書院・床の間等を設けたものであつて、現代のものに餘程接近して來たのである。

【書院造の特徴】 1 立關を設けたこと。2 書院を設けたこと。3 床の間を設けたこと。4 格子を廢して障子及び兩戸を用ゐたこと。5 従來は只客室及び主人の席等のみ疊を敷いたが、今や殆んど屋内の全室に敷き詰める様になつたこと。

●遊戯 最も盛んに流行したのは猿樂である。また點茶・聞香・插花等も中々盛んに行はれた。

【猿樂】 謡に合せて能を舞ふもの、それを猿樂といふ。當時の人々の猿樂に對する熱狂は素晴らしいもので、將軍以下諸大名殆んど皆之を習ふた。地味で趣味なこの遊びは、華やかな各種の宴樂よりも、遙かに當時の人の心の琴線にしつくりしたと思へる。觀世・金春・寶生・金剛は猿樂の四流派である。

【聞香】 沈香・麝香等數種の香を合せ、之を焚き、以て合劑の深淺及び厚薄等を論じて輪廻を争ふものである。また數人相會し、互に各種の香を焚き、その何香なるやを判別し合つて輪廻を争ふ方法もある。戦亂殆んど間斷なき當時に於て、之はまた何といふ暢氣な遊び事だらう。

【練習問題】 (一)室町時代の美術工藝(高師)。(二)室町時代の學問教育(高校)。(三)明兆(美術)。(四)雲舟(高校)

### 第十七章 足利氏の季世

幕府の衰微 ●細川氏の専權 第七代將軍義尚は、性甚だ聰明、夙に幕威振興の雄圖を抱いてゐたが、惜むべし僅か廿五歳にして、而も嗣なくして薨じた。かくて義尚について義手が立つた。

更に義澄・義晴等と相襲いだ。けれども何れも凡庸の徒であつた。加ふるにこの機に乗じて、管領細川政元(勝元)及びその養子高國は、或は只管私利私慾をはかり、或は將軍の廢立を行ふ等、思ふがままに幕府を攪亂した。さなきだに此の頃振はない幕府だ。どうして衰頹の淵に衝き進められずしてゐるやう。ああ足利氏は季世だ。



●細川氏の専權 (義植・義澄・義晴諸將軍・政元高國父子) ●三好氏の専權 (元長は主高國を殺す・元長の子長慶は將軍義晴を廢して義輝を擁立す) ●松永氏の専權 (久秀・主家凌駕・義輝を廢して義榮を擁立) 戦國時代の現出

●松永氏の専權 やがて三好氏の臣松永久秀、更に主家を凌ぎて威福を弄し、正親町天皇の永祿八年(二二二五年)、遂に將軍義輝を殺して義榮を迎立した。かくて足利氏の命脈は、その滅亡に



向つて、今や加速度的に進みだした。ただ臨終の少しでも安穩ならんことを希ふばかりだ。  
**皇室の御衰微** 此多年の争亂の間に、後柏原・後奈良・正親町三天皇相ついで世を知ろしめし給ふた。然るに當時は、幕府はその威權地に墜ちて、あれごもなきが如く、諸國は爪牙を磨く武將によりて、争奪の巷と化されてゐた。さればこの禍はかしくも朝廷にまでも及び、幕府よりの献金は全くとだえ、諸國の御料所は武人に楯領され、ために日常の供御、皇室の御修理等すべて意に任せ給はず、御即位の大禮、御大葬の御儀等すら、寺院或は武將の献金によりて、ただ纒にとり行はせられる程であつた。

【後柏原天皇】 後柏原天皇は、御即位のはじめ、まづ、御父君後土御門天皇の御大葬の御費用に窮し給ふた。畏くも崩御後四十餘日の後、はじめて御玉骸を泉涌寺に葬り給ふたと聞く時、御衰微の程に誰か泣かない者があらうか されば天皇即位の大禮等は、中々意に任せ給はず、廿二年の後、三條西實隆の奔走により、本願寺の献金を得て、纒に擧げさせられたと申すのである。

【後奈良天皇】 後柏原天皇崩御しまして、後奈良天皇位に即き給ふ。この天皇の御時も、先帝御大葬の儀は、幕府の献金によりて、纒かながらもとり行はせられ得たが、御即位の大禮は容易に之を擧げさせ給ふ能は

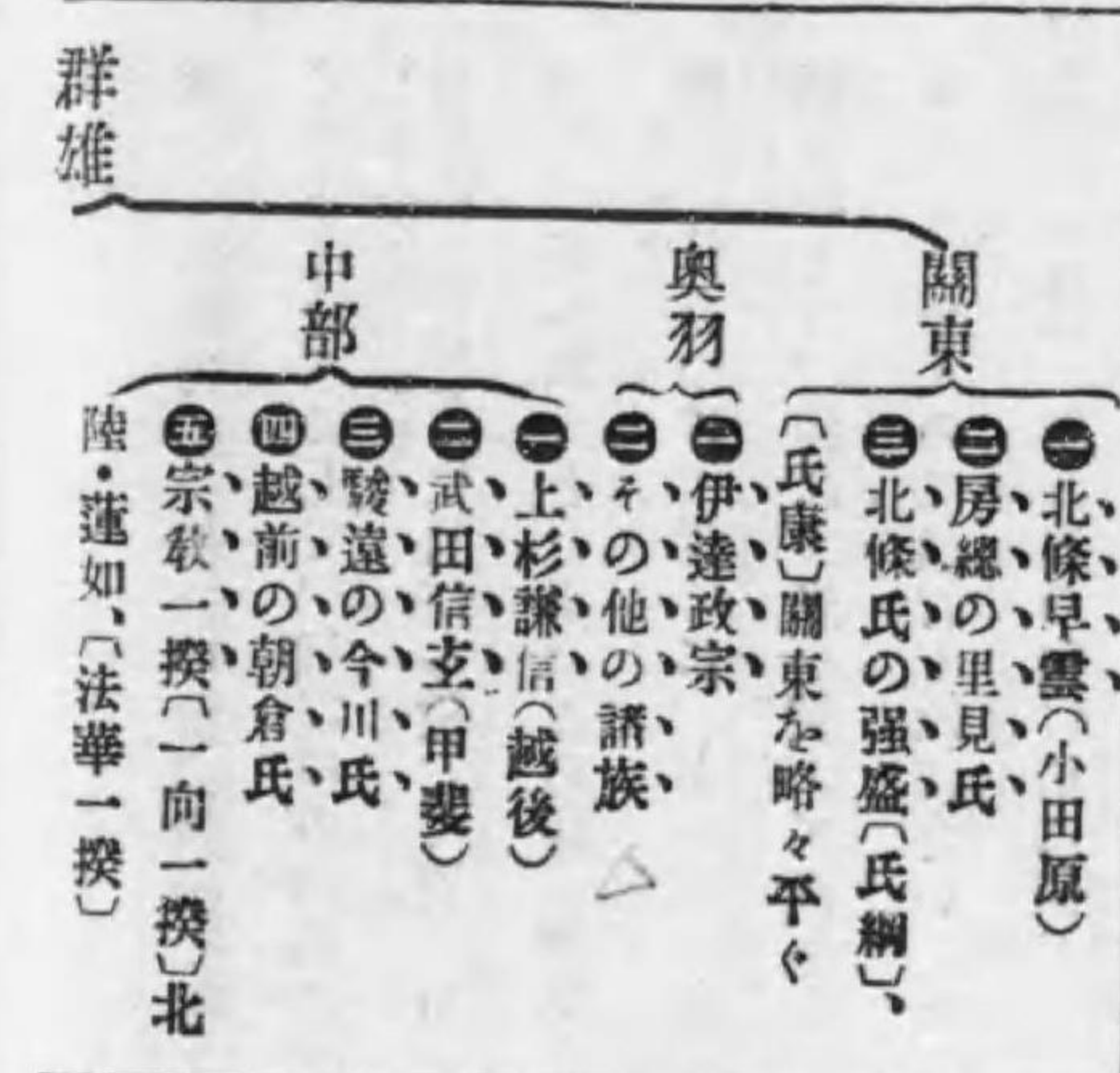
ず、十年の後、また三條西實隆の盡力により、大内義隆の献金を得るまでは、そのまま御放任遊ばした。蓋しこの御代は、朝廷の御式微殆んどその極に達したものの如く、遺老物語にも、「この時公家（朝廷の）以ての外に徴々にして、紫宸殿の御築地やぶれて、三條の橋の邊より、内侍所の御燈明の光見えしとなり。右近の橋の本には、茶を煎じて賣る者居て商ふ。その例によりて、その茶賣りし人の子孫共、年に一度び天子に茶を奉るといふ。この時、銀など様なものに札つけて、例へば百人一首・伊勢物語など云ふ札つけて、御廉に結びつけて置くに、日を経て後参れば、宸筆を染めて差し出されたりといふ。この比は、宮中な、關白料とて、袋にて米を買ふて歩きし。その袋今も二條殿（五攝家）に在りとかや云ふ。」とある。今人の想像だも及ばないことである。

【正親町天皇】 御式微の程は前に同じく、御即位の式は、三年の後、毛利元就の献金によりて行はれた。

**戦國時代の現出** 應仁の亂後絶えず打ち續く争亂に、將軍家も管領家も何れも共に衰へて、弱肉強食の争、下尅上の風潮が、愈々露骨に行はれる様になつて來た。即ち「權力は正義」なりを唯一の信條とする時代の出現だ。道義頹廢の時代の出現だ。戦國群雄割據時代の出現となつたのである。

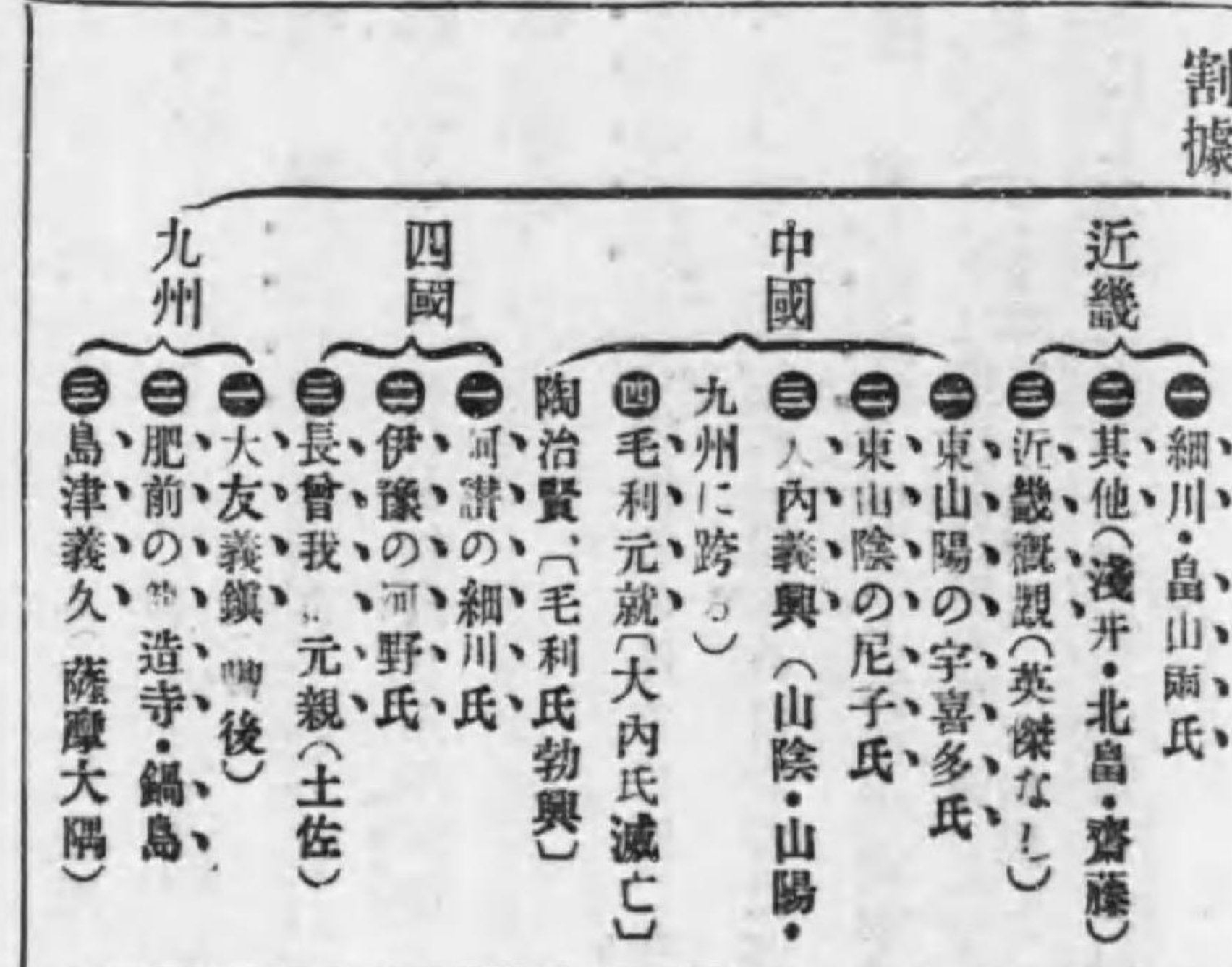
### 第十八章 群雄割據

弱肉強食、下剋上、權力即正義の世は遂に來た。天下は今や革命的な擾亂の數々で充たされた。濁流滔々として狂奔するノアの大洪水の襲來だ。木をこぎ家を倒し人を殺す大颯風の大通過だ。



ああこの大洪水減退の後、この大颯風一過の後、そこに吾等ははたして何を見出し得るだらうか。無秩序大混亂の新社會か。もしも然らば、この擾亂の無意義無主義を曝露するものだ、吾等國民の無能無力を語るものだ。或はそれとも、皇室のいやます御安泰を中心にして、健實に改革された新社會の生氣潑瀾たる新狀態か。もしも然らば、此革命は單なる革命ではなかつたのだ。大化改新や明治維新等に準じて、向上の一路をまつしぐらに目ざしての一大躍進に外ならなかつたのだ。與か

#### 割據



亡か生か死か、ルビコン川は越えられて國民的大試験の日は遂に來たのだ。

**關東** ①北條早雲 戰國群雄の魁をなして、まづ關東に起つたのは北條早雲(伊勢長氏)である。平氏より出で、伊勢に育ちて伊勢氏を名乗る。性聰明、夙に天下の形勢を窺つてゐたが、時たまたま堀越公方茶々丸が幼弱暗愚であつたから、まづ乗じて滅ぼして伊豆を取り、ついで兩上杉氏の不和を見てその地を蠶食し、かくて小田原城を本據として勢頗る振ふた。

②房總の里見氏 この頃房總に里見氏があつた。古河公方成氏の子義明を、下總の小弓に迎へて小弓御所と

稱し、之を奉じて勢強く、北條早雲と共にまさに關東の兩豪族であつた。

③北條氏の強盛 [氏綱] 早雲の子氏綱智謀にとむ。兵を武藏に進めては、上杉氏の據れる江戸、

川越の諸城を陥れ、また房総に進めては、里見配下の諸城を攻めて、次第に己が手に収めた。

【氏康】 氏綱の子氏康また權略に富む。上杉憲政を上野に討ち、之を越後に走らせたのをはじめと

して、軍功頗る多く、加ふるに仁政厚く民皆悦服した。さればこの時、伊豆・相模・武蔵・上野・房

總の諸國その治下にあり、早雲以來約六十年の宿志たる關東平定の大業は略完成されたのである。

奥羽 伊達政宗 奥羽にては伊達政宗、頻りに四近を征略し、遂に會津七郡を領して、東北の

重鎮となつた。されど如何せん地僻遠 覇を中原に唱へんとするには、最も不利益の立場にあつ

たのである。

【其他の諸族】 その他この地方には、葦名(岩代)・最上(羽前)・秋田(羽後)・南部(陸中)等の諸豪

族があつて、互に攻争相停めなかつたが、その攻争は、中原の大勢とは殆んど没交渉であつた。

中部 上杉謙信 山内上杉氏の家宰長尾氏は、さきに越後に自立して、勢稍々振つてゐたが、

長尾景虎(十三代將軍義輝より、輝の一字を與へられ)の時、上杉憲政(山内)來りて援を求め、景虎に

讓るに「上杉」の家名と「管領」の職とを以てした。之より景虎名を上杉謙信と改め、屢々兵を出し

て關東の北條氏及甲斐の武田氏等と戦ひ、また西の方越中・能登を平けて漸く京都に近づかうとし

た。

【謙信の人物】 謙信は長尾爲景の第二子、剛勇を以て謳はれ、また義を重んずること強く、古來男の中の男、

武士中の武士と稱せられる。例へば、よし上杉家の將來を慮つた爲とはいへ、優柔不斷の兄を追ひて己れ

之に代つて上杉家を嗣いだことを深く悔ひ、一生妻を娶らずして己が子孫を斷つた事、或は上杉憲政の援

けて、屢々北條氏と戦つた事、またかの甲斐の信玄と對陣した時、その信玄の軍に多量の鹽・贈與して、

以て危急を救助した事等、今尙ほ賞め稱へられる美談である。

【武田信玄】 時に甲斐に武田晴信(第十二代將軍義晴より、晴の一字を與へられ)あり、隣國信濃を併呑

せんとして、連年兵をここに向け、まづ諏訪氏(諏訪平)を滅ぼし、次に村上氏(上田地方)及び小

笠原氏(長野市地方)の領地を奪ひ、また木曾氏をも降した。然るに村上義清之に黙せず、報復の

師を起さんとして、越後に赴き謙信に頼つた。かくて争は轉じて、武田・上杉兩雄の對陣となつた。

即ち川中島の戦である。

【信玄の幼時】 武田氏は新羅三郎義光(源義家)の弟より出で、代々甲斐の領主であつた。而して信玄は、幼よ

り頗る智謀深く、性沈毅、用兵妙を得、十六才の初陣の時既に、父信虎が兵八千を以て而も攻め陥れ兼れ

大聖城、僅かの手兵三百を以て見事に陥れたといふことである。

【川中島の戦】 上杉・武田兩雄の對陣は川中島(信濃川の上流、即ち千曲・犀川の會合點)で行はれた。謙信の襲撃は疾風迅雷である。信玄の守備は沈着剛毅である。何れも古今に絶する名將のこととて、龍蟠虎搏、互に寸分の隙を示さず、まさに兩強チームの火花相散るクロスゲームだ。されば年に年を重ねること二十有餘、而も遂に雌雄を決せずして終結に及んだ。

鞭聲肅々、夜渡河、曉見千兵擁大牙、遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇、  
頼山陽のこの詩を口吟む時、誰か血混き肉躍るを覺えないものがあるか。

③駿遠の今川氏 今川氏は足利氏の一族、代々駿河・遠江の地を領してゐたが、義元にいたりて勢頗る強く、參河を併せ、進みて尾張に入り、まさに京都に入らんとするの概を示した。されど正親町天皇の永祿三年、桶狭間(實は田樂狭間)に於て、織田信長の強襲をうけて敗死するに及び、今川氏また振はず、久しからずして武田氏に攻め滅ぼされた。

④越前の朝倉氏 越前もも管領家斯波氏の所領であつた。然るに斯波氏衰ふるや、その臣朝倉氏代り起りて、その威一時北陸を風靡するものがあつた。

⑤宗教一揆 【一向一揆】 親鸞八世の法孫に蓮如上人といふ人があつた。辯才一世に卓で、専心布教に力を捧げてゐたが、比叡山の衆徒に嫉まれ忌まれて、此處に居る能はず。漂然去りて、姿を北陸に表はし、荊棘を開き、山地を平け、越前吉崎(加賀・越前兩國境の海岸)に一寺を卜した。ここに於て遠近その風貌を慕ひ、集ひ來りて法を聽く者その數を知らず、忽ちにして隱然たる民衆的一大勢力を形成した。然るに権力は即正義なる當時の習ひ。身を法門に托する彼等も亦、いつしか専恣横暴なる南都・北嶺の僧兵的性質を帯ぶるに至り、或時は法外の要求を領主に強訴し、また或時は堂々干戈を執りて爲政階級と相衝突した。加賀の領主富樫氏は、實にかくして彼等に攻め滅ぼされたのである。

【法華一揆】 當時は、獨り北陸の一向宗徒のみならず、各地におけるその他の各宗徒も亦、屢々一揆を起した。就中強盛だつたのは近畿地方に起つた法華一揆である。

近畿 ①細川・畠山氏 近畿各地はもとその大部分、細川・畠山の兩管領家の勢力の下にあつた。されど時勢の推移と共に、畠山氏まづ衰へて、紀伊・河内に兩畠山氏相争ひ、ついで細川氏衰へて、その臣三好氏に滅ぼされ、三好氏は更にその臣松永氏に滅ぼされた。